

一般国道
3号線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集

合の原遺跡

福岡県筑紫野市所在遺跡の調査

1986

福岡県教育委員会

合の原遺跡

福岡県筑紫野市所在遺跡の調査



合の原遺跡とその周辺俯瞰

序

国道建設に係る埋蔵文化財の保護等に関しましては、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所と当教育委員会文化課とは、幾度となく協議を重ねてきたところであります。

一般国道3号線筑紫野バイパス建設予定地内におきましても、協議の結果をもとに事前の発掘調査を継続してまいりましたが、このたび、昭和57年度から59年度に調査いたしましたうちの合の原遺跡の調査成果を記録保存として刊行するはこびとなりました。

発刊にあたりまして、調査に御協力いただいた関係各位に心から御礼申し上げますとともに、本調査報告書が文化財の普及活用に広く利用されることを切に希望するところであります。

昭和61年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

1. 本書は、昭和57年度から昭和59年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道3号筑紫野バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財発掘調査の第1冊目の報告書である。
2. 本書には、7・8・10・11・13・14地点は遺構が存在しておらず、I章でその経緯を述べたに留めた。収録した主な遺跡は、9地点（合の原遺跡）と12地点（真竹遺跡）のみである。
3. 合の原遺跡の実測図は、橋口達也、馬田弘稔、佐々木隆彦が、12地点の実測図は、橋口、佐々木が作製した。
遺構の製図並びに遺物の実測は、佐々木の他、豊福弥生・鶴田佳子・平田春美・原富子の協力があった。また、一部中間研志にお願いした。
4. 遺構の写真は、橋口、佐々木が撮影し、その他は空中写真（気球写真）を使用した。遺物写真は、九州歴史資料館技術主査の石丸洋氏の指導を受け藤美代子・矢野明美にお願いした。
5. 鉄器処理は、九州歴史資料館技術主査横田義章氏にお願いした。
6. 遺物整理は、福岡県教育庁文化課整理指導員である岩瀬正信の指導のもとで九州歴史資料館で行った。
7. 竪穴住居跡の面積値は、プランニメーターによる測定である。
8. 本書の執筆は、I・IIを橋口が、その他は佐々木が分担した。
9. 本書の編集は、佐々木が担当した。

本文目次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	3
III 発掘調査の記録	
1 合の原遺跡の調査	
1 遺跡の概要	7
2 弥生時代の遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
(2) 貯蔵穴	28
(3) 土壙	42
(4) 竪穴遺構	47
(5) V字溝状遺構	49
(6) 特殊遺構	50
(7) 弥生時代のその他の遺物	51
3 古墳時代以降の遺構と遺物	52
(1) 横穴墓	52
(2) 古墳時代のその他の遺物	57
2 真竹遺跡の調査	
遺跡の概要	58
IV おわりに	60
合の原集落の性格と位置付け	60

図 版 目 次

- 図 版 1 (1) 合の原遺跡とその周辺俯瞰
(2) 合の原遺跡俯瞰
- 図 版 2 (1) 1号竪穴住居跡と1号竪穴遺構
(2) 2号竪穴住居跡
- 図 版 3 (1) 3号・11号竪穴住居跡と1号・12号貯蔵穴
(2) 4号竪穴住居跡
- 図 版 4 (1) 5号竪穴住居跡
(2) 6号竪穴住居跡
- 図 版 5 (1) 7号竪穴住居跡
(2) 7号竪穴住居跡屋内貯蔵穴
- 図 版 6 (1) 8号・9号竪穴住居跡と3号・6号・7号貯蔵穴
(2) 10号竪穴住居跡と9号貯蔵穴、6号土壙
- 図 版 7 (1) 1号・12号貯蔵穴（南から）
(2) 3号貯蔵穴（南から）
- 図 版 8 (1) 4号貯蔵穴（北から）
(2) 4号貯蔵穴上層遺物出土状態
- 図 版 9 (1) 4号貯蔵穴下層遺物出土状態
(2) 5号貯蔵穴（西から）
- 図 版 10 (1) 6号貯蔵穴遺物出土状態
(2) 6号貯蔵穴（東から）
- 図 版 11 (1) 7号貯蔵穴（北から）
(2) 8号貯蔵穴（南から）
- 図 版 12 (1) 9号貯蔵穴と6号土壙（南から）
(2) 10号貯蔵穴（南東から）
- 図 版 13 (1) 11号貯蔵穴（東から）
(2) 1号土壙（南から）
- 図 版 14 (1) 2号土壙（南から）
(2) 4号土壙（南東から）
- 図 版 15 (1) V字溝状遺構と特殊遺構
(2) V字溝状遺構

- 図版 16 (1) V字溝状遺構(下から)
(2) V字溝状遺構埋土状態
- 図版 17 (1) 1号横穴墓(南から)
(2) 墓道から見た玄室
- 図版 18 (1) 1号横穴墓の玄室
(2) 2号横穴墓(南から)
- 図版 19 (1) 2号横穴墓の閉塞石と墓道の遺物出土状態
(2) 2号横穴墓の玄室
- 図版 20 (1) 3号横穴墓(南西から)
(2) 3号横穴墓の玄室
- 図版 21 (1) 4号横穴墓の閉塞状況と副室閉塞状態
(2) 4号横穴墓の玄室
- 図版 22 2号～5号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 23 5号～7号竖穴住居跡出土遺物
- 図版 24 7号～9号・11号竖穴住居跡, 3号・4号貯蔵穴出土遺物
- 図版 25 4号貯蔵穴出土遺物
- 図版 26 4号貯蔵穴出土遺物
- 図版 27 4号～7号貯蔵穴, 2号土壙出土遺物
- 図版 28 4号土壙, 2号竖穴遺構, V字溝状遺構, 特殊遺構, P2, 表採, 2号・4号横穴墓出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	第10地点出土石庖丁(1/2).....	1
第 2 図	合の原遺跡と周辺の主要遺跡分布図(1/25,000).....	4
第 3 図	筑紫野バイパス路線図とその調査地点(1/1,000).....	5
第 4 図	合の原遺跡と周辺地形図及びその調査区(1/200).....	折込み
第 5 図	1号竖穴住居跡, 1号竖穴遺構実測図(1/60).....	8
第 6 図	2号竖穴住居跡実測図(1/60).....	10
第 7 図	2号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	10
第 8 図	2号竖穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	11
第 9 図	3号・11号竖穴住居跡実測図(1/60).....	12

第 10 図	3号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	13
第 11 図	3号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2)	13
第 12 図	4号竖穴住居跡実測図 (1/60)	14
第 13 図	4号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	15
第 14 図	4号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2)	16
第 15 図	5号竖穴住居跡実測図 (1/60)	17
第 16 図	5号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	18
第 17 図	5号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2)	18
第 18 図	6号竖穴住居跡実測図 (1/60)	19
第 19 図	6号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	20
第 20 図	6号竖穴住居跡出土石器・鉄器実測図 (1/2)	21
第 21 図	7号竖穴住居跡実測図 (1/60)	折込み
第 22 図	7号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	23
第 23 図	7号竖穴住居跡 (一部3号貯蔵穴) 出土石器実測図 (1/2)	23
第 24 図	8号竖穴住居跡実測図 (1/60)	24
第 25 図	8号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	25
第 26 図	9号竖穴住居跡実測図 (1/60)	25
第 27 図	9号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	26
第 28 図	10号竖穴住居跡実測図 (1/60)	27
第 29 図	10号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	27
第 30 図	11号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	28
第 31 図	1号・2号・12号貯蔵穴実測図 (1/40)	29
第 32 図	3号～5号貯蔵穴実測図 (1/40)	32
第 33 図	1号～4号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	33
第 34 図	4号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	34
第 35 図	4号・6号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	36
第 36 図	6号～9号貯蔵穴, 6号土壙実測図 (1/40)	39
第 37 図	3号・5号～7号貯蔵穴出土石器実測図 (1/2)	40
第 38 図	10号・11号貯蔵穴実測図 (1/40)	41
第 39 図	1号～4号土壙実測図 (1/40)	44
第 40 図	1号・2号・6号土壙出土土器実測図 (1/4)	45
第 41 図	4号土壙出土石器実測図 (1/2)	46
第 42 図	5号土壙実測図 (1/40)	46

第 43 図	2号竪穴遺構実測図 (1/60).....	48
第 44 図	2号竪穴遺構出土土器実測図 (1/4).....	48
第 45 図	V字溝状遺構土層断面図 (1/60).....	49
第 46 図	V字溝状遺構出土土器実測図 (1/4).....	50
第 47 図	特殊遺構実測図 (1/60).....	50
第 48 図	特殊遺構出土土器実測図 (1/4).....	51
第 49 図	P-2出土土器実測図 (1/4).....	51
第 50 図	表採石器実測図 (1/2).....	52
第 51 図	1号横穴墓実測図 (1/60).....	折込み
第 52 図	2号横穴墓実測図 (1/60).....	折込み
第 53 図	2号横穴墓出土土器実測図 (1/4).....	53
第 54 図	3号横穴墓実測図 (1/60).....	54
第 55 図	4号横穴墓実測図 (1/60).....	56
第 56 図	4号横穴墓出土土器実測図 (1/4).....	56
第 57 図	4号横穴墓出土鉄器実測図 (1/2).....	56
第 58 図	南斜面表採土器実測図 (1/4).....	57
第 59 図	真竹遺跡の地形図と調査区 (1/200).....	59
第 60 図	真竹遺跡遺構配置図 (1/400).....	60
第 61 図	竪穴住居と貯蔵穴の関係図 (1/1,000).....	62

付 図

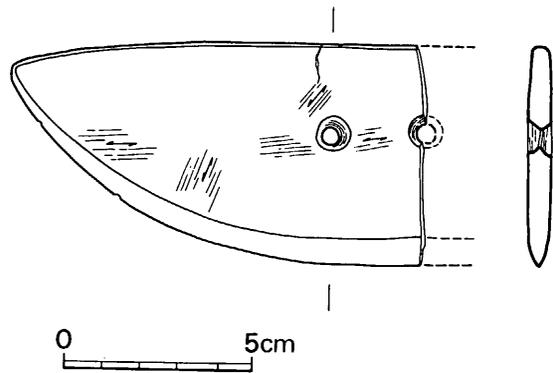
付 図	合の原遺跡遺構配置図 (1/200)
-----	--------------------

I 調査に至る経過

一般国道3号線筑紫野バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財包蔵地についての、建設省九州地方建設局福岡工事事務所から福岡県文化課への分布調査の依頼に対して、昭和51年度以前に文化課は14箇所の包蔵推定地を示していた。これらの包蔵推定地はそのすべてが低丘陵・低台地であった。このような地形をなす箇所を埋蔵文化財包蔵推定地として掲げた根拠としてその一つは、それまで福岡県文化課がかかわってきた筑紫野市、小郡市付近の低丘陵（すなわち筑前・筑後・肥前の三国境であるところから三国丘陵とも呼ばれるところであるが）一帯は弥生時代を中心として遺跡の密集度の著しいところであること。一つには装飾古墳として著名な国指定史跡五郎山古墳に近接していることから古墳等の存在が予測されたからであった。

道路建設は小郡・筑紫野両市にまたがって計画されている大規模宅地造成「中九州ニュータウン」とも関連し、それに先行するような形で実施されることとなった。これに伴ない昭和56年度より筑紫野市原田地区内の調査を行うこととなった。調査前に先に示していた14箇所の調査予定地を踏査したが、第11地点は路線内に個人住宅が存在し、第14地点は土取工事による崖面崩壊が進行し危険な状態であったため、調査は不可能と判断せざるを得なかった。

昭和56年度には第10地点の調査を行った。この地点は五郎山古墳に東隣する丘陵で住居跡等の存在が予測されたが、実際には弥生時代の土器片若干と頁岩質砂岩製の石庖丁1個（第3図参照）が出土したのみで、近辺に弥生時代前期から中期前半頃の遺構の存在が推定されるというだけで、路線内には何らの遺構も存在しなかった。



第1図 第10地点出土庖丁(1/2)

昭和57年度には第13地点の調査を行った。この丘陵は実際に伐採し、掘ってみると頂部は比較的狭く居住地としては不適當と思われた。またバイパス路線は丘頂から現3号線に向けた西北斜面にかかる部分が多く、この第13地点でも遺構の存在は確認できなかった。

昭和58年度には第12地点の調査を実施した。この地点は丘頂部も広く住居跡等の存在が予測された。調査の結果は後述するように、住居跡・貯蔵穴等は確認されたが、住居跡は床面よりかなり下まで削平を受けたものと考えられ、その痕跡を残すのみであった。出土遺物も土器片少量、黒曜石・サヌカイト等の剥片などで、図示し得るものはほとんどない。第12地点では

かなりの削平を受けているとはいえ、遺構の存在が確認されたので、連続する同丘陵の南側に遺構の範囲は広がるものと想定された。

昭和59年度には第7・8・9地点の調査を行った。第7地点は全面の表土剥ぎ、第8地点はトレンチを設けて発掘したが、この2地点では何らの遺構も存在しなかった。第9地点は丘頂部に弥生時代中期初頭から前半の住居跡・貯蔵穴群が存在し、南側斜面にはそれに通ずる切通しの道路が確認された。また南側の斜面には円墳1基（筑紫野市教育委員会調査）および横穴4基が検出された。

以上の原田地区の調査の間に中九州ニュータウン計画地内の小郡市・筑紫野市による調査も併行して進行し、この地域の弥生時代・古墳時代の様相が次第に明らかとなりつつある。当初はこの地域のほぼすべての低丘陵に弥生時代の住居跡・貯蔵穴群、木棺墓・甕棺墓等が存在することを予測していたが、調査の結果は宝満川に面した低地すなわち水田適地を擁した三国丘陵の東側に遺跡は集中し、現3号線に面する西側の地域では遺跡の密度は薄いことがわかってきた。国鉄原田駅の西側付近に古墳等が知られており、五郎山古墳、合の原遺跡（第9地点）等はこれらと同一の地域的まとまりをもつものと考えられる。

調査関係者は下記のとおりである。

昭和56年度 第10地点の調査

総括	福岡県教育委員会	教育長	友野隆
		文化課長	藤井功
庶務・会計		同主任主事	三瓶寧夫
調査担当		同主任技師	橋口達也
		同主任技師	池辺元明

昭和57年度 第13地点の調査

総括	福岡県教育委員会	教育長	友野隆
		文化課長	藤井功
庶務・会計		同主任主事	三瓶寧夫
調査担当		同主任技師	橋口達也

昭和58年度 第12地点の調査

総括	福岡県教育委員会	教育長	友野隆
		文化課長	藤井功
庶務・会計		同主任主事	川村喜一郎
調査担当		同技術主査	橋口達也

同 主任技師 佐々木 隆彦

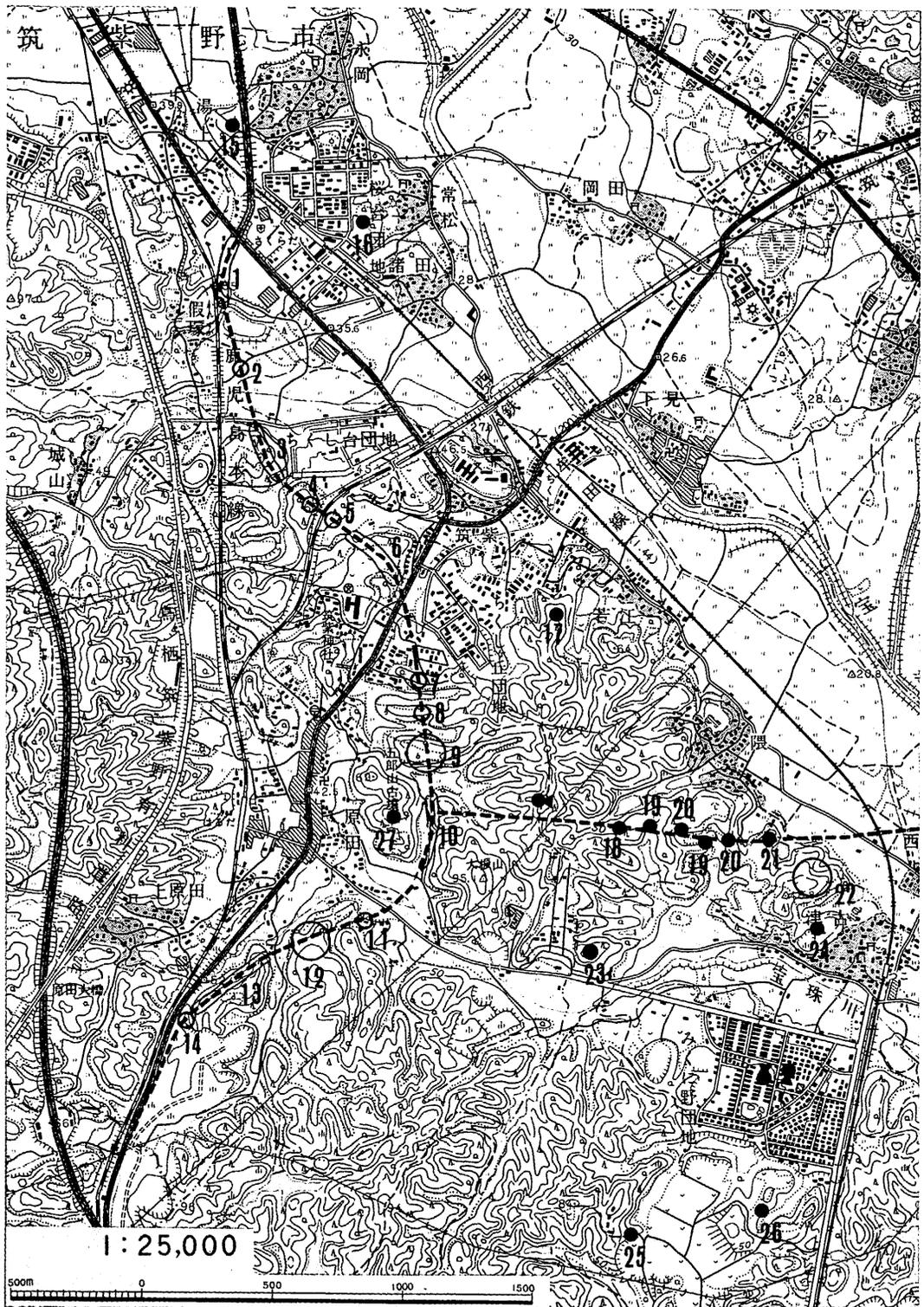
昭和59年度 第7・8・9地点の調査

総括	福岡県教育委員会	教育長	友野 隆
		文化課長	前田 栄一
庶務・会計		同 主任主事	川村 喜一郎
調査担当		同 技術主査	橋口 達也
		同 主任技師	馬田 弘稔
		同 主任技師	佐々木 隆彦

なお、建設省九州地方建設局福岡工事事務所には調査についての多大な御配慮をいただき、また昭和58・59年度の調査においては中九州ニュータウン計画地内の調査を担当されている草場啓一氏をはじめ筑紫野市教育委員会、また地元原田地区の方々の多大の御協力を賜わり、調査が順調に進行したことに深く感謝いたします。

II 遺跡の位置と環境

筑紫野市原田地区、隈・西小田地区、小都市津古・三沢付近は、福岡・春日方面から南下すれば太宰府市水城付近で急に狭まり、太宰府・二日市を経てまたこの地域で東は甘木・朝倉方面へ、南は筑後地方へ、西南には肥前へと大きくひらけ交通の要衝を占めていることは一目瞭然である。昔から原田を経て基山・鳥栖へと通ずるルート、隈・西小田、津古、三沢を経て小郡へと通ずるルート、山家、石櫃、東小田、松崎を経て筑後へと通ずるルートの3ルートがあったことがわかる。原田を経るルートは国指定史跡の装飾古墳五郎山古墳に象徴されるようにおそくとも古墳時代には確立していたものとみられ、基肆城の存在からもこのルートが太宰府防衛上の戦略的拠点であったことがうかがえる。その後宿場町として栄え、また今日では国道3号線、九州縦貫自動車道、鳥栖・筑紫野有料道路等の主要交通網がこの地区に集中している。隈・西小田、津古、三沢を経るルートと山家から松崎を経るルートの宝満川の両流域のルートは弥生時代の青銅器出土地、または青銅器・鉄器を副葬した甕棺等が隈、大板井、吹田、東小田、乙隈等で知られ、はやく弥生時代には確立していたものと思われる。山家から松崎を経るルートは江戸時代宿場町で栄えたことによってその後も要衝ではあったが現在ではややとりの



第 2 図 合の原遺跡と周辺の主要遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | |
|-------------------|-------------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 第 1 地点 | 2. 第 2 地点 | 3. 第 3 地点 | 4. 第 4 地点 | 5. 第 5 地点 |
| 6. 第 6 地点 | 7. 第 7 地点 | 8. 第 8 地点 | 9. 合の原遺跡 | 10. 第 10 地点 |
| 11. 第 11 地点 | 12. 真竹遺跡 | 13. 第 13 地点 | 14. 第 14 地点 | 15. 永岡遺跡 |
| 16. 常松遺跡 | 17. 前畑遺跡 | 18. 池の上遺跡 | 19. 平原遺跡 | 20. 橋詰遺跡 |
| 21. 天神遺跡 | 22. 隈遺跡 | 23. 郷所遺跡 | 24. 津古内畑遺跡 | 25. ハサコの宮遺跡 |
| 26. 種畜場遺跡 (県指定史跡) | 27. 五郎山古墳 (国指定史跡) | | | |



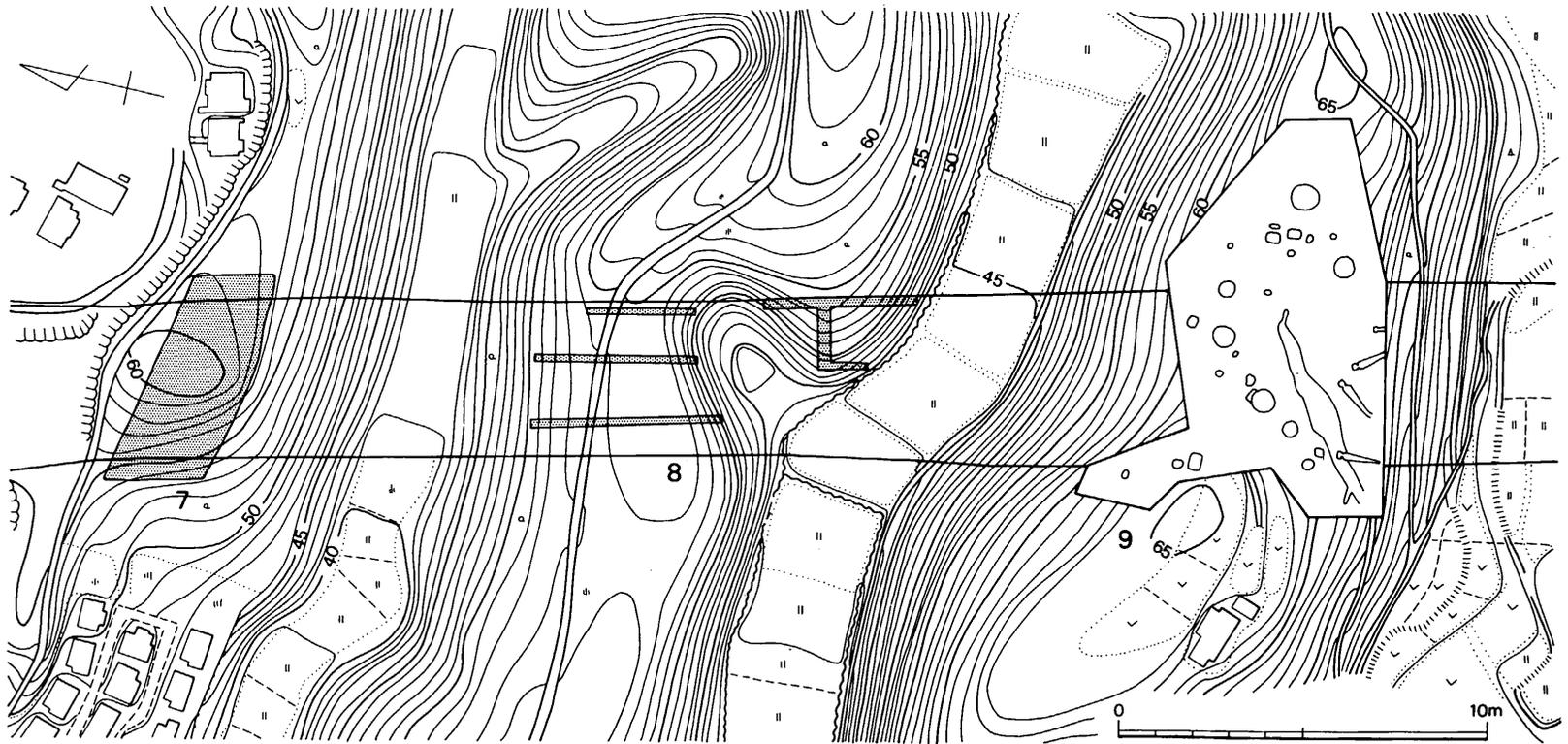
第 3 図 筑紫野バイパス路線図とその調査地点 (1/1,000)

こされた感が強い。隈・西小田、津古、三沢を経る道は西鉄大牟田線が走り、現在でも主要交通網の一翼をになっているといえよう。

宝満川に面する地域は弥生時代前期には集落が形成されはじめ、はやくも弥生時代前期後半頃から隈・西小田、津古、三沢等の低丘陵へも集落が進出を開始し、その後この現象は中期前半までひきつづいている。さきにもみたように原田地区をも含めたこの丘陵一带に同様の現象がみられるものと考えられていたが、最近の調査結果からすれば、宝満川に面した東側斜面はどの丘陵にも遺跡が存在するが、反対側の西側斜面には遺跡のないことが多く、あっても密度が低い。原田地区では合の原遺跡（第9地点）で弥生時代中期初頭から前葉の集落跡が確認されたのが、現在のところ最もはやい集落の形成と思われる。現状での調査の多少にもよるが現段階ではやはり東側斜面に比して遺跡の密度は疎といわざるを得ない。しかしこの頃から国鉄原田駅を中心とする地区へと集落が進出し、古墳時代には五郎山古墳のような装飾古墳をつくるまでに至ったものと思われる。原田地区の南に位置する佐賀県基山町等もこの点では原田地区と同様な条件をもつものと考えられる。

この地域は筑前・筑後・肥前の三国境であることはさきにものべた。出土する土器は春日・太宰府等のものと同様なものが圧倒的であり、これらと同一の文化的地方的諸特徴を示すといつてよいが、地理的条件から他地域との交流を示す遺構・遺物が少量ではあるが見い出される。遺物としては特に弥生土器に筑後の特徴をもったものが見られる。筑後の特徴は小都市三沢付近に行くときさらに顕著になるが、それに比べれば隣接するとはいえあまり目立ったものではなく、はやくから地域的差が生じていたものとみられる。

今回の調査でこの地域ではじめて知らされたものとして横穴がある。横穴は遠賀川以東、筑後川以南を主な分布圏とするものである。冷水峠を越えて遠賀川流域からもたらされた可能性最も大きい。弥生時代から遠賀川流域の土器が米の山峠、冷水峠を越えて太宰府市、筑紫野市付近に若干流入し、その逆もみられることから峠越えの交流があったものとみられ、古墳時代・歴史時代へとひきつづいたものと考えられる。通婚圏の問題等ともからませて興味深い。時期的には上限をおさえられなかったが、古墳時代後期から奈良時代のものであることはまちがいない。



第 4 図 合の原遺跡と周辺地形図及びその調査区 (1/200)

III 発掘調査の記録

1 合の原遺跡の調査

1 遺跡の概要

合の原遺跡は、福岡県筑紫野市大字原田字合の原に位置する。遺跡はその一帯に連綿と連なる低丘陵群の西側に当り、狭い谷が入り組んだ舌状丘陵上に立地する。検証した遺構は丘陵の標高54mから65mの範囲内に分布している。

丘陵の周囲には現在でも谷水田が営まれ、狭い乍らも生活基盤の一翼を担っている。しかし、遺跡の位置する丘陵は東側に広がる水田地帯に面しておらず、生産性においても劣勢地域であることから集落の経営も小規模で、検出した竪穴住居の軒数も11軒と少ない。検証した竪穴住居跡は隅円長方形と円形とが在り、重複関係から方形住居よりも円形住居が新しい。

その内訳は

円形住居跡…………… 7 軒

方形住居跡…………… 4 軒

である。

しかも、各竪穴住居には貯蔵穴を付属施設として具備し、一定程度の相互関係の把握が可能であることは興味深い事象と言える。

貯蔵穴の総数は12基を数えるが、その中には貯蔵施設と捉えるには若干問題のある遺構も存在する。

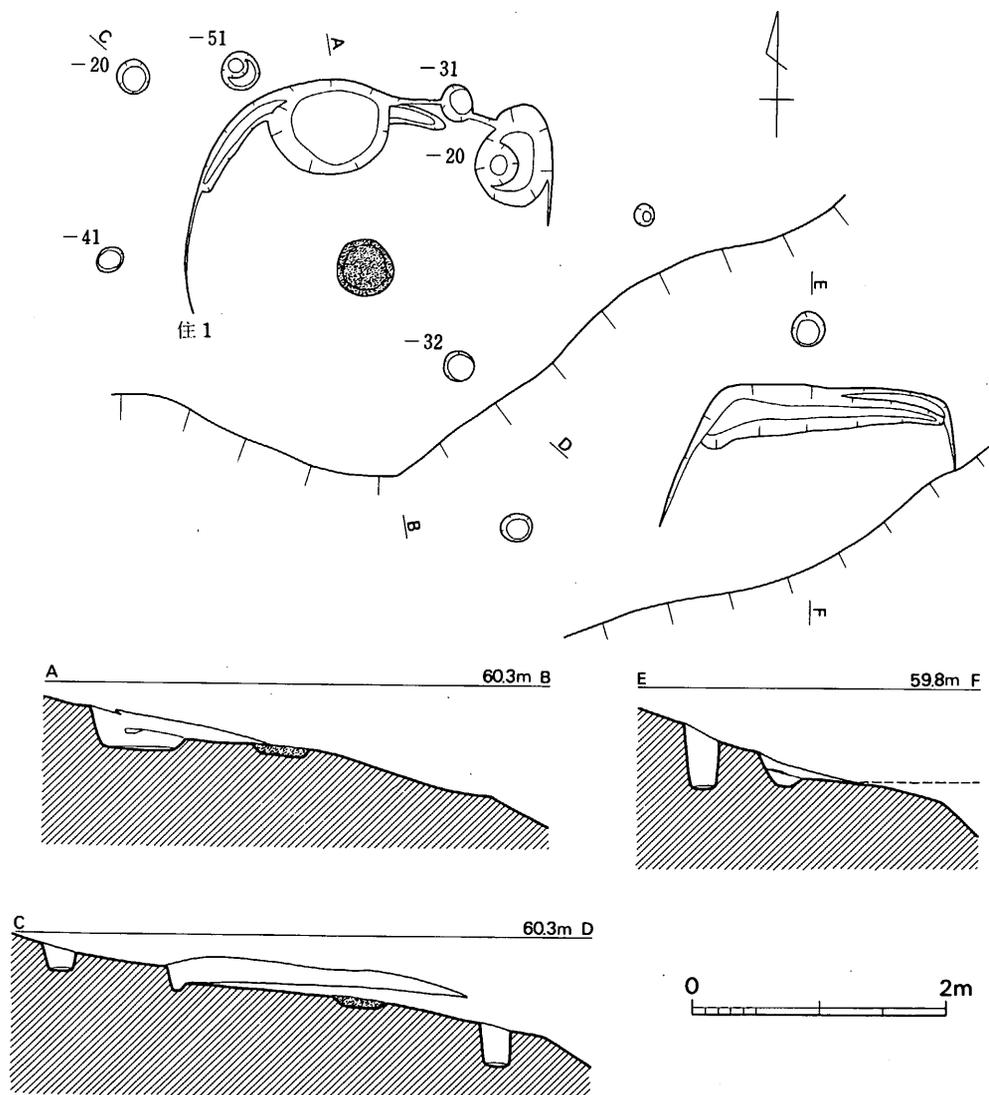
また、丘陵の南斜面には斜めに掘削する形でV字溝状遺構を設置し、その登口には大形のピット2個を有す特殊な遺構を設ける等、弥生時代中期初頭頃の完結的な集落の様相を示唆しており、今後小規模集落のモデルケースに相当すると考えられる。

一方、南斜面で確認した横穴墓は現在調査された検出例では最西端に位置することも注目値する。横穴墓の時期については、明確な遺物が出土していないため断言はできないが、最近合の原遺跡の周辺でも横穴墓の出土例があり、古墳時代後期頃の所産（6世紀後半頃）らしい。当該横穴墓もそれに近似する時期に比定しても大過はないものと考えられる。

2 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版2-1, 第5図)



第5図 1号竪穴住居跡, 1号竪穴遺構実測図 (1/60)

丘陵の南側斜面に設営した竪穴住居跡で、標高60m付近に位置する。平面プランは円形を呈すると考えられるが、南壁は無論のこと床面も約 $\frac{1}{2}$ が原形を保っていない。そのため住居の規模、床面積等の詳細は不明であるが、当該集落内で最小規模の竪穴住居である。

柱穴は床面上で2個検出したが、プランを復原すると柱穴が壁際に寄り過ぎていること等の不合理から主柱とはなり得ないと考えられる。床面の中央部には径45cmの炉を設け、その壁面は焼痕が顕著に残る。北壁傍には90cm×75cmの屋内土壇を付設し、両端は短い周溝と直結している。

しかし、上記の住居跡施設の内容及び規模等と他の住居跡のそれらを比較すると、当住居は簡易的な側面が強く、しかも非常に小形であることと相俟って集落に通じる道の登口付近に設営していることから、見張り小屋的な用途が考慮される。

出土遺物は皆無に近いが、当該遺構の時期は他の住居と同様弥生時代中期初頭頃であろう。

2号竪穴住居跡 (図版2-2, 第6図)

丘陵の南側斜面の標高61.0m付近に設営された竪穴住居跡である。平面形態は円形を呈すると推測されるが、南壁が遺存しておらず不明瞭である。規模、床面積等も明らかでないが、計測可能な東西径で5.10mを測る。

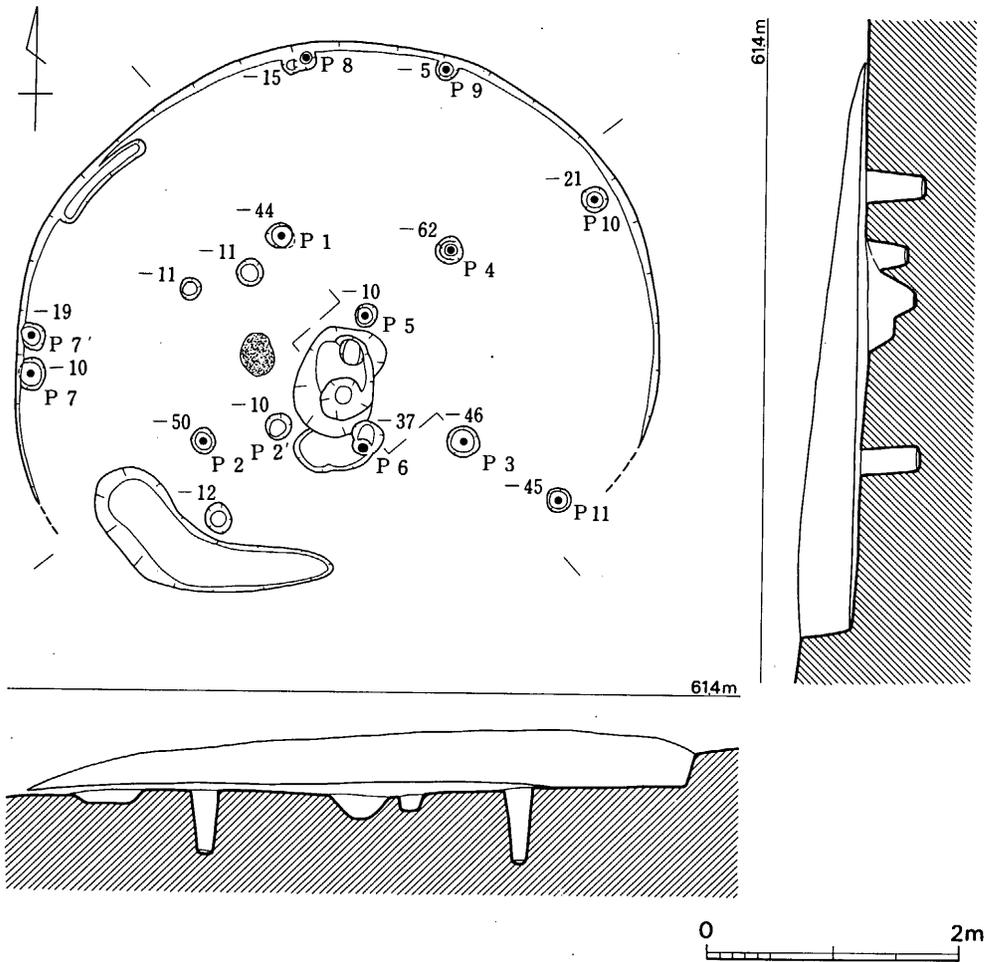
主柱は4本である。柱間で観る限りでは P_2 の東傍にある柱穴(P_2')が規則性を有しており主柱の1本と看取できるが、深さが10cmと浅く、しかも、他の3本が40cm強から60cm強と深く P_2 も50cmを測ることから、 P_2 を主柱の1本と理解した方が妥当とも思える。さらに、周辺の壁際には P_7 ~ P_{11} の補助柱と考えられる柱穴が廻る。また、床面の中央ピットを狭む様な形で P_5 ・ P_6 の2本の細い柱穴が見られる。各々の柱間は P_1 - P_2 1.75m (P_1 - P_2' 1.50m), P_2 - P_3 2.05m (P_2' - P_3 1.50m), P_3 - P_4 1.55m, P_4 - P_1 1.35mを測る。中央ピット内には黒褐色の埋土が充満しており、その西傍には不整形の焼痕が認められた。炉ないし明りとりとして使用していたのであろう。

出土遺物は甕の胴部片(図示不可能)と器台が2個体の他、蛤刃石斧、磨製石剣(石戈)、鑿形石斧がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期初頭頃であろう。

出土遺物

土器 (図版22, 第7図)

1・2の器台形土器がある。1は完形品で体部は細く、口縁部と裾部の外反度は鋭い。調整は外面が風化し不明であるが、縦ハケ仕上げであろう。内面はナデている。胎土は砂粒が多く

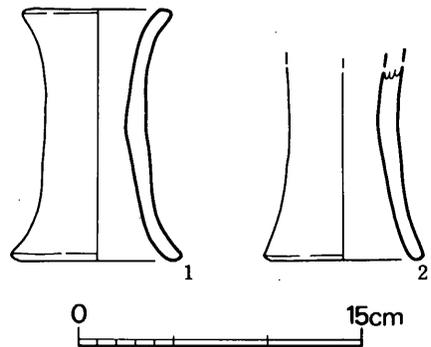


第 6 図 2号竖穴住居跡実測図 (1/60)

粗い。外面は二次加熱を受け赤味茶褐色を呈する。口径7.9cm、裾部径9.0cm、器高13.4cmを測る。2は胴上半部を欠失する器台で復原実測である。裾部の外反度は鈍い。胎土は1と同様砂粒が多く、金雲母を僅か乍ら混在する。色調は二次加熱のため1と同一である。復原口径8.5cmを測る。

石器 (図版22, 第8図)

1は玄武岩製の蛤刃石斧で刃部のみ遺存する。表面は風化が激しくざらついている。



第 7 図 2号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

2は輝緑凝灰岩製の磨製石剣か石戈の破片で小豆色を呈する。研ぎ痕は3方向に認められ、錆も不整いではあるが研ぎ出している。しかし、部分的に自然面を残すことから、製作時に剥離したのであろう。床面からの出土である。

3は鑿形石斧で蛇文岩製である。表面がかなりの部分剥落している。全長5.2cm、現存の幅2.6cm、厚さ9mmを測る。

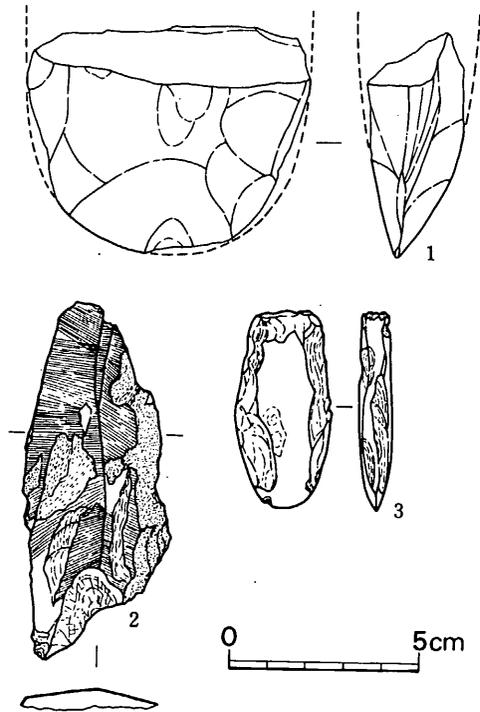
3号竪穴住居跡 (図版3-1, 第9図)

丘陵の鞍部状の箇所位置する竪穴住居跡で、標高61.5mに設営されている。調査区内で検出した住居で唯一重複関係にある竪穴住居で、隅円長方形乃至方形住居を切っている。平面形状は不整形を呈する。住居の規模は6.20m×6.25m、壁高は10cm～30cmを測る。

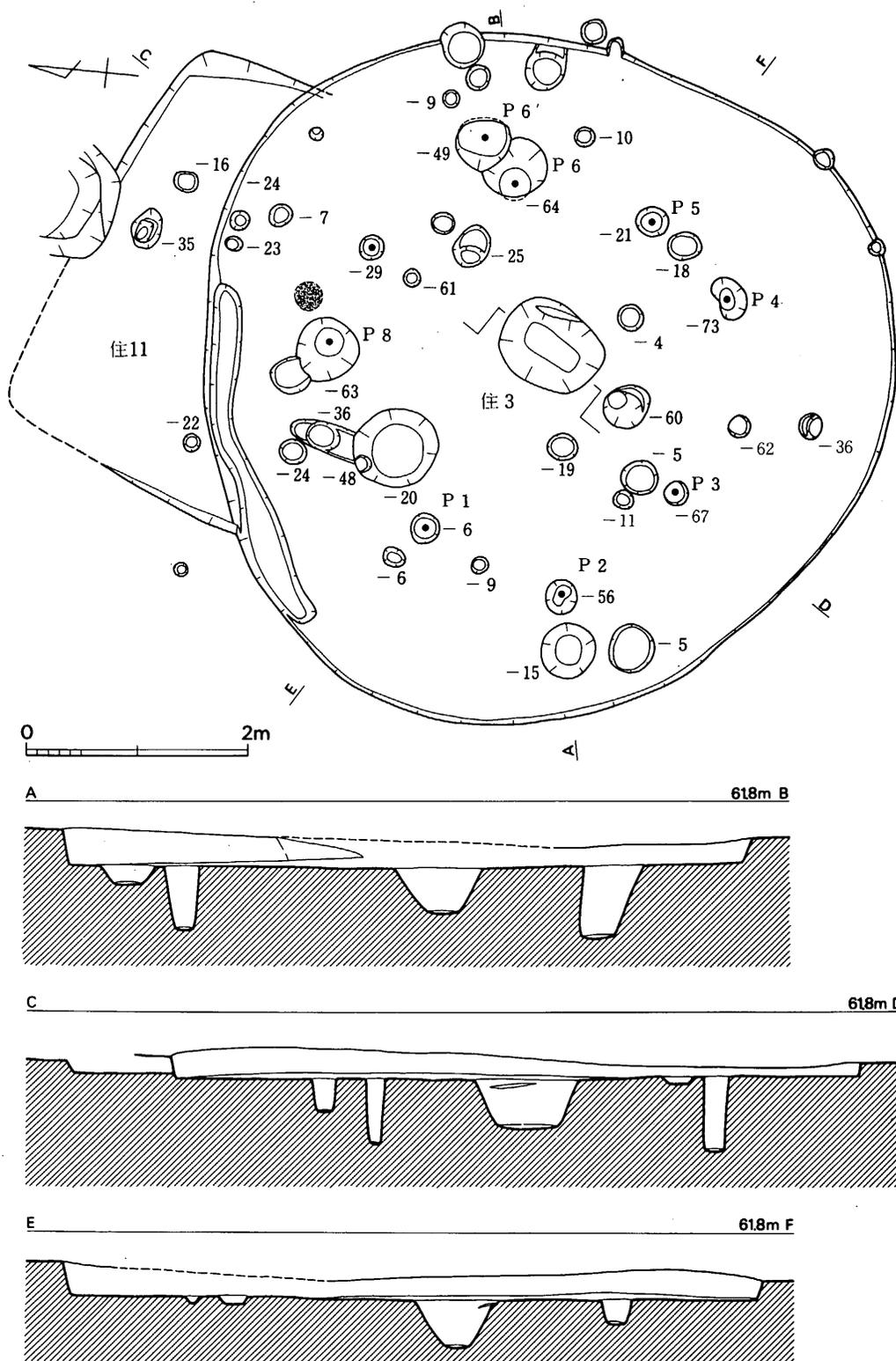
床面積は29.62㎡で、検出した住居群の中で2番目の広さを有す。

住居の床面上ではかなりの数の柱穴を検出したが、主柱となり得る柱穴は図面に記述したP₁～P₈の8本であろう。しかし、柱穴の深さに不均等性がみられることから不確定要素もあるが、柱穴の配置の点からは可能性が高い。この中のP₆のみ柱の建直しを計っている。各柱間はP₁～P₂1.40m, P₂～P₃1.40m, P₃～P₄1.80m, P₄～P₅1.00m, P₅～P₆1.30m (P₅～P₆'1.70m) P₆～P₇1.40m (P₆'～P₇1.40m), P₇～P₈90cm, P₈～P₁1.85mを測る。さらに、中央穴を狭む形で2本の棟持柱と考えられる柱穴も検証できた。

住居の北壁際には周溝とするには幅の広い溝を掘っている。北側の床面下(貼床下)から径25cmの焼痕を確認したが、重複関係にある11号竪穴住居の跡と解釈した方が妥当である。しかし、当該住居の床面上では焼痕は確かめられていない。住居の床面中央部には90cm×75cm、深さ45cmのピットを付設していた。そのピットの壁面には粘土をやや厚く塗布しており、部分的に剥落した粘土が底面に堆積していることも検証できた。この事実は全ての住居の中央ピットで認め得るものではないことから速断はし兼ねるが、水溜めの穴と考えることも可能で、住居を掘り込んだ土質が花崗岩の風化土であることから、粘土を塗布し水漏れ防止の策を講じたとも受け取ることができよう。



第8図 2号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)



第 9 图 3号·11号竖穴住居跡実測图 (1/60)

出土遺物は甕・器台・支脚の他、蛤刃石斧、石剣、黒曜石のチップが多数東側の床面上から出土しており、住居内で石鏃等の製作作業を行っていたと解釈できよう。出土土器から住居の時期は弥生時代中期初頭頃が付与できよう。

出土遺物

土器 (第10図)

1～3の甕形土器の底部がある。全てが上げ底をなし細みである。調整は風化が著しく不明で、表面がざらついている。総じて焼成は良好で、胎土は砂粒を多く含み、1・3は金雲母を若干含む。2は二次加熱を受けている。1の底径9.2cm, 2は6.9cm, 3は6.6cmを測る。

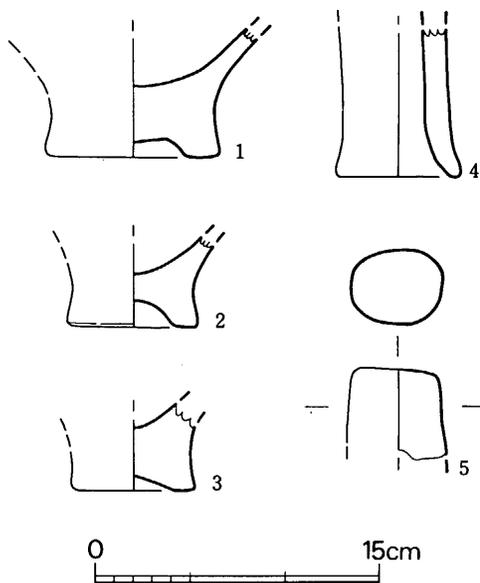
4は細みの器台で約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。裾部は僅かに外反する。胎土は甕と同様砂粒を多く含み良くない。黄橙色を呈する。調整は磨滅が激しく不明。復原裾部径6.8cmを測る。

5は支脚片で下半を欠失する。強い二次加熱を受け器面が荒れている。

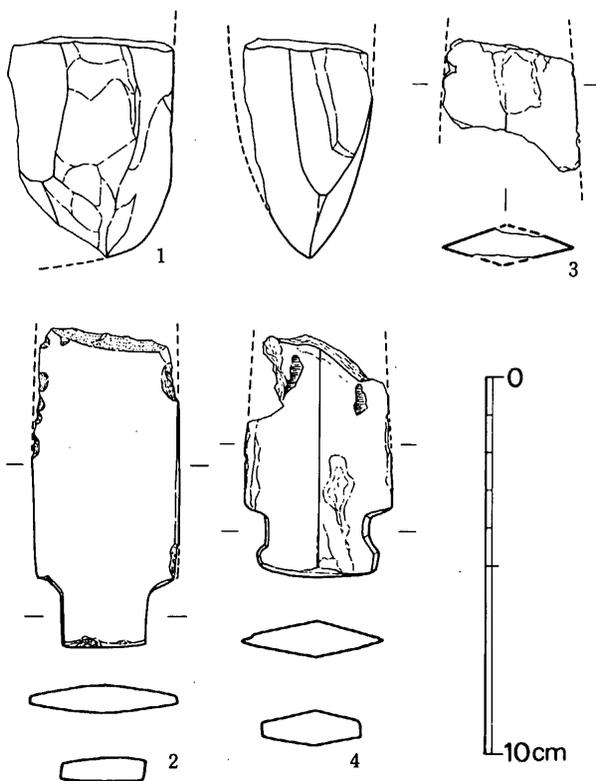
石器 (図版22, 第11図)

1は住居の床面から出土した玄武岩製の蛤刃石斧の破片である。表面が風化しざらついている。

2～4は磨製石剣片である。2は未製品で身の $\frac{1}{2}$ を欠損する。製作時に欠損したと考えられる。硬質砂岩製で現存する身には刃部を研ぎ出していないと同時に鏑も殆んど認めら



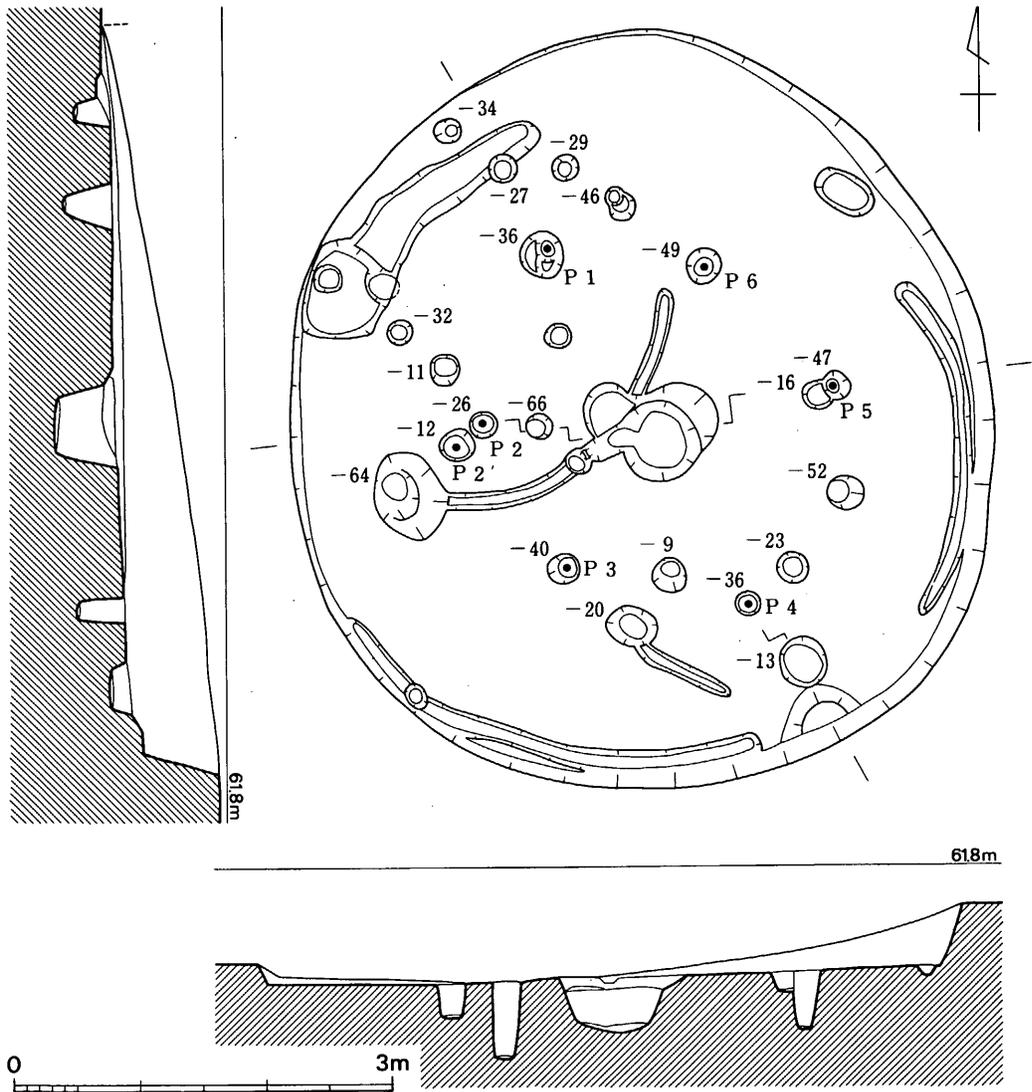
第10図 3号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第11図 3号竖穴住居跡出土石器実測図 (1/2)

れない。関部は明瞭で短い茎部を研ぎ出している。現存長8.4cm、幅3.9cm、厚さ7mm、茎部の長さ1.5cmを測る。3は切っ先に近い身の部分で剥落が著しい。砂岩製である。4は粘板岩製の石剣で表面が風化しざらついており、研ぎ面が部分的に残るに過ぎない。鏑は基部まで明瞭につけ、基部には柄を緊縛するための袂りを研ぎ出している。現存での身幅3.9cmを測る。全て住居の覆土中からの出土である。

4号竖穴住居跡 (図版3-2, 第12図)



第12図 4号竖穴住居跡実測図 (1/60)

丘陵の北斜面で検出した竪穴住居跡で、標高61.5mに設営している。住居の平面形態は円形を呈する。規模は5.6m×6.05m、壁高は高い所で60cmを測るが、北壁は流土のため遺存状況は良くない。床面積は25.0㎡である。

床面上では数多くの柱穴を検出したが、主柱は6本と解釈され、P₁～P₆が相当する。この中のP₂(P₂')は柱の建直しを計っている。柱間はP₁－P₂ 1.50m (P₁－P₂' 1.70m)、P₂－P₃ 1.30m、(P₂'－P₃ 1.30m)、P₃－P₄ 1.50m、P₄－P₅ 1.85m、P₅－P₆ 1.40m、P₆－P₁ 1.25mを測り、P₄－P₅の柱間が広くつくられる。

東及び南壁際には各々が完結する周溝を廻らし、周溝と周溝の間には高さ8.0cmの高まりを設けている。この高台施設は後述する集落への登道の方に付設し、しかもP₄－P₅の柱間の広さ等を考慮すると住居の出入口の残片と理解することが可能である。また、床面の中央には深さ50cm弱の円形ピットを設け、弧状に走る浅い溝と直結する。その溝の端部には深さ64cmの楕円形のピットとも繋がっている。床面上には焼痕は認められず、中央ピット内にも炭火物及び壁面の焼痕はみられない。

出土遺物は時期の異なる土器がある。1・2は弥生時代後期の壺・甕で、住居跡の覆土上層から出土しており流れ込みである。3～6は弥生時代中期初頭の甕で、当該住居の時期を示す資料である。他に挟入柱状片刃石斧と砥石片が出土している。

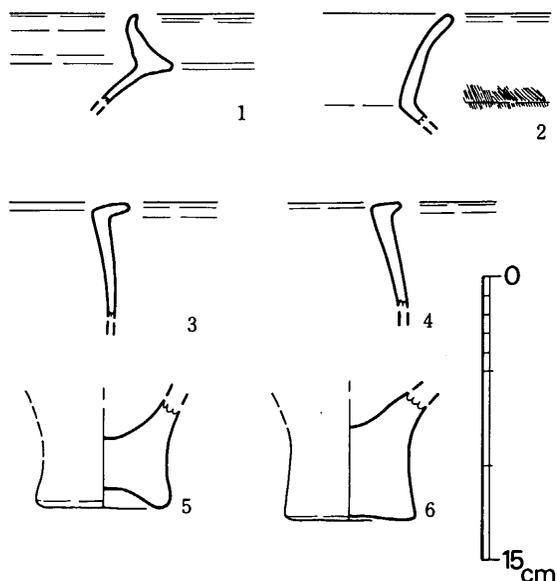
出土遺物

土器 (第13図)

上層出土土器 1は二重口縁壺で口唇部を短く外反する。焼成は良好で、胎土には砂粒が多く金雲母も若干ではあるが含む。

2の甕は口縁部を鈍く「く」字状に外反させ、口唇部は更に外反する。最終調整は横ナデ仕上げである。頸部外面には一部ハケが残る。

下層出土土器 3～6は住居の床面上か覆土の下層で出土した甕である。3は逆「L」字状の短い口縁部を有す。胎土には砂粒が多く粗い。橙褐色を呈する。床面からの出土である。4は口



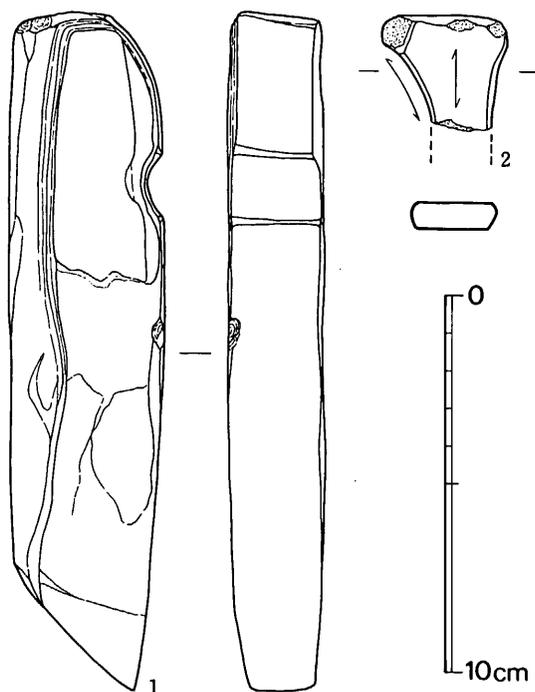
第13図 4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・2上層, 3～6下層) (1/4)

縁部を僅かに肥厚させた甕で、頸部は内傾する。胎土には砂粒と金雲母を含む。橙褐色を呈する。5・6は甕の底部である。両者とも細みの底部をなし、5は上げ底で、6は粘土で充填し肉厚につくっている。胎土は3・4と同様砂粒が多い。橙褐色の色調を有す。底径は前者が7.2cm、後者は6.9cmを測る。

石器 (図版22, 第14図)

1は頁岩質の石材を使用した抉入柱状片刃石斧である。略完形品で全長17.9cm、厚さ2.5cm、最大幅4.1cmを測る。

2は砂岩製の手持砥石で½を欠損する。研ぎ面は3面で、裏面は未使用である。厚さ7mmを測る。



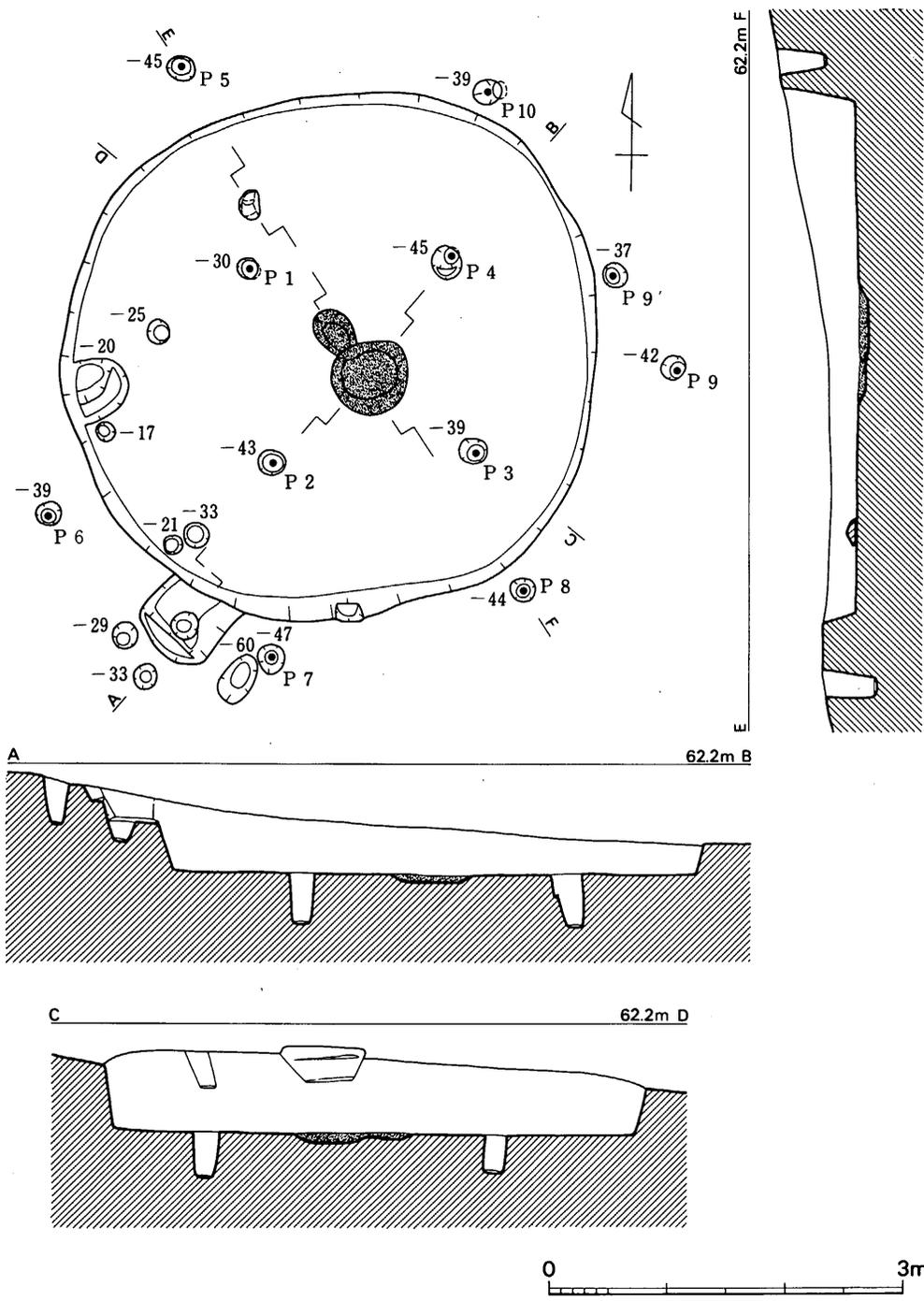
第14図 4号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2)

5号竪穴住居跡 (図版4-1, 第15図)

丘陵の北側斜面に占地する竪穴住居跡で標高61.5m～62.0mの箇所に設営している。住居の平面形状は整美な円形を呈し、規模は直径4.55m～4.60mを測る。壁高は遺存状態の良好な所で60cm強である。住居の床面積は14.9m²を測り小形の住居である。

主柱は規則的な4本柱で、住居の外側には略等間隔に6本の柱穴が廻っている。主柱穴の柱間はP₁-P₂ 1.65m, P₂-P₃ 1.70m, P₃-P₄ 1.65m, P₄-P₁ 1.70mを測り、対応する柱間が等しいことから、総体的に柱穴が東壁寄りに建てられてはいるが、構造上計画的な規則性を有した住居であることが理解できる。

4本の主柱の対角線の中央には径65cmの浅い炉を設けており、それに重複する小形の炉も検出した。両方とも焼痕が顕著で中には灰と炭火物が充満していた。西壁傍には二段掘りのピットが付設されているが、当該ピットが屋内土壌か否かは明らかではない。さらに、南西壁には段状の掘込みが設けられ、集落の登り道方向に設置されていること、この施設を狭む様に両側に柱穴を掘っていること等から、造り出しの上屋を有す出入口と考えることができよう。ともあれ、弥生時代中期初頭頃のモデルケースとなる竪穴住居跡である。



第 15 图 5号竖穴住居跡実測图 (1/60)

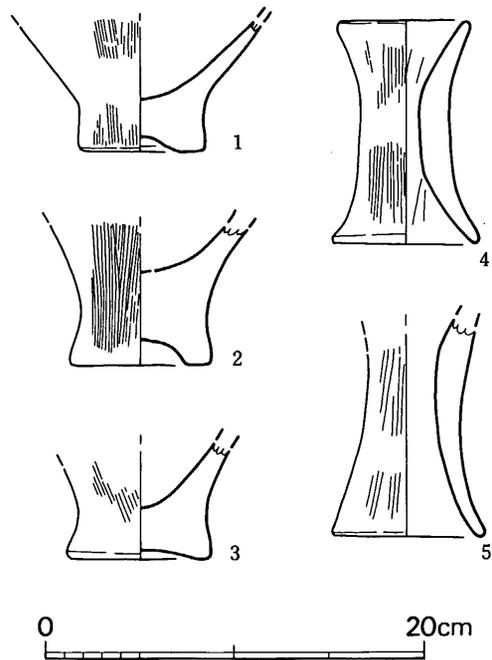
出土遺物は甕・器台の他、扁平片刃石斧がある。

出土遺物

土器 (図版22, 第16図)

1～3は甕の底部で全て細みである。1・3は緩やかな上げ底に対し、2のそれは抉った様な上げ底を呈する。調整は外面がハケを施し、内面はナデで仕上げる。胎土は総じて不良で砂粒を多く含む。2・3は二次加熱を受け外面が赤味をおびた茶褐色に変色している。1の底径6.8cm, 2は7.5cm, 3は7.7cmを測る。

器台は4・5がある。全体に細みではあるが、前者は体部が直線的で口縁部と裾部の開きは大きい。後者は口縁を欠損しており、裾部の開脚度は鈍い。両方とも調整は外面が荒いハケ、内面はナデで仕上げ、二次加熱を若干受けている。4の口径7.0cm, 裾部径9.8cm, 器高11.8cmを測る。5の裾部径は8.1cmである。



第16図 5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

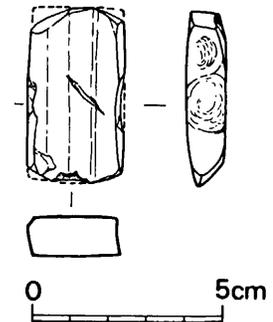
石器 (図版23, 第17図)

頁岩製の小形扁平片刃石斧(手斧)がある。表面が風化しざらつく。全長4.6cm, 幅2.6cm, 厚さ1.1cmを測る。

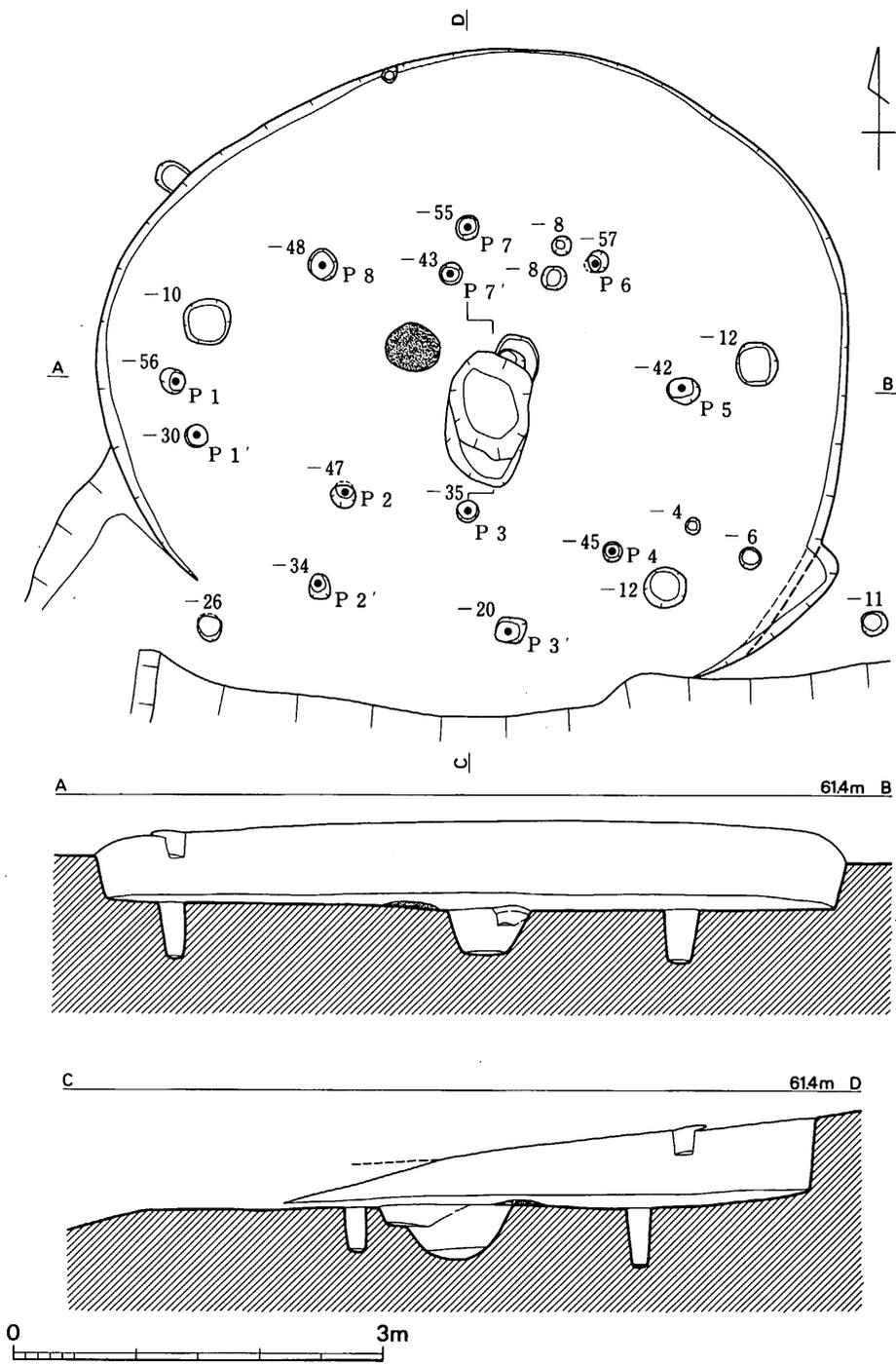
6号竪穴住居跡 (図版4-2, 第18図)

丘陵の南斜面に設営した竪穴住居跡で標高61mの所に立地する。南側の壁は急斜面のため流れていて遺存しない。住居の平面形態は円形を呈する。規模は東西径のみ計測可能で6.10m, 壁高は北壁で60cmを測る。

主柱は図示した様に8本柱で、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_7$ は建直しを計



第17図 5号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/2)



第 18 图 6号竖穴住居跡実測图 (1/60)

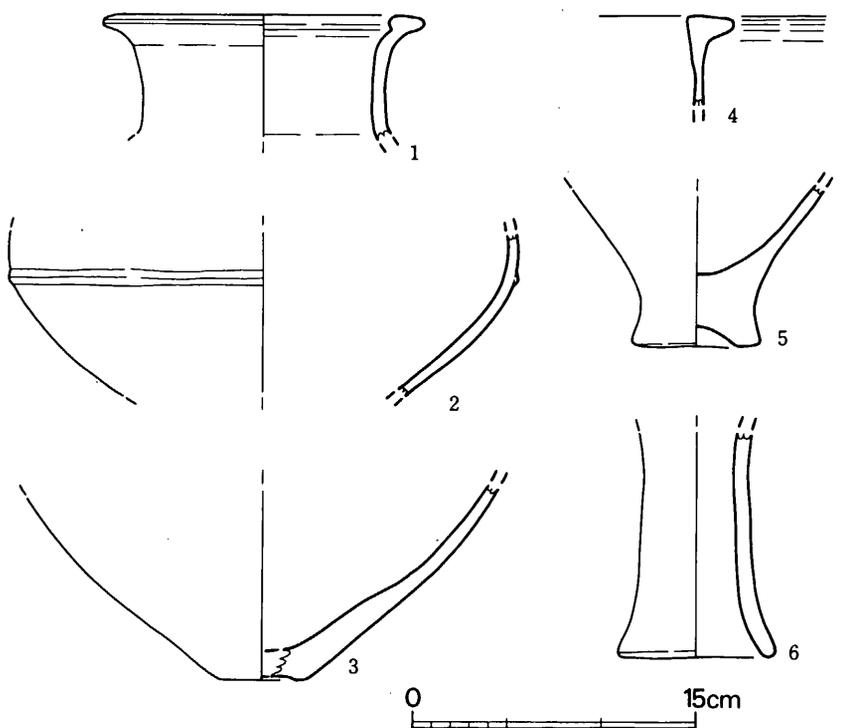
り面的な広さを確保している。P₁に対応する建直しの柱穴はP₂・P₃・P₇で、P₁'のそれはP₂'・P₃'・P₇'と解釈できる。各々の柱間はP₁-P₂ 1.65m (P₁'-P₂' 1.55m), P₂-P₃ 1.05m (P₂'-P₃' 1.60m), P₃-P₄ 1.25m (P₃'-P₄' 1.05m), P₄-P₅ 1.45m, P₅-P₆ 1.25m, P₆-P₇ 1.10m (P₆-P₇' 1.20m), P₇-P₈ 1.20m (P₇'-P₈ 1.05m), P₈-P₁ 1.50m (P₈-P₁' 1.75m)を測る。さらに、竪穴住居の周辺には不規則な間隔で柱穴が廻っている。床面の中央には1.10m×65cm、深さ45cmの楕円形のピットを付設し、その北西傍には径45cmの広さで床面が著しく焼けていた。

出土遺物は壺・甕・器台の他、搔器・石鑿・砥石・磨製石鏃等の石器と共に小形板状鉄斧（鉄製の手斧）がある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期初頭頃である。

出土遺物

土器（図版23、第19図）

1～3は壺形土器である。短い頸部に鋭く外反する口縁部を有し、口唇部には粘土紐を貼付している。調整は横ナテ仕上げで、復原口径17cmを測る。2は張の強い胴部片で下半部には鈍い三角凸帯を貼付している。3の底部は小さな上げ底を呈する。3個体とも同一個体の可能性がある。調整は2・3とも風化し不明。焼成は良いが、胎土には砂粒が多い。金雲母も僅か乍ら混在する。外面の色調が淡い暗茶褐色を示すことから



第19図 6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

黒塗りの可能性がある。

甕は4・5がある。4は逆「L」字状の口縁を有す甕であるが小破片である。調整も不明瞭で、胎土には砂粒が多く粗い。鈍い橙色を呈す。5は上げ底の細みの底部で、4と同様調整は不明であるが、外面はハケ、内面はナデ仕上げであろう。茶褐色の色調を有す。底径6.8cmである。

6は細身の器台で口縁部付近を欠く。裾部の開きは鈍く、胎土は粗く金雲母を僅かに含む。裾部径8.4cmを測る。

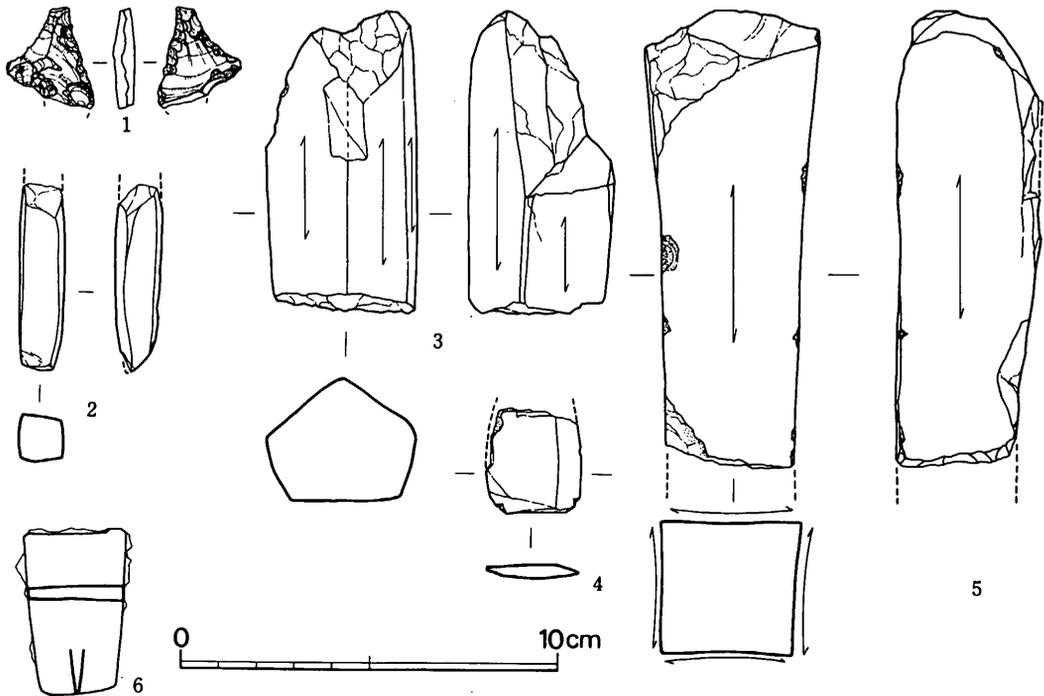
石器 (図版23, 第20図)

1はやや縦長の不定形削片を使用した黒曜石製の搔器である。石材内には細かい気泡がかなり混在している。全辺が両面または片面からの微細なりタッチで調整しているが、縁辺のみ加工している。

2は頁岩製の小形方柱状片刃石斧(石鑿)で頭部を欠失している。表面が磨耗しざらつく。

3・5は荒砥石である。3は長砂岩製で一見花崗岩に似ている。断面形が五角形で全ての面に研ぎ痕を残す。表面は風化しざらつく。5は砂岩製で $\frac{1}{2}$ 近くを欠損している。研ぎ面は4面で石材が淡い桃色を呈し、全面に弱い加熱を受けているようだ。

4は磨製の石鏃で硬質砂岩製である。両面とも一方向に研ぎ面の稜を残す。切先は欠失して



第20図 6号竪穴住居跡出土石器・鉄器実測図(1/2)

おり、幅2.5cm、厚さ3.8mmを測る。

鉄器 (図版23, 第20図)

6は住居の床面上から出土した小形の板状鉄斧で手斧として使用したと考えられる。頭部は右側が顕著であるが浅く有段をなす。これが製作当初のものか使用過程のものか定かでない。刃部は鋭利で一見片刃状につくられ、僅か乍ら内反りを呈する。また刃部右側が摩耗しており研ぎ減りを示すものであろう。長さ4.4cm、刃部幅2.0cm、頭部幅2.7cm、厚さ3.0mmを測る。

7号竪穴住居跡 (図版5-1・2, 第21図)

調査区の東側に位置し、東側の丘陵の最高所の緩い西側斜面に設営された竪穴住居跡で、当該集落の中で最大規模を有す。平面形態は円形を呈する。住居の規模は7.55m×7.40m、壁高は遺存状態の良好な東壁で85cmを測る。床面積は43.8㎡である。

床面上ではかなりの数の柱穴を検出したが、図示した様に支柱穴は10本と推察される。この内のP₁(P₁')とP₈(P₈')が建直しを計っている。各柱穴の柱間はP₁-P₂ 1.55m (P₁'-P₂ 1.55m), P₂-P₃ 1.45m, P₃-P₄ 2.05m, P₄-P₅ 1.05m, P₅-P₆ 1.65m, P₆-P₇ 1.30m, P₇-P₈ 1.30m (P₇-P₈' 1.65m), P₈-P₉ 1.20m (P₈'-P₉ 85cm), P₉-P₁₀ 1.30m, P₁₀-P₁ 1.60m (P₁₀-P₁' 1.75m)を測る。

床面の中央には不整円形の二段掘りのピットを設けているが、ピット内の埋土は黒褐色土が充満し、灰・炭化物等は認められない。さらに、中央ピットを狭んだ形でP₁₁・P₁₂が掘られており、補助柱を構築している。周溝は南西壁の一部にあるに過ぎない。炉の痕跡は見当らず、南東壁には壁面に対して斜め方向に床面からの深さ50cmの屋内貯蔵穴を付設している。明瞭な屋内貯蔵施設を有するのは当該住居のみである。中からの出土遺物は無い。

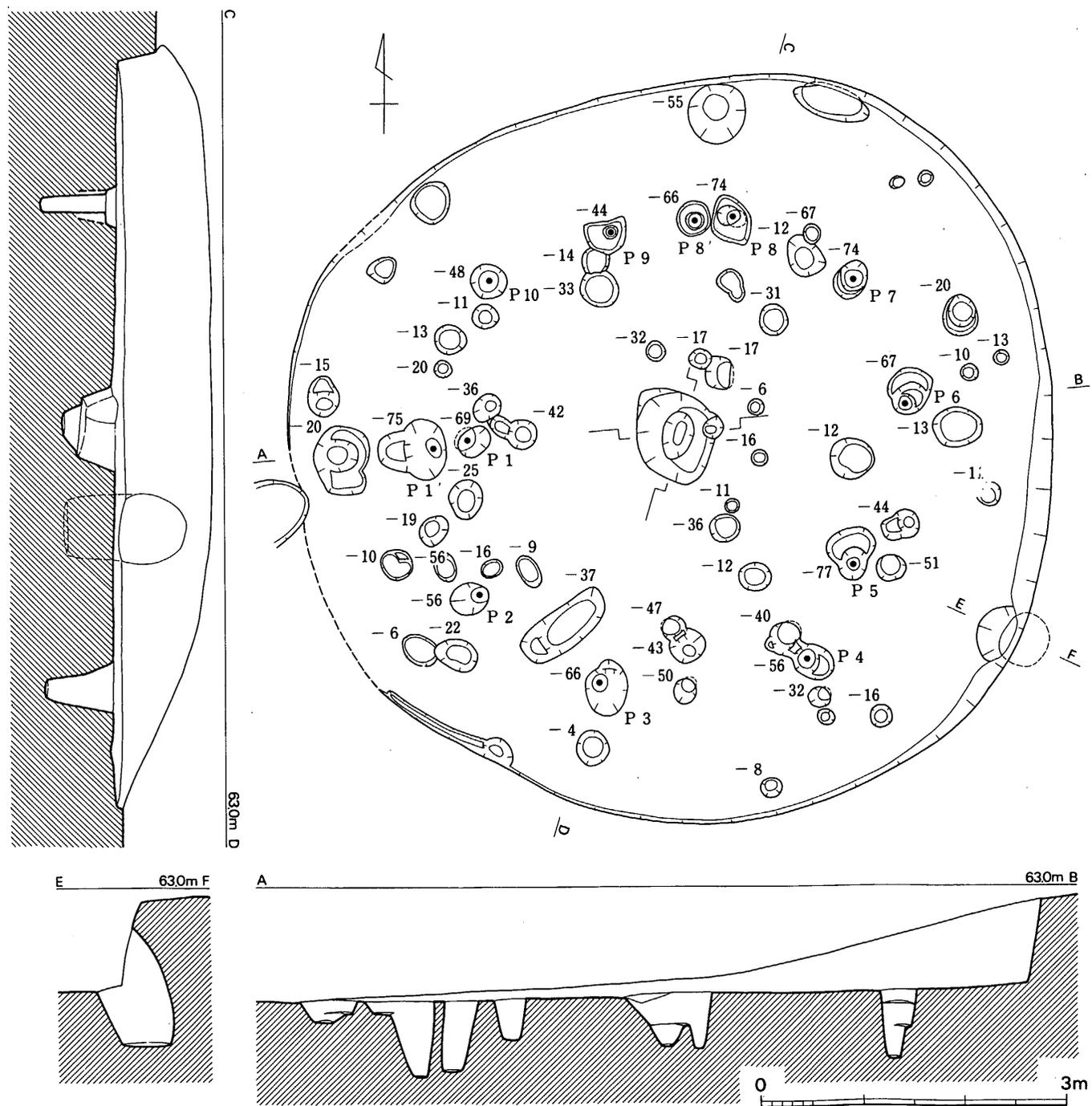
出土遺物は壺・甕・器台・支脚の他、石鏃・砥石・扁平片刃石斧・石庖丁等がある。石庖丁は住居跡と3号貯蔵穴出土の破片が接合しており、3号貯蔵穴は7号住居の付属施設と解釈できよう。出土土器から住居の時期は弥生時代中期初頭から前葉の古相頃であろう。

出土遺物

土器 (図版23, 第22図)

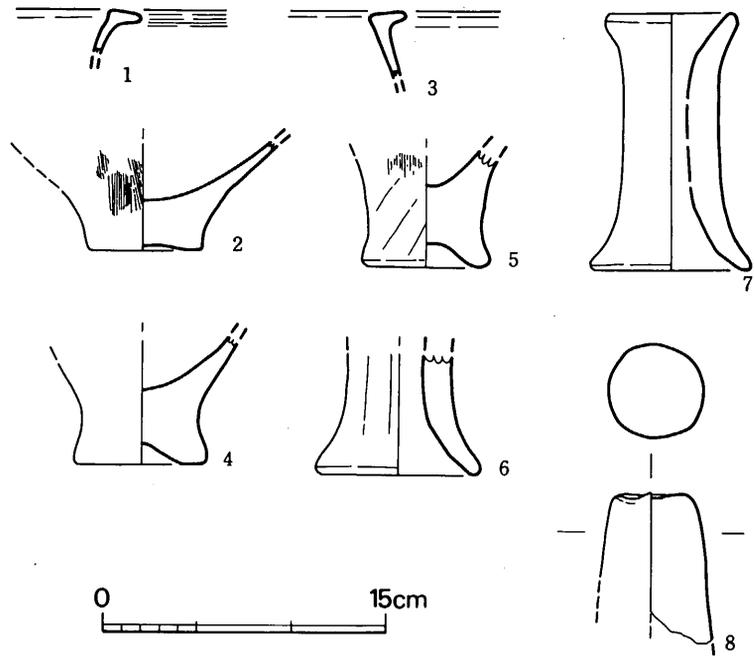
壺は1・2がある。1は鋤先口縁の初原的形態を有し、口縁平坦部は僅かに外傾する。胎土は砂粒を多く含み、橙色の色調を持つ。2は細みの底部片で僅か乍ら上げ底をなす。調整は外面にハケが若干残り、内面はナデで仕上げる。胎土には砂粒が多く、金雲母も若干混在する。

甕は3～5がある。3は逆「L」字状の口縁部を有し、頸部は内傾する。胎土は砂粒を多く含



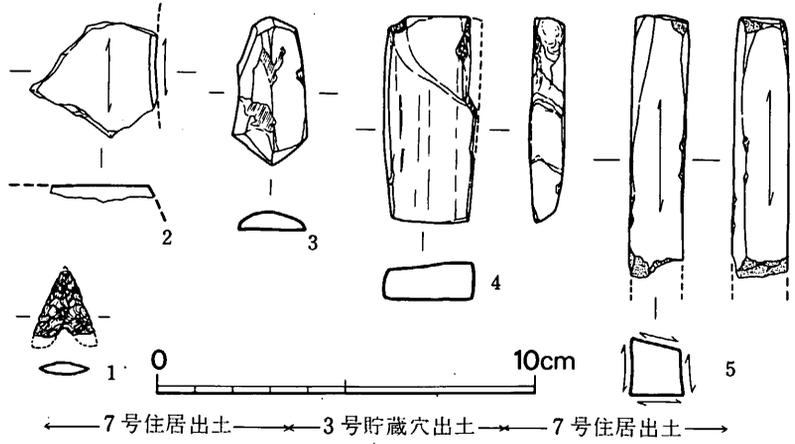
第 21 图 7号竖穴住居跡実測图 (1/60)

み、橙褐色を呈する。4・5は甗の底部で先端の接着部は広まる。上げ底である。器面は風化が顕著でざらつく。胎土は両方とも砂粒が多い。4は弱い二次焼成を受け赤味をおびた茶褐色を呈し、5は黄橙色である。4の底径7.1cm、5は6.8cmを測る。



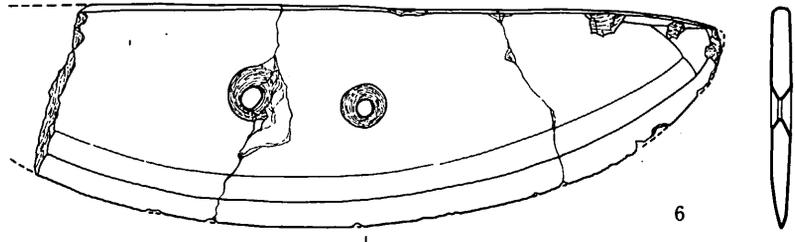
第 22 図 7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

器台は6・7がある。両者とも同タイプの器台と考えられ、7は胴部が円柱状を呈し、口縁部と裾部が大きく開く。調整は前者の表面が風化し不明であるが後者はナデ仕上げである。



← 7号住居出土 → × 3号貯蔵穴出土 → 7号住居出土 →

胎土は6・7とも砂粒が多く粗い。金雲母も若干ではあるが混在する。6の裾部



第 23 図 7号竪穴住居跡 (一部3号貯蔵穴) 出土石器実測図 (1/2)

径8.8cm, 7の口径7.1cm, 裾部径8.6cm, 器高13.6cmを測る。

8は支脚片で頭部のみ遺存する。胎土には砂粒と金雲母を多く含む。調整はナデであろう。強い二次加熱を受けている。

石器 (図版23・24, 第23図)

1は黒曜石製の無基石鏃で両翼を欠く。両面とも丁寧な剝離調整がなされ、漆黒色の良質の黒曜石を使用している。

2・5は砥石で砂岩製である。5は手持砥石で研ぎ面は4面である。

3は頁岩質の不明石器で用途は明らかでない。

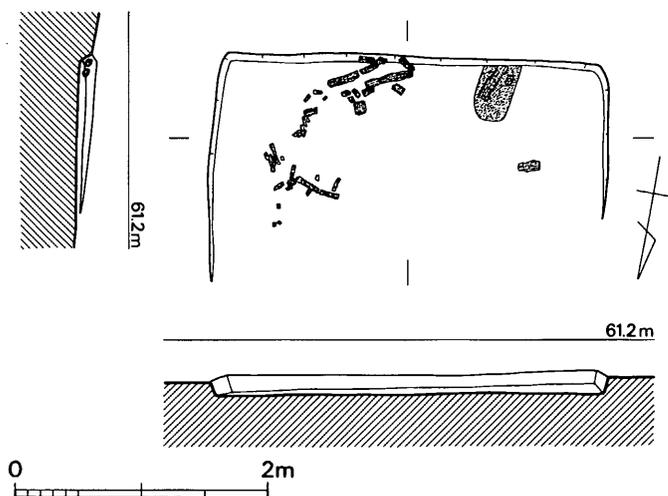
4は小形の扁平片刃石斧で頁岩製である。全長5.4cm, 刃部幅1.9cm, 厚さ9mm前後である。表面の風化が著しい。

6は大型の石庖丁で頁岩質の砂岩製である。¼を欠失するが、図示したように接合した3片の内1片は3号貯蔵穴からの出土である。穿孔は丁寧で背部は整美な面取りを施している。刃部は鋭利に研ぎ出している。

8号竪穴住居跡 (図版6-1, 第22図)

丘陵の北側斜面の鞍部状の所に設営された竪穴住居跡である。平面形態は北側の壁面は無論のこと床面までもが流れており定かでないが、周辺の住居形状から長方形であろう。住居の規模は不明で、南壁のみ計測可能で3.05mを測る。壁高は10cm前後である。

床面上から柱穴は全く見当らず、その他の施設も不明である。さらに、床面上には炭



第24図 8号竪穴住居跡実測図(1/60)

化材が散在しており、当該住居が火災に遭遇したことが判ると同時に、南側に隣接する9号住居との間隔から類焼を免がれたとは考え難いことから、同時併存ではないことが理解できる。

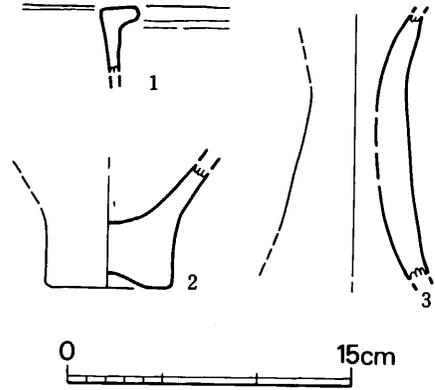
出土遺物は甕・器台があるが数は少ない。出土土器から住居の時期は弥生時代中期前葉の古相の頃と考えられるが、いずれにしても他の円形住居とは時間的な僅少差としか考えられない。

出土遺物

土器 (第25図)

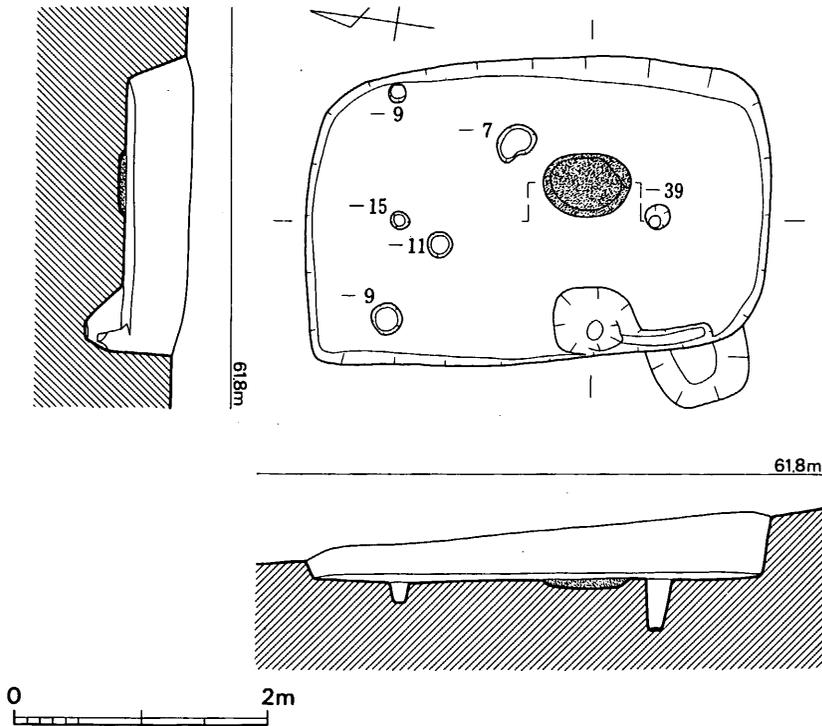
甕は1・2がある。1は逆「L」字状の口縁部を有す甕で、現存部はナデ仕上げである。胎土は砂粒が多く、金雲母も若干含む。2は上げ底をなす底部片で、二次加熱を受け明茶褐色を呈する。底径6.7cmを測る。

3は細みの器台で口縁部と裾部を欠損する。外面は2の甕と同様の色調を有しており、二次加熱を受けている。調整は風化が激しく不明であるが、ハケとナデ仕上げであろう。



第 25 図 8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

9号竪穴住居跡 (図版6-1, 第26図)



第 26 図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

丘陵の鞍部状の谷間部分に設営された竪穴住居跡で、8号住居跡と隣接している。平面形態は隅円長方形を呈する。竪穴住居の規模は東・西壁3.40m・3.55m、南・北壁2.00m・2.10mを測る。壁高は遺存状況の良好な所で45cmである。床面積は7.2㎡と狭く、小形の竪穴住居である。

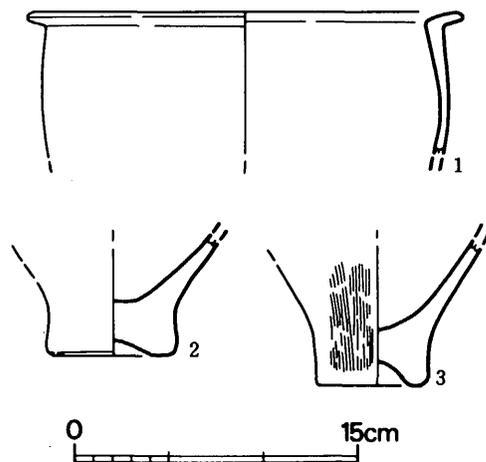
主柱は2本で、主柱穴間には70cm×50cmの浅い炉を設けている。炉の内壁は焼痕が認められ、中には炭化物が充満していた。西壁のやや南寄りには深さ30cmの屋内土塋を付設しており、西壁際に掘られた短い周溝と直結している。

出土遺物は甕形土器が少量ある。出土土器から住居の時期は弥生時代中期初頭から前葉の古相頃であろう。

出土遺物

土器 (第27図)

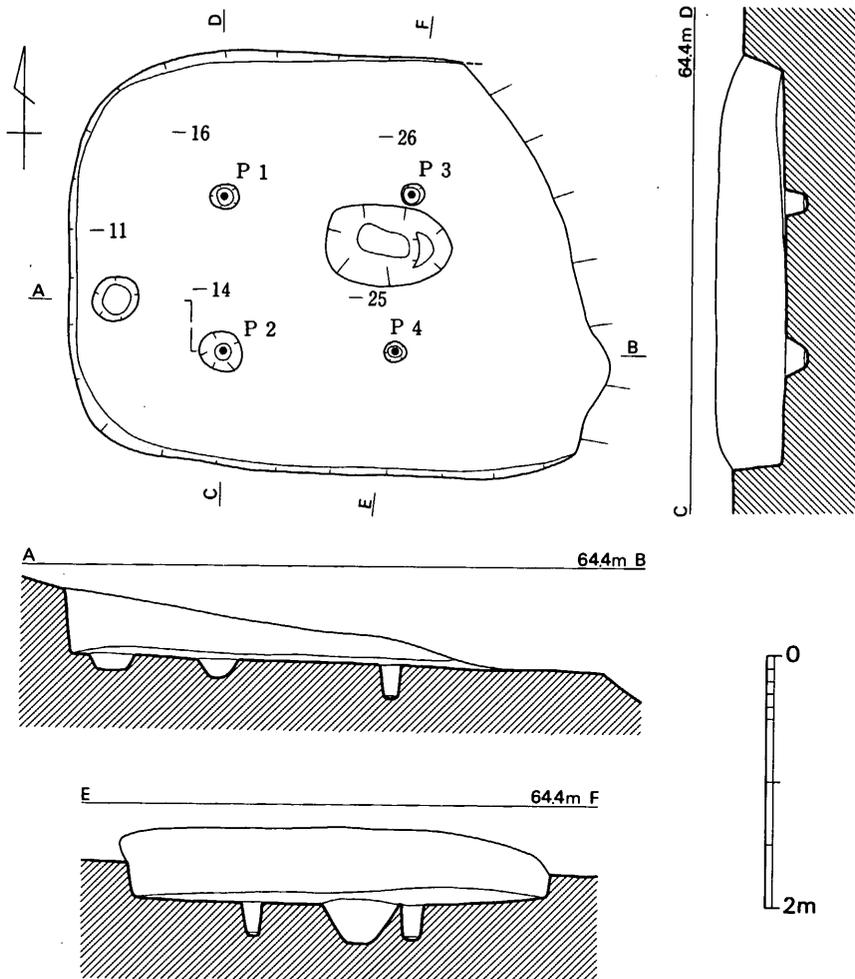
1～3の甕形土器がある。1は逆「L」字状に外反する短い口縁部を有す甕で、口縁平坦部は内傾する。肩部から胴部の張りは鈍い。調整は風化し不明。胎土は砂粒が多く粗い。橙褐色をなす。復原口径13cmを測り、床面からの出土である。2・3は細みの底部片で上げ底をなす。胎土は両者とも砂粒が多く粗い。調整は不明瞭で、3は荒いハケが僅かに残る。2の底径6.9cm、3は5.4cmを測る。3は炉跡内からの出土で二次加熱を受けている。



10号竪穴住居跡 (図版6-2, 第28図) 第27図 9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

調査区の西端で検出した竪穴住居跡で、一段高くなった丘陵の東斜面 (標高64m) に設営している。住居の平面形態は隅円長方形を呈する。住居の規模は東壁が崩壊しており長辺は不明である。短辺は計測でき3.30mを測る。壁高は遺存状況の良好な所で50cmである。

主柱は4本柱で、深さは16cm～26cmと浅い。主柱の柱間は P_1-P_2 、 P_3-P_4 が1.25m、 P_1-P_3 1.50m、 P_2-P_4 1.35mを測り、 P_4 がやや西側に寄っている。 P_3 と P_4 の間には2段掘りの楕円形の形状をなす長径1.0m、短径65cm、深さ37cmのピットを設けている。中からの灰・炭火物は検証されていない。



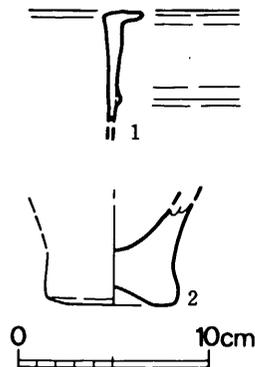
第 28 図 10号竖穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物は甕（鉢の可能性もある）の破片が少量あるに過ぎない。出土土器から住居の時期は弥生時代中期初頭から前葉の古相に比定できる。

出土遺物

土器 (第29図)

1は甕（あるいは鉢）の口縁部片である。逆「L」字状の口縁部を有し、口縁下には断面三角形の凸帯を貼付している。調整は風化が



第 29 図 10号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

激しく不明。胎土は砂粒が多く粗い。橙褐色を呈する。2は底部片で上げ底をなす。胎土は1と同様茶褐色を呈する。底径7.0cmを測る。

11号竪穴住居跡 (図版3-1, 第9図)

丘陵の頂部で検出した竪穴住居跡で、3号竪穴住居跡と重複関係にあり11号住居が3号住居に切られている。北壁の $\frac{1}{2}$ は試掘時に削平を受けている。平面形態は隅円長方形であろう。その他詳細は不明であるが、3号住居内の床面下から径25cmの焼痕を確認した。当該住居の炉跡であろう。

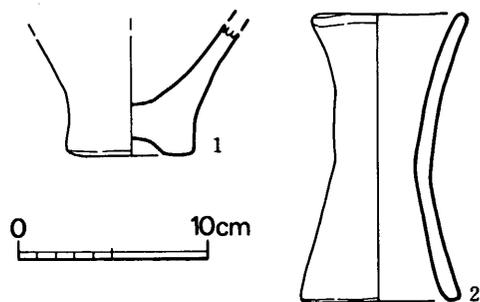
出土遺物は甕と器台があるが、3号住居出土の土器と形態的に大差はなく、短い時間的な差での重複であろう。出土土器から住居の時期は弥生時代中期初頭～前葉の古相頃であろう。

出土遺物

土器 (図版24, 第30図)

1は甕の底部片で上げ底を呈する。焼成は良く茶褐色の色調を有す。底径6.8cmを測る。調整は器面が磨耗し不明であるがハケとナデ仕上げであろう。

2は器台で胴部が特に細まる。口縁部と裾部の外反度は鈍い。やや歪な土器で口径8.7cm, 裾部径8.3cm, 器高15.3cmを測る。胎土には砂粒が多く、しかも二次加熱を受け赤味をおびた茶褐色を呈する。

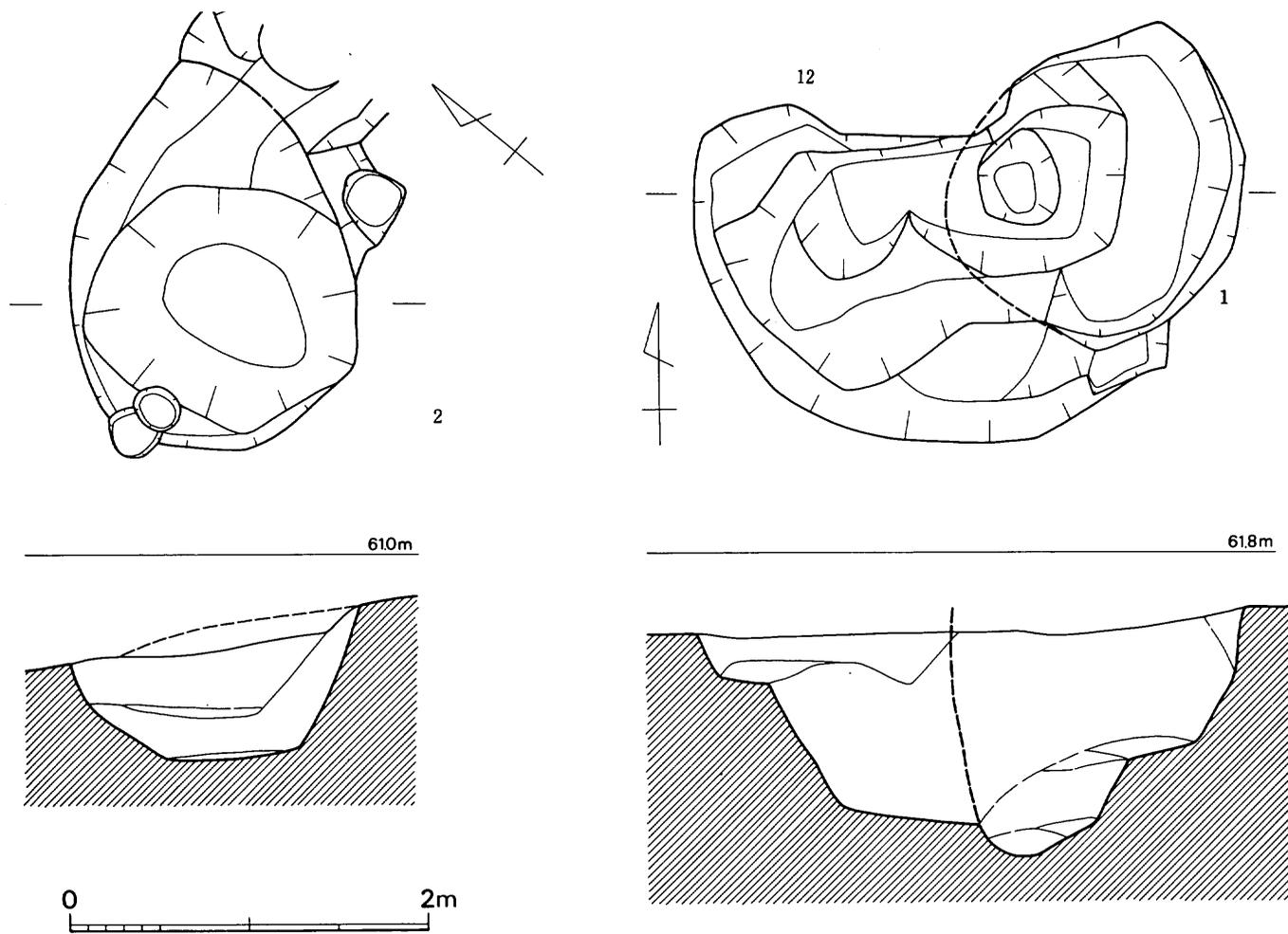


第30図 11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

(2) 貯蔵穴

1号貯蔵穴 (図版7-1, 第31図)

重複関係にある3号・11号竪穴住居の北東に隣接して掘られた貯蔵穴で、12号貯蔵穴を切った状態で検出した。平面形状は不整円形で、東側にはテラス状遺構を設けている。規模は南北径1.70m, 深さは最深部で1.40mを測る。



第 31 图 1 号·2 号·12 号贮藏穴实测图 (1/40)

出土遺物は少なく甕の破片が少量あるに過ぎない。出土土器から貯蔵穴の時期は弥生時代中期初頭頃の所産である。

出土遺物

土器 (第33図)

1・2は短い逆「L」字状口縁部を有す甕の破片で、2の頸部は内傾する。両方とも同様な胎土を有し、砂粒が多くしかも金雲母を僅かに含む。調整は器面が風化し不明瞭である。1の復原口径29.8cm、2のそれは23.6cmを測る。1・2とも茶褐色の色調をなす。3は細みの底部片で上げ底を呈する。調整は外面が荒いハケ、内面はナデで仕上げる。胎土は1・2の甕と同様である。底径7.0cmを測る。

2号貯蔵穴 (第31図)

丘陵の北側斜面で検出した不整形の貯蔵穴で、4号竪穴住居との間隔は約6.0m程である。当該貯蔵穴は3号土壇との切り合いがあるが、新旧関係は調査時点で把握できておらず、3号土壇からの出土遺物が皆無のため遺物からの新旧も明らかでない。断面形は逆台形を呈し、規模は1.60m×2.00m、深さは85cm前後を測る。

出土遺物は甕が少量ある。出土土器から貯蔵穴の時期は弥生時代中期初頭から前葉の古相に比定できよう。

出土遺物

土器 (第33図)

4・5は甕の口縁部片で両方とも逆「L」字状口縁を有すが、後者の口縁は短く頸部は内傾し、肩部はやや張る。総じて焼成は良好であり、胎土は粗い。茶色と黄橙色を呈する。5の表面はハケが若干残るが、全体が風化し、調整は不明瞭である。4・5に比較し新相の形状を示す。6・7は底部片である。両者とも上げ底で、前者の底径は6.9cm、後者は10.4cmを測る。調整は外面にハケが僅かに残る。

3号貯蔵穴 (図版7-2, 第32図)

丘陵の頂部に掘られた貯蔵穴で、9号竪穴住居との間隔は南側2.30m、7号竪穴住居の西側

6.50mの位置に在る。貯蔵穴の平面形態は楕円形を呈し、東側壁には小さな深さ20cmのテラスを設けている。断面形状は逆台形を呈する。規模は長径2.10m、短径1.15m、底面までの深さ70cmを測る。床面の東側には不規則なピットを掘っているが、用途は明らかでない。

出土遺物は甕の破片の他、蛤刃石斧・石庖丁片（7号竪穴住居出土の石庖丁と接合）がある。7号住居と接合した石庖丁の出土から、当該貯蔵穴は7号住居に付属する遺構と推測でき、東側に設けたテラスは降り口の段と解釈することも可能である。出土土器から貯蔵穴の時期は弥生時代中期初頭から前葉の古相頃に比定できよう。

出土遺物

土器（第33図）

8・9の甕がある。8は口縁部片で逆「L」字状の口縁を有し、頸部は内傾する。調整は外面にハケが僅か乍ら残り、内面はナデている。胎土は砂粒が目立ち、茶褐色の色調をなす。9は底部片で復原口径6.4cmを測る。細みの上げ底をなす。外面にはハケが若干認められ、内面はナデ仕上げである。胎土・焼成とも8に酷似する。

石器（図版24、第37図）

1は玄武岩製の蛤刃石斧で身と頭部を欠損し、刃部は鋭利ではない。左側は研ぎ減りを呈している。表面は風化が激しくざらつく。

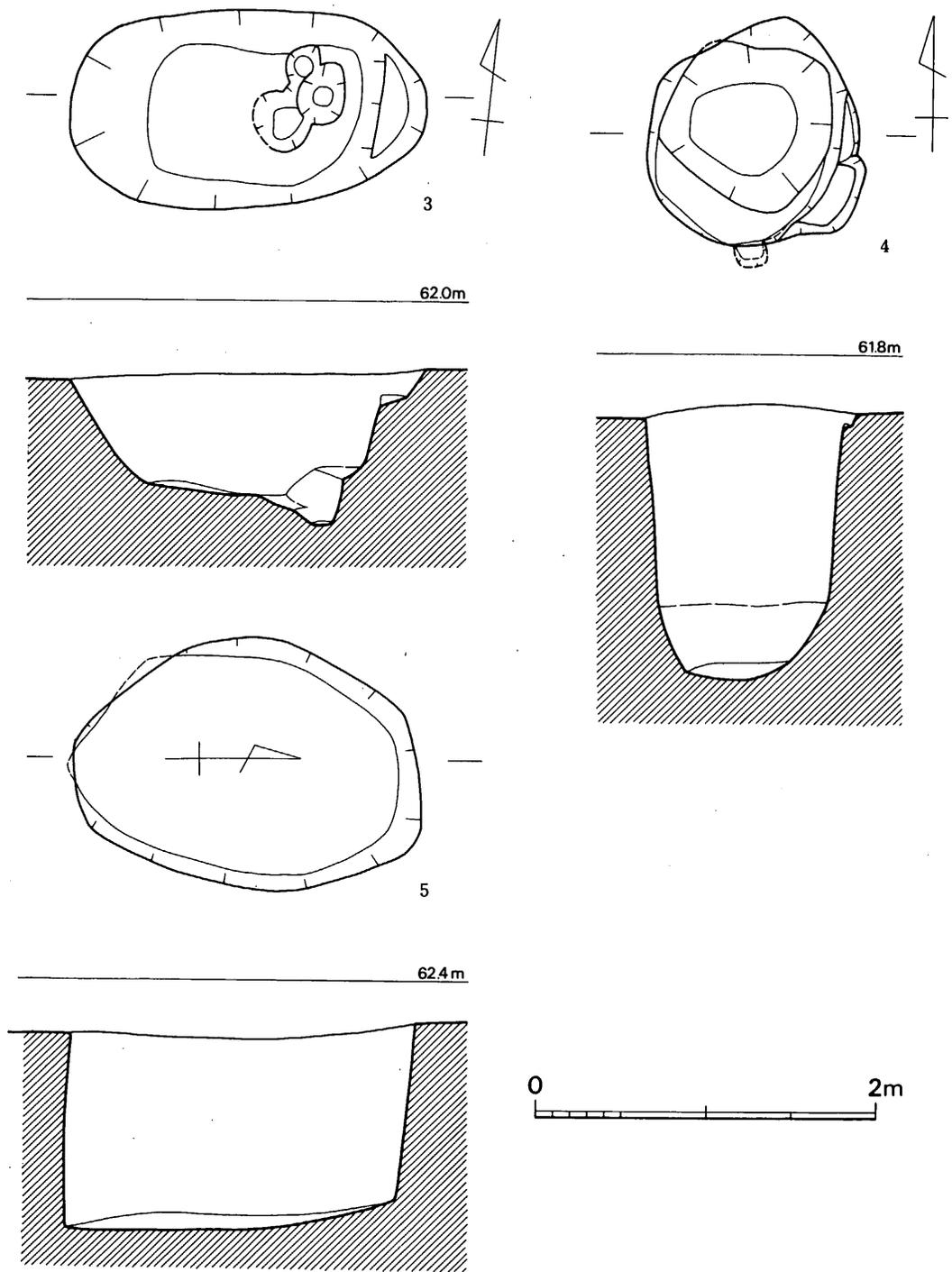
石庖丁は7号住居跡出土遺物の項で説明したので省略する。

4号貯蔵穴（図版8-1・2、9-1、第32図）

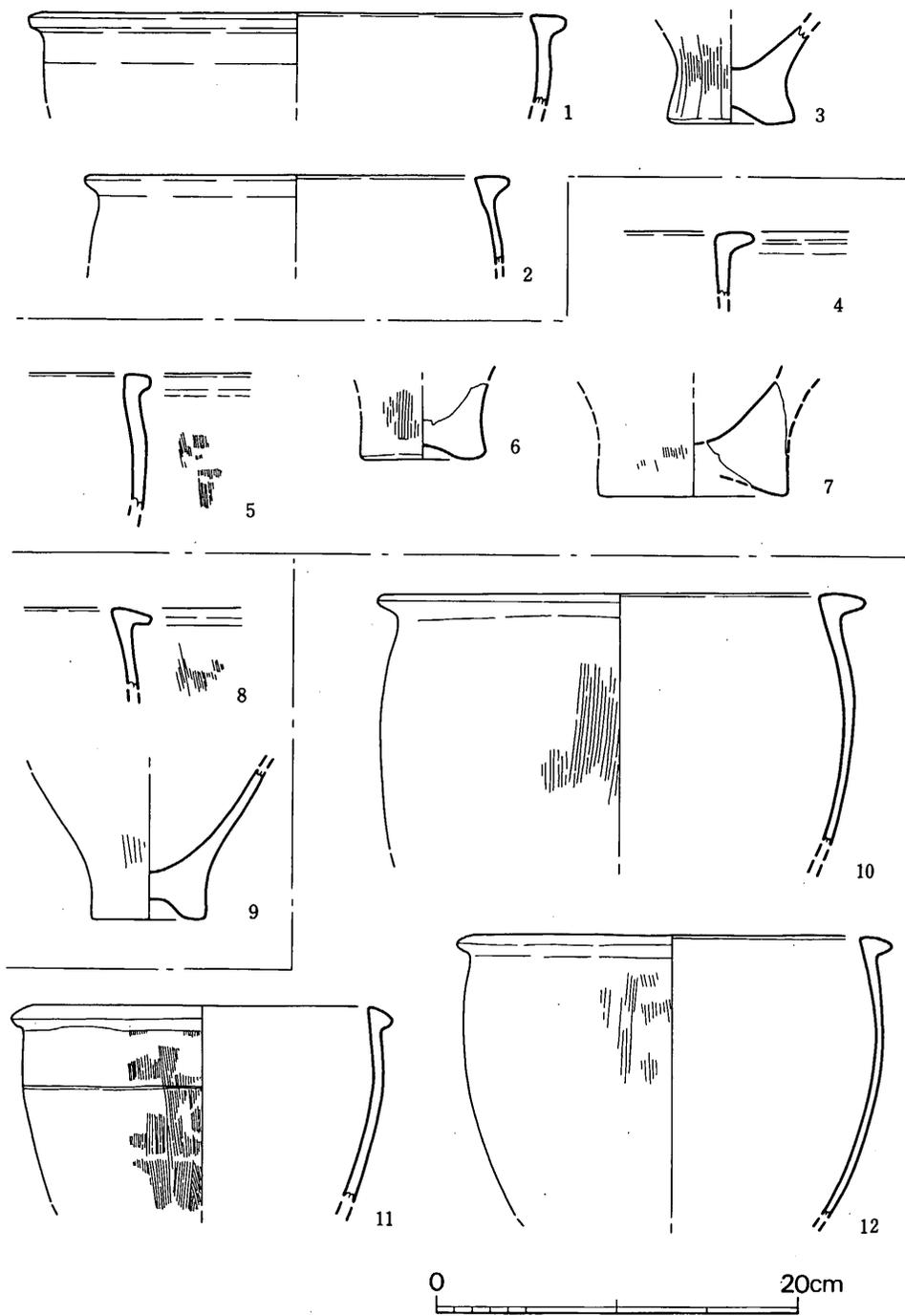
丘陵の南側にあり、7号竪穴住居から9.0m、6号竪穴住居から5.0mの位置に掘られている。平面形態は円形に近い形状を呈し、規模は1.24m×1.30m、深さ1.60mを測り、検出した貯蔵穴の中で最も深い。断面形は「U」字状を呈する。南壁には奥行13cmの抉り込みがあり、貯蔵穴内に降るための構造状の穴と考えられる。

出土遺物は貯蔵穴の中では最も多く、甕と器台が主体を占める。遺物の出土状態は2層に分かれ、遺物は貯蔵穴の下位から出土しているが、上層と下層の間に薄い間層がある。下層の土器群は弥生時代中期初頭頃に位置付けられ、筑後地方の亀甲タイプの系譜を引くものである。上層は弥生時代中期前葉の古相を示す。当該貯蔵穴は6号竪穴住居の付属施設と考えられる。

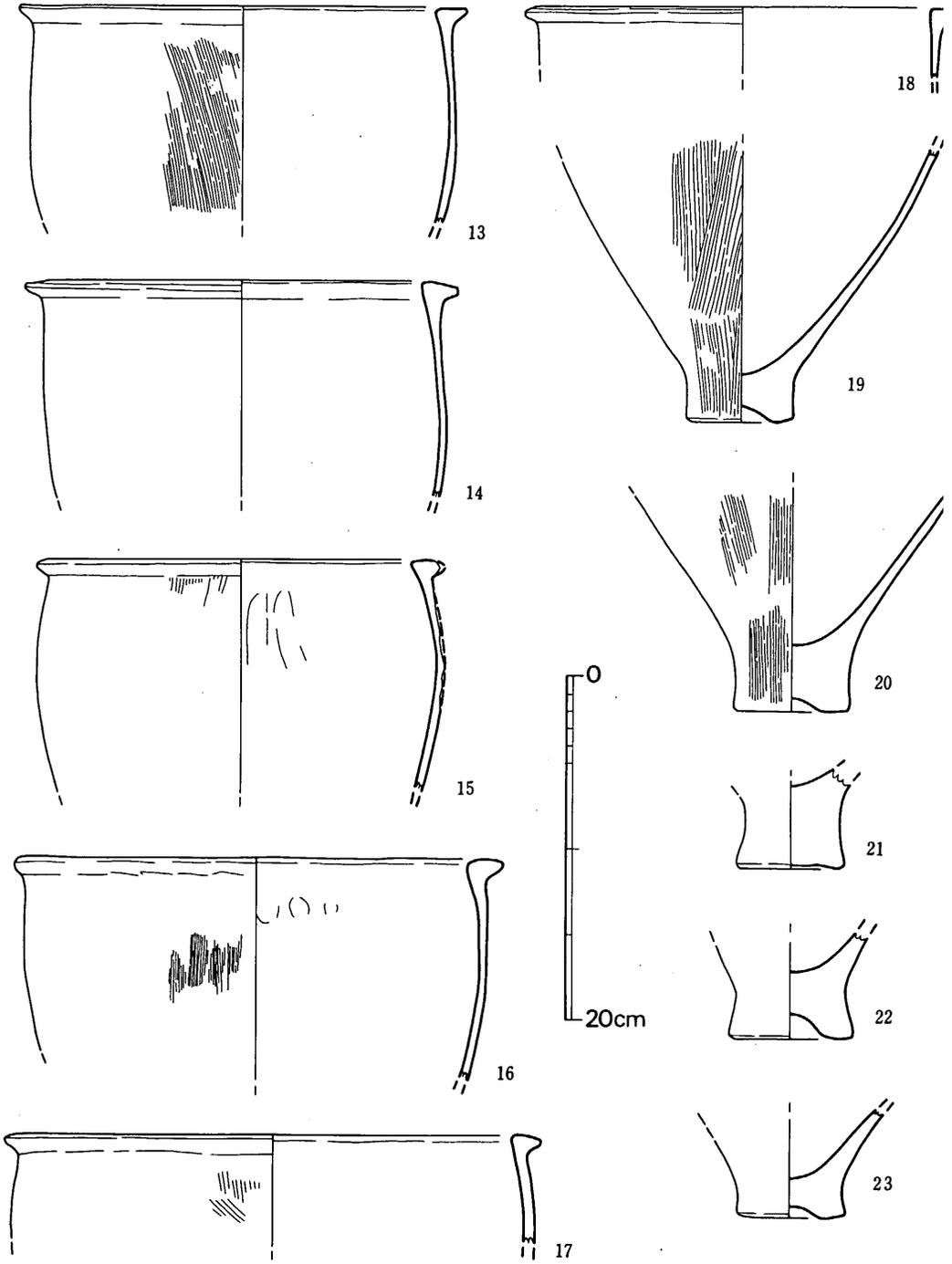
出土遺物



第 32 图 3号~5号貯蔵穴実測図 (1/40)



第 33 图 1号(1~3)·2号(4~7)·3号(8·9)·4号(10~12)
貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 34 图 4 号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)

土器 (図版24~27, 第33~35図)

甕は10~24がある。この中で下層出土は10・15~17・19~21・24, 上層出土は13・14・18・22・23である。

下層出土の甕では11が口縁端部に粘土紐を貼付し, 上面が外傾する所謂筑後地方に類形が求められるタイプの土器で, 肩部に1条の沈線を廻らす。同タイプの甕は12・15~17がある。10は口縁が前者の口縁部に対してやや発達した逆「L」字状を呈する。総じて頸部は内傾し, 肩部が張り気味である。調整は全て外面がハケ, 内面はナデ仕上げであるが, 器表面の風化が著しく不明瞭である。19~21の底部は細く肉厚である。19・20は上げ底で, 21は厚く非常に細まる。調整は前群の甕と同様である。10の口径26.9cm, 11の復原口径21.0cm, 12は復原口径24.0cm, 15の復原口径23.6cm, 16の口径28.3cm, 17の復原口径30.1cm, 19・21の底径6.3cm, 20は6.7cm, 24は7.75cmを測る。

上層出土の甕の中で13・14・18は逆「L」字状の口縁を有し, 13・14とも頸部が内傾するが, 18は直線的である。肩から胴上半にかけての張りはあるが, 下層の甕程ではない。調整は13の内面にはナデ, 外面にハケが残るが, 他は風化し不明瞭である。13と同一調整であろう。総じて胎土は粗く砂粒が多い。金雲母も若干含む。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。13の復原口径26.0cm, 14・18は25.0cmを測る。22・23の底部の径は7.2cm, 23は6.3cmである。

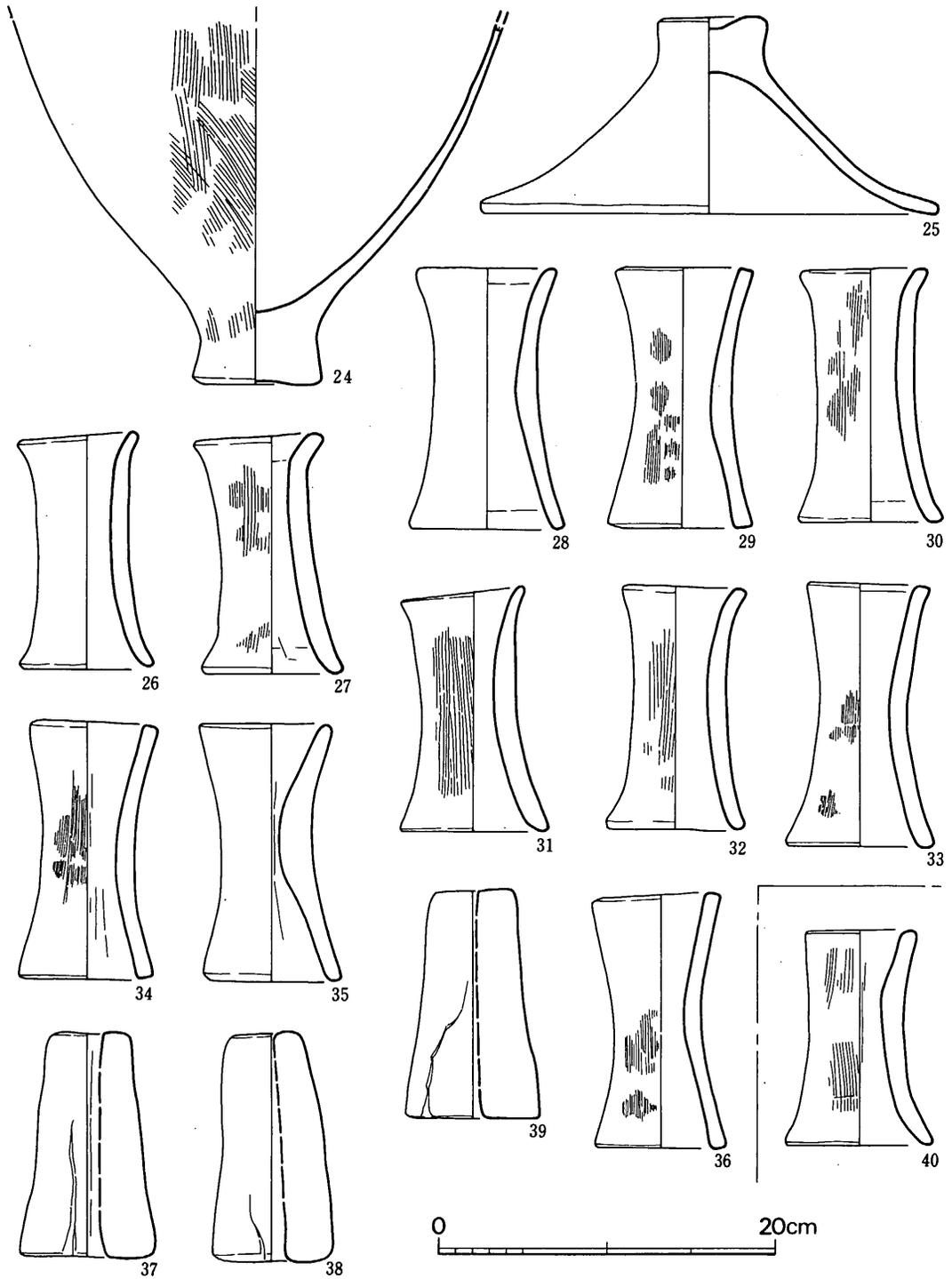
25は甕蓋の完形品で上層からの出土である。摘み部は凹状を呈しやや開く。体部は大きく開き, 縁部で更に外反する。調整は器面が風化し内外とも不明。胎土は甕と同様で茶色を呈する。摘み部径6.5cm, 縁部径27.0cm, 器高11.7cmを測る。

器台の出土は多く26~36がある。この内下層出土は26・27・30~32で, この一群の特徴は細みで体部は円柱状を呈し, 裾部と口縁部は短く外反するが, 口縁部の外反度は鋭い。これに対して28・29・33~36の上層の一群は胴中央部で括れ, この部分から直線的に上・下方向に開く特徴を有し, 内面に稜線を持つ器台もある。

調整は全て外面が縦ハケ, 内面はナデで仕上げるが, 器面が風化し不明瞭である。内面に絞り痕を残すものもある。胎土・焼成は略同一で総じて粗い胎土を有す。

法量は26の口径7.2cm, 底径8.0cm, 器高14.0cm, 27は口径7.8cm, 底径8.4cm, 器高14.2cm, 28の口径8.3cm, 底径9.2cm, 器高15.5cm, 29の口径8.15cm, 底径8.6cm, 器高15.5cm, 30の口径7.6cm, 底径8.6cm, 器高15.0cm, 31の口径7.3cm, 底径8.8cm, 器高13.8~14.5cmを測り歪である。32の口径7.3cm, 底径8.2cm, 器高14.5cm, 33の口径7.3cm, 底径8.7cm, 器高15.5cm, 34は口径7.6cm, 底径7.15cm, 器高15.2cm, 35は口径7.9cm, 底径8.2cm, 器高15.3cm, 36は口径7.7cm, 底径7.8cm, 器高15.0cm, を測る。色調は橙褐色か茶褐色を呈する。

37~39は上層出土の支脚で3個とも同タイプで3脚一対として使用したのであろう。非常に厚い器壁を有し, 加熱される道具のため中央部に細い孔を穿ちヒビ割れを防止している。調整



第 35 图 4 号 (24~36) · 6 号 (40) 貯藏穴出土土器实测图 (1/4)

は全てナデ仕上げで、強い二次加熱を受けている。胎土は総じて粗く砂粒を多く含む。金雲母も僅かに混在する。37の上端径4.5cm、底径8.0cm、器高13.4cm、38のそれは4.1cm、7.1cm、13.6cm、39のそれは4.7cm、7.9cm、14.5cmで器高に小差が認められるが、3脚一対で使用することには問題はないだろう。

5号貯蔵穴（図版9-2、第32図）

丘陵の頂部に掘られた貯蔵穴で、7号住居から南へ4.0mの所に位置する。平面形状は不整楕円形を呈し、南側壁はややオーバーハング気味に掘っている。規模は長軸2.03m、短軸1.50m、深さ1.15mを測る。掘削した場所から7号住居の付属施設と考えられる。

出土遺物は甕の胴部片があるが、細片のため図示していない。その他石器として抉入柱状片刃石斧と考えられる小片3個、石庖丁、磨石がある。貯蔵穴の時期は7号住居と同時期で弥生時代中期初頭から前葉の古い時期であろう。

出土遺物

石器（図版27、第37図）

2・3・5は覆土中から出土した抉入柱状片刃石斧片である。2は頁岩製で、3の石材は不明瞭であるが堆積岩系の石材を使用している。5は約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。頭部は斜めに研ぎ出し、抉りは整美に仕上げている。表面の剥落が著しい。粘板岩製である。

4は頁岩製の石庖丁片で鋭利な刃部を研ぎ出している。

6は砂岩製の磨石と考えられ部分的に摩って面を整えている。図示した上・下端を凹状に打欠いているようにも見え石錘とも考えられるが、用途は明らかでない。表面は風化が進みざらつく。

6号貯蔵穴（図版10-1・2、第36図）

丘陵の北側斜面で検出した遺構であるが、遺構の形状から貯蔵穴とするよりもむしろ土壌の機能を果たすと推測できる。8号竪穴住居の東隣に位置し、住居との間隔は1.0m弱であり、両者が同時併存したとは考え難いことから、9号竪穴住居の付属施設であろう。平面プランは不整形な長楕円形を呈し、北側に向うに従って深くなる。規模は長軸2.10m、短軸1.05m、最深部で75cmを測る。

出土遺物は図版に掲載したように甕と器台があるが、残念乍ら甕は紛失した。その他扁平片

刃石斧の破片がある。出土した器台から判断すると時期は弥生時代中期前葉の古相頃であろう。

出土遺物

土器 (図版27, 第35図)

40の器台がある。口縁の外反度は鈍く、脚裾部は大きく開く。調整は外面が荒いハケ、内面はナデで絞り痕を残す。胎土は他の器台と同様粗いが、色調が灰黄褐色を呈し他の器台と色調を異にする。口径6.6cm、裾部径8.7cm、器高12.9cmを測る。

石器 (図版27, 第37図)

良質の頁岩製の扁平片刃石斧がある。約 $\frac{1}{2}$ を欠失する。厚さ1.0cmを測り、良く研ぎ出され表面が平滑になっている。

7号貯蔵穴 (図版6-1, 11-1, 第36図)

9号竪穴住居跡の西側3.0mの所で検出した貯蔵穴で、部分的に新しい攪乱を受けている。西側壁はオーバーハングしており、現存形状は楕円形を呈する。規模は長軸1.67m、短軸1.28mを測る。底面は二段掘りをなし、東側が深く掘られ1.10mを測る。8号竪穴住居との間隔も3.5m程あり、8号あるいは9号住居に付随する貯蔵穴であろう。

出土遺物は甕の胴部片(小破片)と砥石がある。貯蔵穴の時期は弥生時代中期前葉の古い時期であろう。

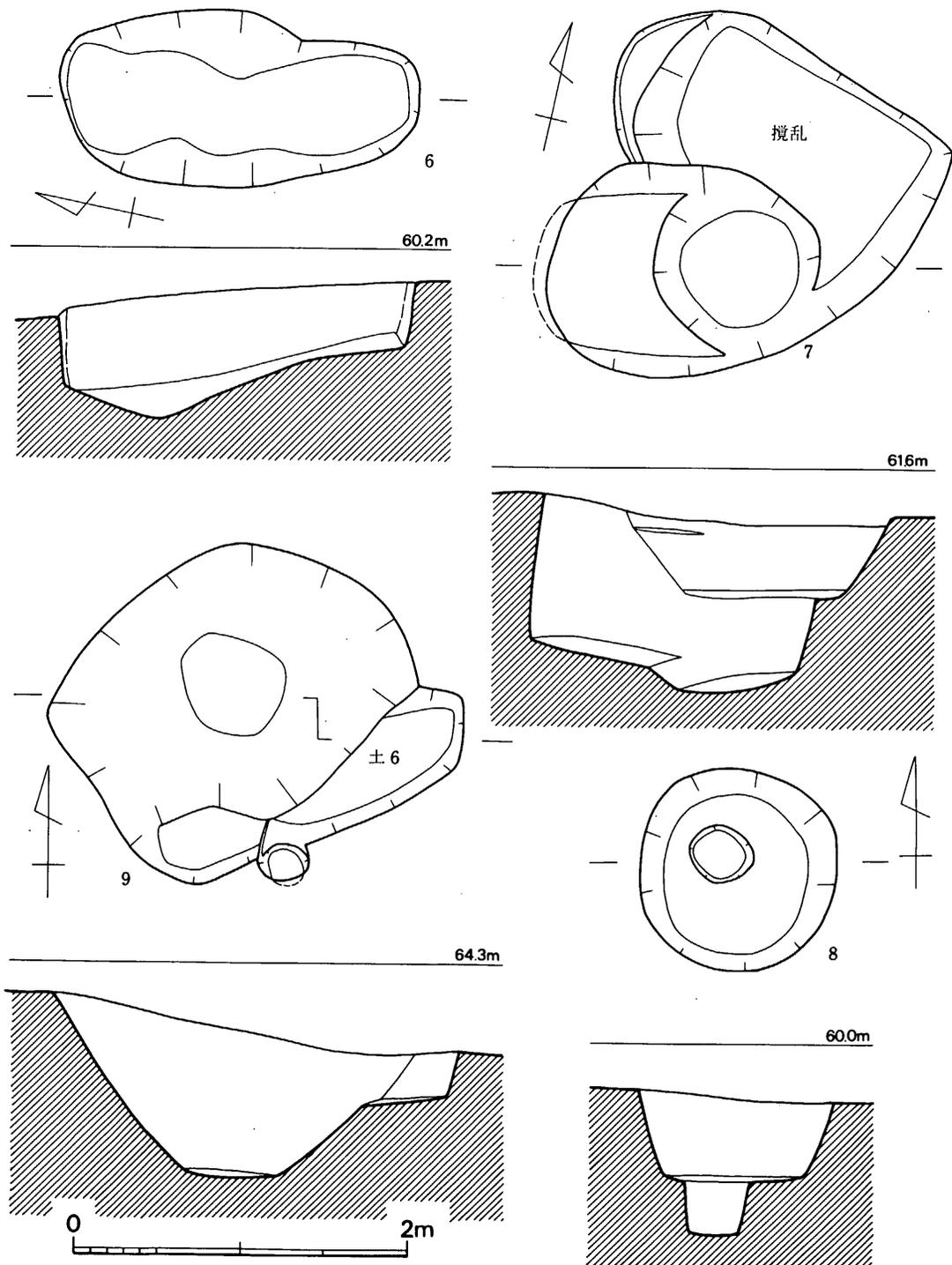
出土遺物

石器 (図版27, 第37図)

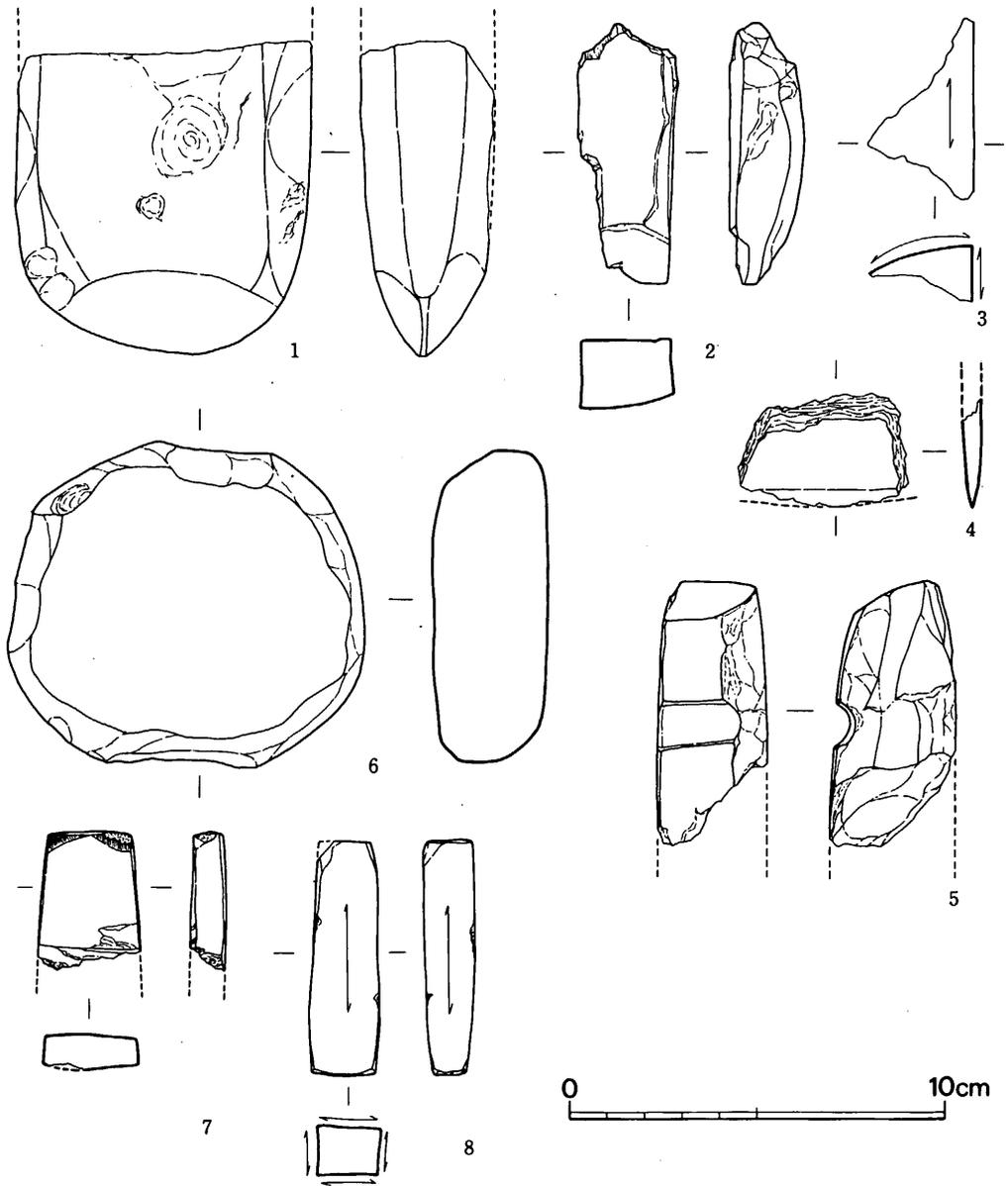
8は良質砂岩製の手持砥石の完形品である。6面全てに使用痕が残る。全長6.3cm、幅1.6cm前後、厚さ1.4cmを測る。

8号貯蔵穴 (図版11-2, 第36図)

丘陵の北斜面の標高60m付近に掘られた遺構で、貯蔵穴とするには規模が小さく別の機能を考えなくてはならないが、ここでは一応貯蔵穴として説明する。平面形態は円形を呈し、規模は直径1.20m、深さ55cmを測る。底面中央には径35cm、深さ30cmのピットを掘り込んでいるが、このピットの用途は明らかでない。



第 36 图 6 号~9 号贮藏穴, 6 号土坑实测图 (1/40)



第 37 图 3号(1)·5号(2~6)·6号(7)·7号(8)
 貯藏穴出土石器实测图(1/2)

出土遺物は皆無で時期設定も不可能であるが竪穴住居群に近似する時期と考えて大過はないであろう。

9号貯蔵穴 (図版12-1, 第36図)

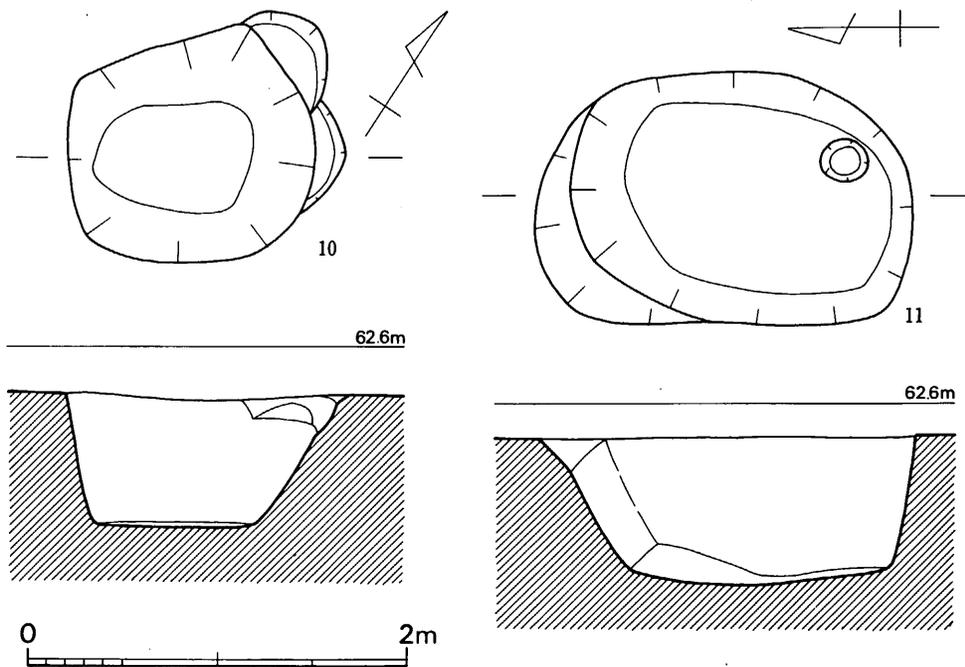
調査区西側の一段高くなった丘陵の東側斜面で検出した貯蔵穴で、10号住居から2.0m離れた位置に在る。10号竪穴住居の付属施設であろう。平面形態は不整円形で、断面形は円錐台形を呈する。規模は2.20m×1.90m、深さは平均で90cmである。

出土遺物が無いため時期は定かでないが、10号竪穴住居に付随する貯蔵穴とすれば弥生時代中期前葉の古相であろう。とすれば、重複関係にある6号土壇出土土器と比較すると新旧関係は貯蔵穴が新しくなる。しかし、接近した時期であることには相違ない。

10号貯蔵穴 (図版12-2, 第38図)

丘陵の頂部付近の標高62.5mの所で検出した遺構で、規模からみて貯蔵穴よりも土壇と判断した方が妥当かとも思える。平面プランは不整楕円形を呈し、断面形は逆台形をなす。規模は上面で長軸1.30m、短軸1.15m、深さ70cm弱、底面で長軸83cm、短軸55cmを測る。

出土遺物は皆無である。



第 38 図 10号・11号貯蔵穴実測図 (1/40)

11号貯蔵穴 (図版13-1, 第38図)

10号と同様丘陵の頂部で検出した遺構であるが、貯蔵穴と見做すには出土遺物も無く、やや規模が小形である。平面形態は不整形円形を呈し断面逆台形であるが、北側壁の傾斜は緩い。規模は長軸1.80m、短軸1.30m、深さ80cmを測る。底面の南西壁際には径25cm、深さ21cmのピットを掘っているが、用途は定かでない。

出土遺物は皆無で時期も不明であるが、集落に付随する遺構であろう。

12号貯蔵穴 (図版7-1, 第31図)

1号貯蔵穴と重複した貯蔵穴であるが不明瞭な点が多い。平面プランは不整形である。規模は長軸が1号に切られ不明で、短軸1.70m、深さ1.0m強を測る。

出土遺物は無いが、1号貯蔵穴と近似した時期の所産で、3号竪穴住居の付属施設の可能性がある。

(3) 土 壙

1号土壙 (図版13-2, 第39図)

丘陵の北西斜面の標高61.5mで検出した土壙で、4号竪穴住居から2.0m南西にあたる。4号住居に伴う遺構であろう。平面形状は不整形長方形で、底面は舟底状を呈する。規模は長辺1.60m・1.70m、短辺60cm・70cm、深さは55cmを測る。土壙内の覆土は黒色土で埋まり、中からは甕形土器の他、炭化した櫛の実が出土している。

出土土器から土壙の時期は弥生時代中期初頭である。

出土遺物

土 器 (第40図)

1の甕が1点ある。短い逆「L」字状の口縁部を有し、頸部は内傾する。肩部から胴部は張る。調整は器面が風化し不明。胎土は砂粒が多く粗い。淡い灰味橙色を呈する。復原口径26.0cmを測る。

2号土壙 (図版14-1, 第39図)

丘陵の北西斜面に掘られた土壙で、4号竪穴住居の西側4.0mにある。3号土壙に切られており、平面形態は方形に近い形状をなすと推測される。底面には深さ15cmの浅い壙を穿っている。上面の一辺は1.50m、中の壙は90cm×95cmを測る。

出土遺物は壺・甕・鉢の他、1号土壙と同様炭化した榎の実が出土している。出土土器から土壙の時期は弥生時代中期前葉の古相である。

出土遺物

土器 (図版27, 第40図)

2は壺の口縁部片で大きく外反する。調整はナデで仕上げ、胎土には砂粒が多く、金雲母を若干含む。灰味黄色の色調を有す。復原口径23.0cmを測る。

3～9は甕である。口縁形態では短い逆「L」字状のものが大半を占め、上面が外傾する4・5以外は全て内傾する。6の口縁はやや発達し新相を示す。調整は総じて外面がハケ、内面はナデで仕上げる。胎土は全て砂粒を多く含み粗い。3の復原口径13.0cmを測る。9は細みの底部で上げ底である。二次加熱を受け赤味をおびた茶褐色に変色する。底径6.5cmを測る。

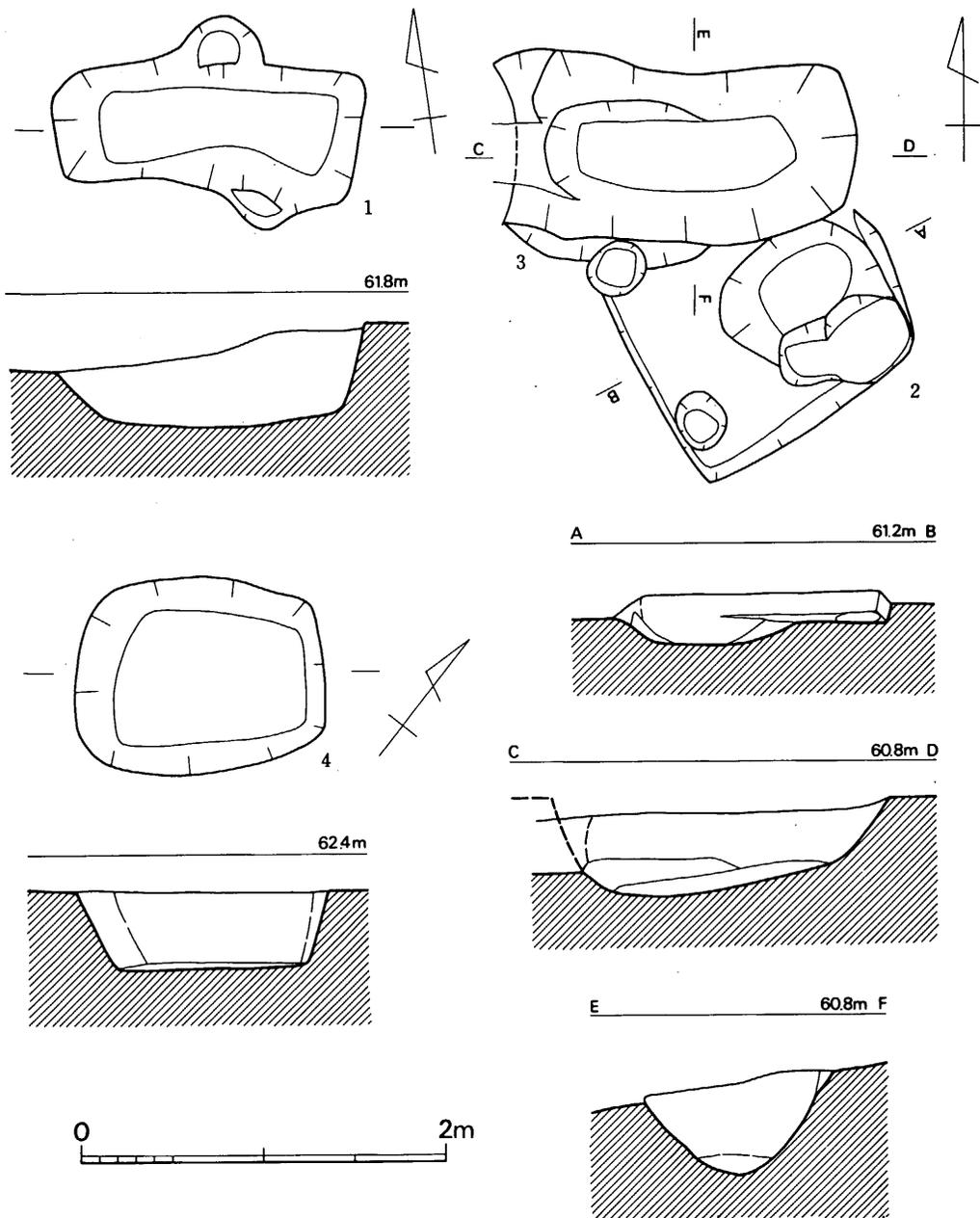
10は鉢の完形品である。逆「L」字状の口縁部を有し、口縁下には三角凸帯を貼付する。底部は小さく上げ底を呈する。調整は内外面ともナデている。胎土は甕と同様粗い。明茶褐色の色調を持つ。口径26.3cm、底径6.4cm、器高18.1cmを測る。

3号土壙 (第39図)

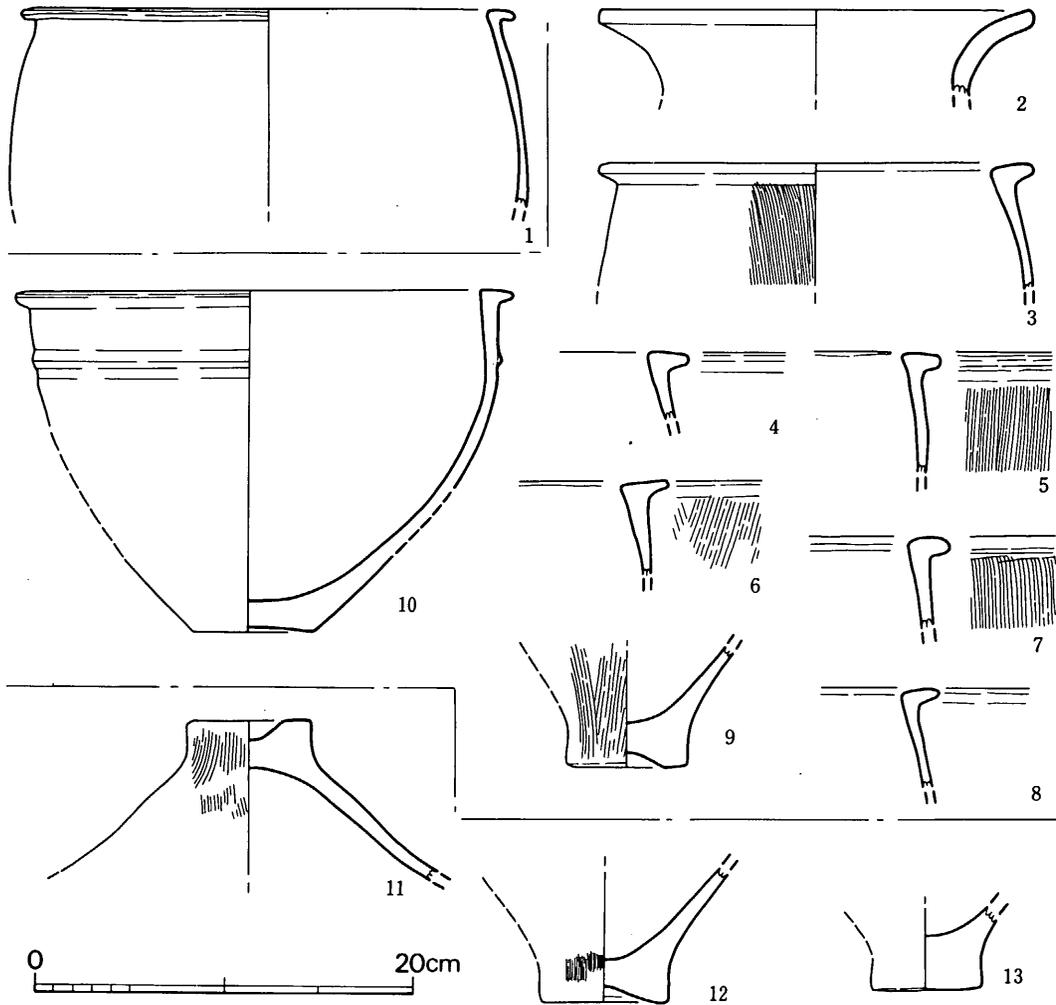
2号貯蔵穴と2号土壙との重複があり、2号土壙より新しいことは調査時に確認したが、2号貯蔵穴との新旧は不明確である。しかし、2号貯蔵穴と2号土壙の出土遺物を比較すると殆んど同時期であることで、当該土壙が2号貯蔵穴より新しい可能性が考えられるが、時間的な僅少差として把握されよう。平面形態は隅円長方形で、計測可能な短軸は95cm、深さ45cm前後を測る。底面は舟底状を呈する。覆土は黒褐色土で埋まり、中から榎の実が炭化した状態で出土しているが、土器は無い。

4号土壙 (図版14-2, 第39図)

丘陵の頂部で検出した土壙である。平面形状は長方形に近く胴張りをなす。規模は長軸1.35



第 39 图 1号~4号土坑实测图 (1/40)



第 40 图 1号(1)·2号(2~10)·6号(11~13) 土壙出土土器实测图(1/4)

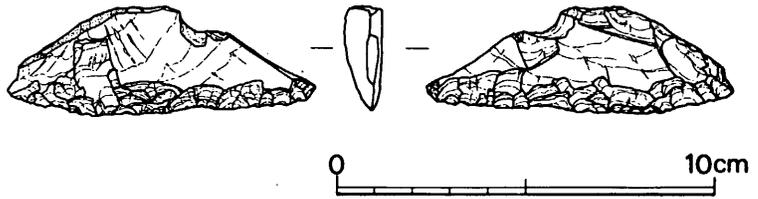
m, 短軸1.07m, 深さ42cmを測る。断面は逆台形状である。覆土は他の土壙と異りくすんだ黒灰色土で埋まっていた。

出土遺物は底面近くからサヌカイト製の搔器が1点あるが、土器の出土は無い。

出土遺物

石器 (図版28, 第41図)

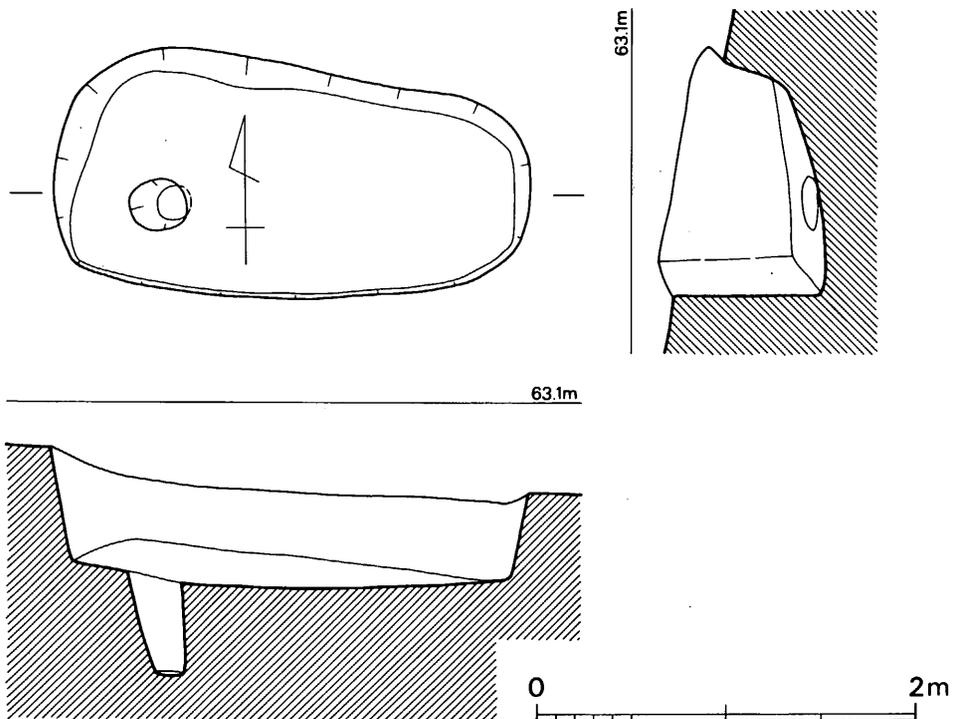
サヌカイト製の横長剥片使用の搔器がある。頭部には古い剥離痕が認められ、この部分を敲打し剥片としている。石材



第 41 図 4号土壙出土石器実測図 (1/2)

には不純物を若干含む。刃部の長さ8.2cm, 幅2.8cmを測る。

5号土壙 (第42図)



第 42 図 5号土壙実測図 (1/40)

調査区の西側の北斜面で検出した土壌である。平面形態は隅円長方形に近く、規模は長軸2.50m、短軸（中央部で）1.25m、深さは最深部で80cmを測る。小口壁は西側が広く掘られ、底面の西側寄りには径30cm、深さ50cmのピットを斜め方向に掘っている。

出土遺物は皆無で、掘削時期や用途も明確ではない。

6号土壌（図版6-2、第36図）

9号貯蔵穴と重複して出土した土壌であるが、大半が貯蔵穴に切られ土壌の片鱗を垣間見たに過ぎない。形状等の詳細は不明で、現存での深さは27cmを測る。

出土遺物は褌・褌蓋がある。出土土器から土壌の時期は弥生時代中期初頭に近い時期であろう。

出土遺物

土器（第40図）

12・13は褌の底部で細みである。12は上げ底を呈し、13は平坦な底部をなす。胎土は前者が細砂粒が多く金雲母も若干含む。後者は細砂粒に赤色粒子を僅かに含む。12の底径7.0cm、13は5.9cmと小さい。

11は褌蓋で摘み部は凹状をなす。調整は外面にハケが残り、内面はナデで仕上げる。胎土は褌同様細砂粒が多く、金雲母を少量含む。摘み部径6.6cmを測る。茶褐色の色調を持つ。

(4) 竪穴遺構

1号竪穴遺構（図版2-1、第5図）

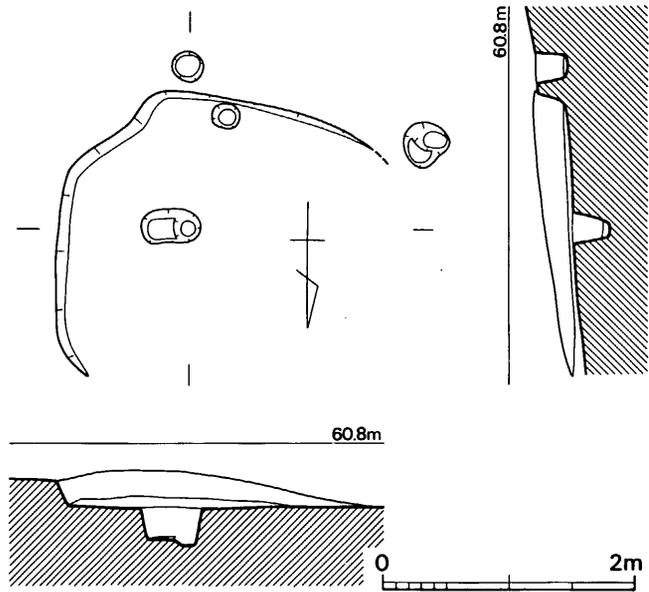
調査区の西側で検出した竪穴遺構で、丘陵の南斜面の標高59.5m付近に設営している。遺構の南側½は流れて崩壊している。平面形状、規模等の詳細は不明であるが、方形乃至長方形と推測できる。北壁沿いには幅25cm、深さ8.0cmの周溝を掘っている。当該遺構の用途は定かでないが、集落の設営時期が2時期とすれば、1号住居（見張り小屋的機能を考えている）と同様見張り小屋的な機能が考えられよう。

出土遺物は皆無であるが、長方形プランを有す竪穴住居群に伴う遺構の可能性も考慮される。

2号竖穴遺構 (第43図)

丘陵の北側斜面に設営された竖穴遺構で、標高60.5m付近に位置する。遺構の北側は流出し遺存しない。平面形態は不明瞭であるが、胴張りの方形であろう。規模は不明であるが、壁高のみ計測でき遺存良好な所で20cmを測る。床面の東側には柱穴を掘っているが、主柱となり得るか否かは不明である。その他詳細は明らかでない。

出土遺物は壺形土器があり、出土土器から竖穴遺構の時期は弥生時代中期初頭頃であろう。

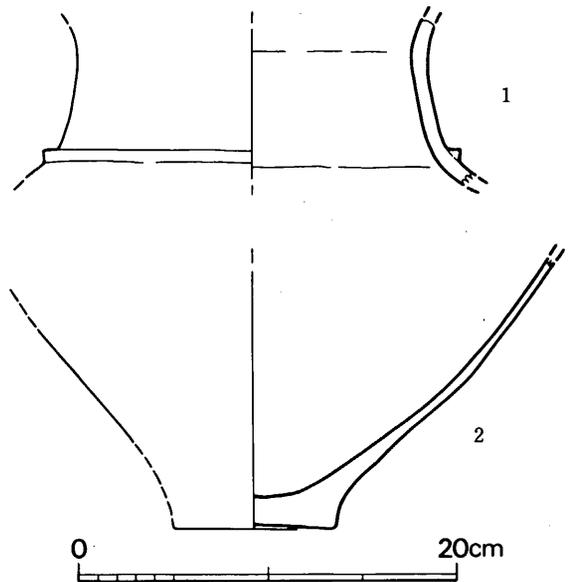


第 43 図 2号竖穴遺構実測図 (1/60)

出土遺物

土 器 (第44図)

1・2の壺の破片があるが両者は同一個体である。頸部は僅かに外反し、肩部には断面三角凸帯を貼付する。頸部から胴上半部は欠損するが、15の胴下半をみるとかなり胴張りとなる。底部は平底である。器表面が荒れ調整は不明であるが、磨きの可能性が高い。内面はナデ仕上である。胎土は細砂粒を多く含み、橙褐色の色調をなす。底径8.5cmを測る。



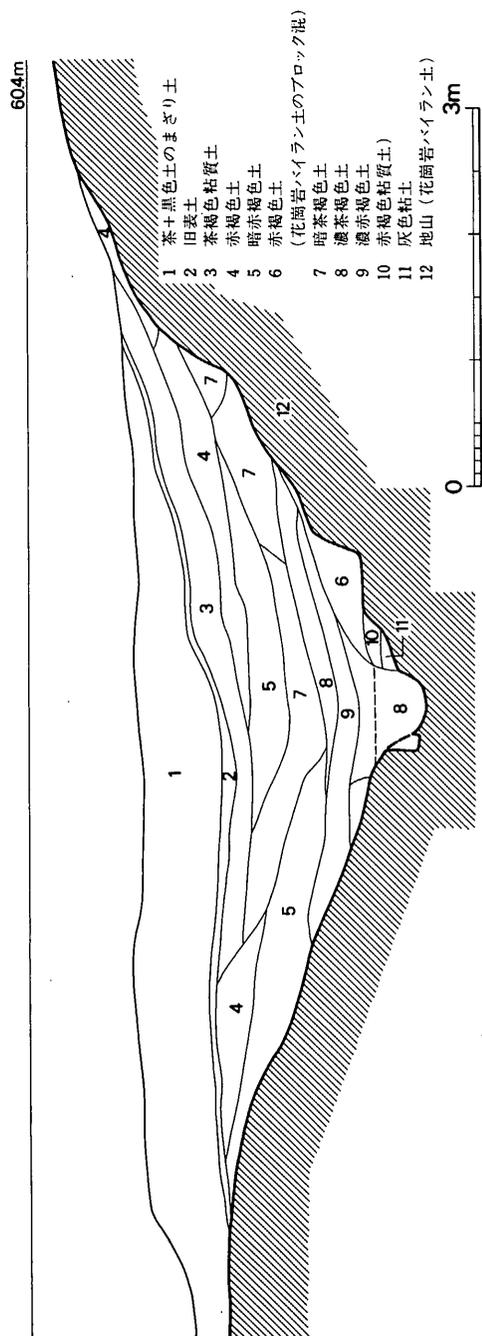
第 44 図 2号竖穴遺構出土土器実測図 (1/4)

(5) V字溝状遺構 (図版15-1・2, 16-1・2, 第45図, 付図)

丘陵の南西側斜面(標高55.5m)から丘陵頂部にかけて検出した遺構で、総延長57.0mを確認した。調査時は戦後の開拓時に掘削された新しい切通しの山道と解釈していた。しかし、記録保存を目的とした調査の観点から検証した遺構の略中央部に試掘溝を設定し断面観察の結果、戦後の開拓時には既にこの遺構は埋没しており、埋没した旧表土の上に客土していることが判明した(第1層)。

旧表土(第2層)以下は断面観察では自然堆積の状況を示し、茶褐色土と赤褐色土で埋っていた。しかも、検出した遺構の中央部幅は他の箇所と比較し幅広となり、後にこの部分が崩壊したことを物語っている。さらに、No.10(赤褐色粘質土層)の上面(この部分は一部にのみ遺存)は非常に硬く締っており、過去の人が幾度となく踏み固めた痕跡を残していた。しかし、最下層(No.8-濃茶褐色土層)で判る様に大部分が降雨による流水で何度となく浸蝕されて抉られた様相を示唆している。

ともあれ、このV字溝状遺構は丘陵南側の狭隘な谷間を利用した所謂谷水田等を経営し、水田の作業労働を終え家路に、あるいは谷間から飲料水等を運ぶための集落への登道としての機能を考えることができよう。道の上端が集落の中央部に位置することからもその可能性が強いといえる。



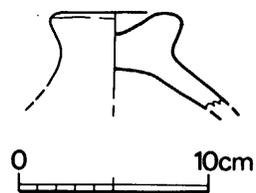
第45図 V字溝状遺構土層断面図(1/60)

出土遺物は莫大な排土量の割には非常に少なく、甕の胴部片と甕蓋とを合わせ数点の土器が出土したに過ぎない。図示した甕蓋片は遺構の最下層（底面）に密着した状態で出土しており、当該遺構に伴うことは確実であることから、このV字溝状遺構の使用された時期は弥生時代中期初頭頃であると考えられる。

出土遺物

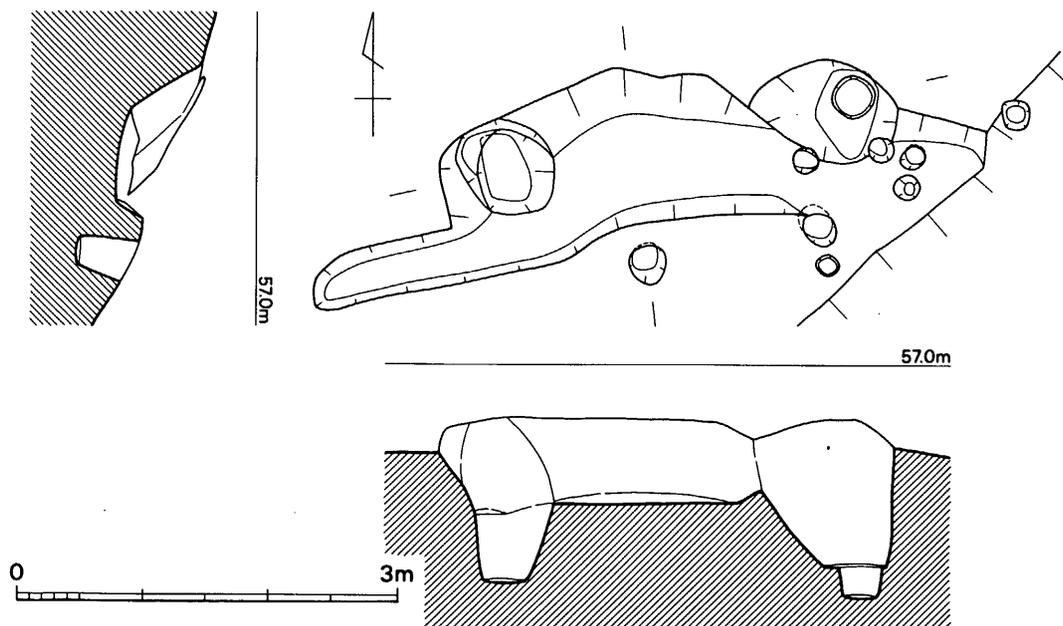
土器（第46図）

甕蓋土器が1点ある。摘み部から体部にかけては「く」字状に外反させ、摘み部上面は凹状を呈する。調整は器面が風化し不明瞭であるが、外面はハケ、内面がナデ仕上げであろう。胎土は他の甕と同様粗い。摘み部径7.0cmを測る。



第46図 V字溝状遺構出土土器実測図（1/4）

(6) 特殊遺構（図版15-1, 第47図）



第47図 特殊遺構実測図（1/60）

丘陵の南側斜面の下位で検出した遺構で、集落へ通じるV字溝状遺構の登口に設置している。遺構は丘陵斜面に平行して細長く掘削し、長さ5.50mの浅い溝状の遺構を構築している。この溝状遺構の一方は登道と繋っている。溝状遺構の北側には径90cmから1.00m前後の大形のピット2本を掘っている。ピットの間隔は2.90mを測り、その周辺にも小さなピット8個を確認した。

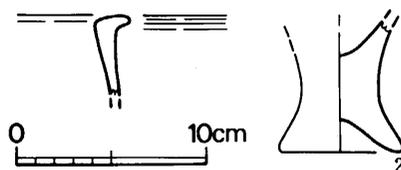
この遺構の機能であるが、設置場所、形状等から考慮すると、集落の入口に高い柱状の施設を立てて①集落構成員達に自己の集落の目印とした、②自分達の集落を誇示した、③集落領域に入る時点で簡略な祭事を取り行なうために構築した遺構等々の推測が可能であろう。

出土遺物は2本の大形ピット内から図示した甕形土器を確認していることから、集落が機能した時期(弥生時代中期初頭～前葉の古相頃)と同一時期に使用されていたことが理解できよう。

出土遺物

土器 (第48図)

1・2は甕形土器片である。1は短い口縁を有し、逆「L」字状を呈する。頸部は僅かに内傾し、竪穴住居内出土の甕と同タイプである。調整は器面が磨耗し不明瞭である。橙褐色の色調をなす。2は甕の底部と考えられるが、当該住居群出土の底部とは形態が異り、非常に細まった底部に裾部は短く開脚する。強い上げ底を呈する。胎土は他の甕と同様砂粒を多く含む。茶褐色を呈し、底径6.5cmを測る。

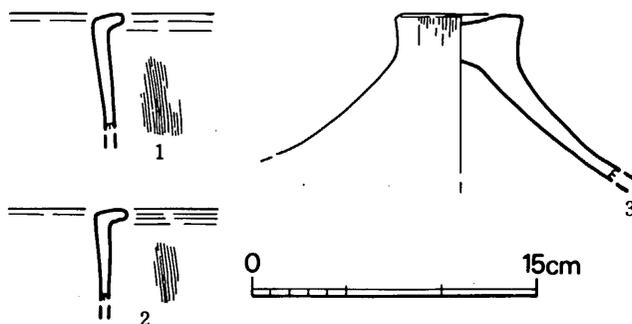


第48図 特殊遺構出土土器実測図 (1/4)

(7) 弥生時代のその他の遺物

土器 (第49図)

P-2 (付図) から出土した甕と甕蓋がある。1・2は如意形口縁から発達した形状を示し、逆「L」字状口縁をなす。口縁上面は僅かに内傾する。調整は両者とも外面がハケ、内面はナデで仕上げ、茶



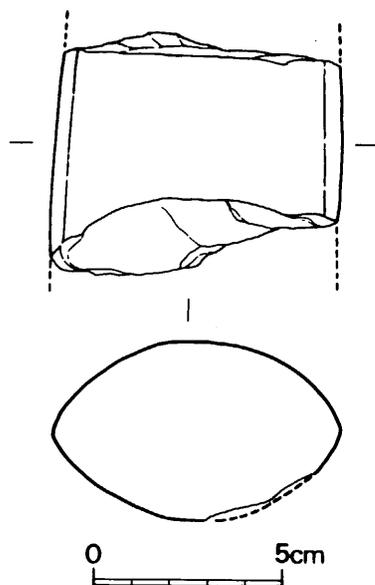
第49図 P-2出土土器実測図 (1/4)

褐色の色調を有す。

3は甕蓋で摘み部上面は凹状を呈する。胎土は砂粒が多く粗い。二次加熱を受け赤味をおびた茶褐色を呈する。摘み部径6.7cmを測る。

石器 (第50図)

玄武岩製の蛤刃石斧片がある。頭部と刃部を欠損し、表面の風化が激しくざらついている。遺構検出時の出土である。



第 50 図 表採石器実測図 (1/2)

3 古墳時代以降の遺構と遺物

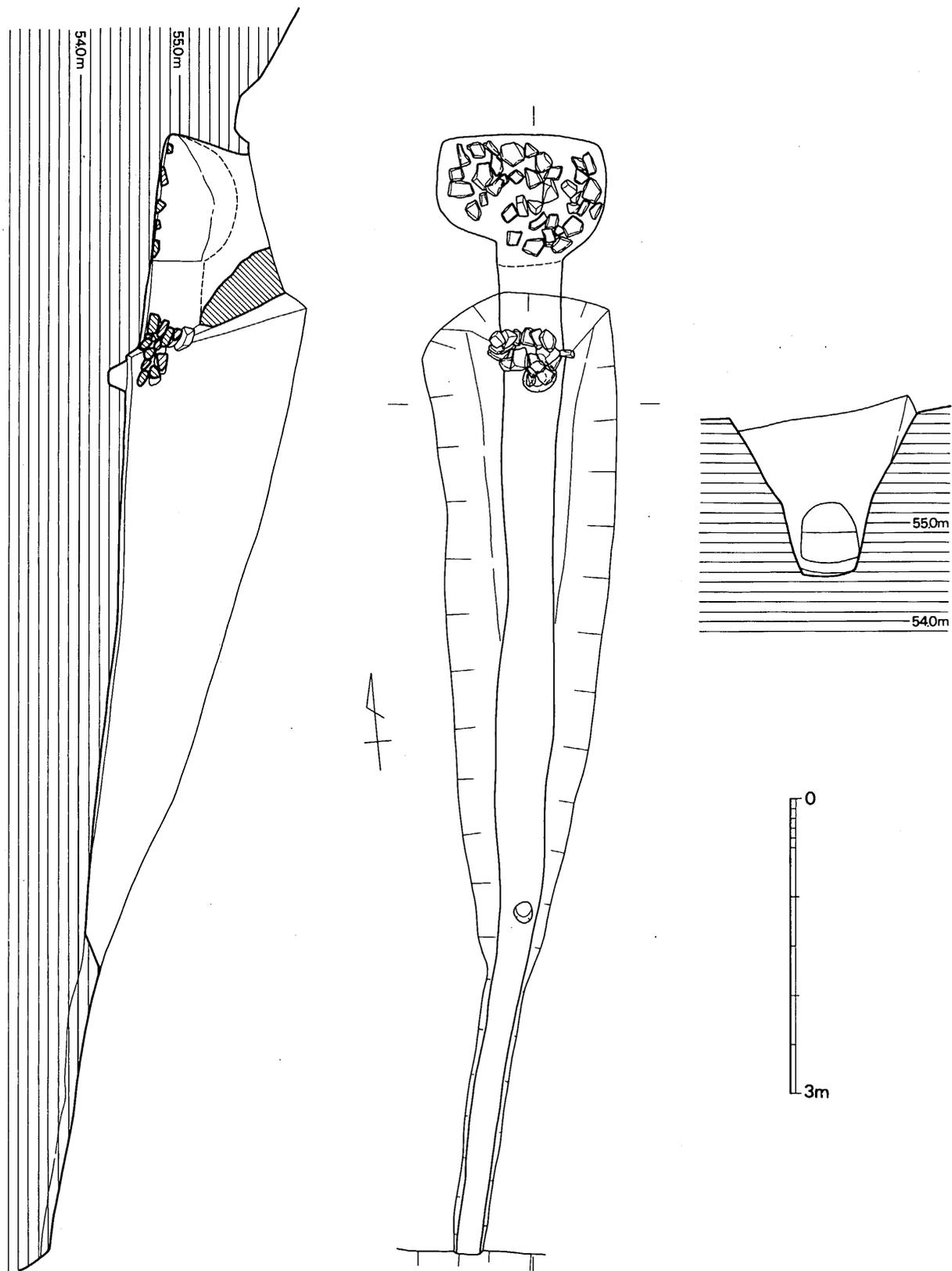
(1) 横穴墓

1号横穴墓 (図版17-1・2, 18-1, 第51図)

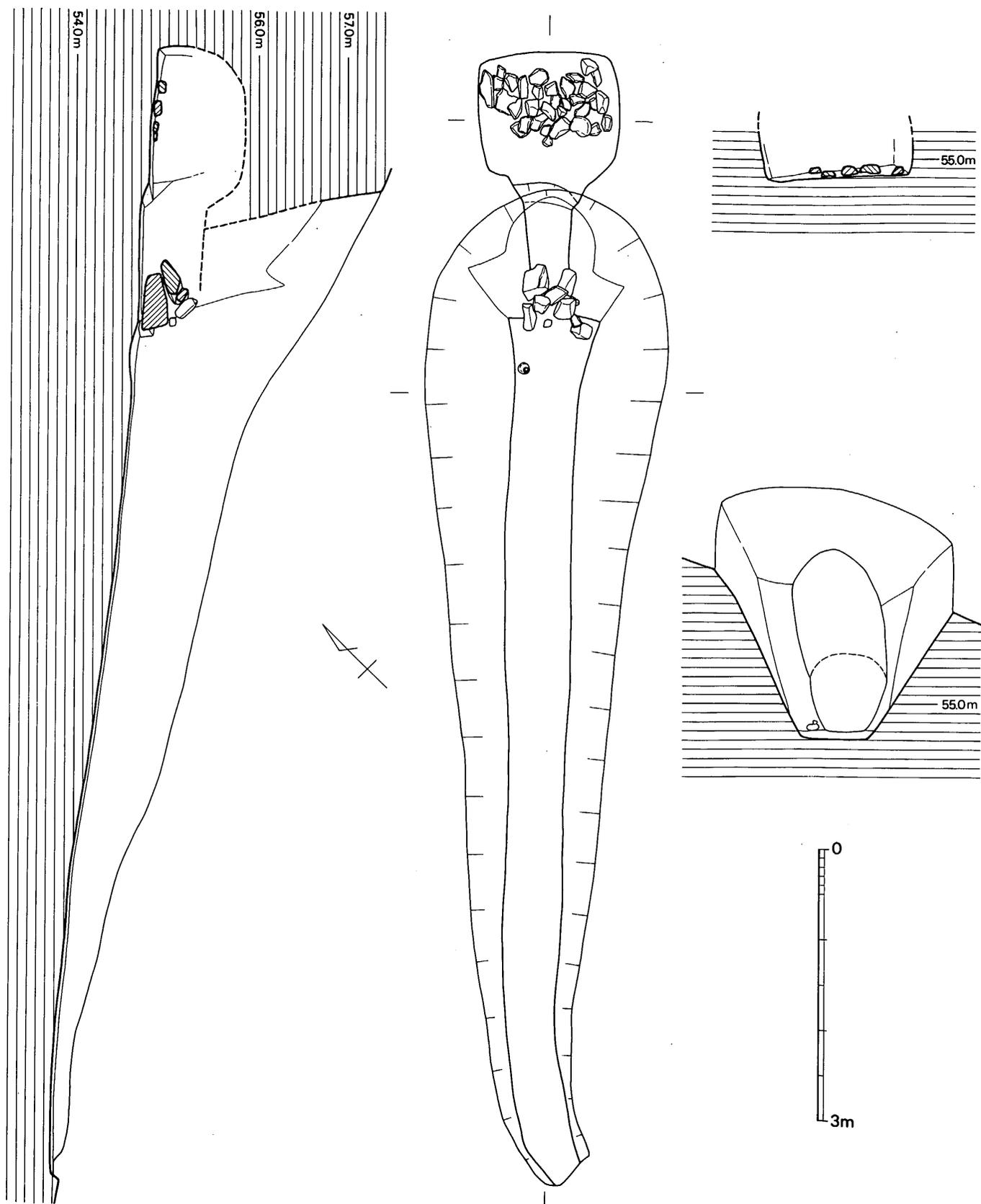
丘陵の調査区の南側斜面で検出した横穴で略南側に開口している。長さ9.0mの細長い墓道を持ち、深くなる墓道の側壁は稜をなす。墓道と羨道とは15cmの高低差を設け、その部分には花崗岩の石塊を積み上げ閉塞する。閉塞石下からは浅いピットを検出した。羨道から玄室の床面は緩い傾斜で掘られ床面の明瞭な区分は認められない。

玄室の平面形状は隅円胴張り長方形を呈し、天井部は崩壊しているが、低いドーム状に切り貫いたと推測される。玄室の床面には花崗岩を疎らに敷き屍床とする。内法は玄室の長さ1.30m、幅1.70m、羨道の長さ85cm、幅60cm、現存部での天井部の高さ55cmを測る。頭位は現在での屍床からは判断し難い。

出土遺物は無い。



第 51 图 1号横穴墓实测图 (1/60)



第 52 图 2号横穴墓实测图 (1/60)

2号横穴墓（図版18-2，19-1・2，第52図）

丘陵の南斜面の花崗岩の風化土に掘り貫いた横穴墓で西南方向に開口している。長さ9.40mの墓道を掘り、墓道と羨道部の境は緩い傾斜をつくり区分する。その部分の床には一段と大きな石を敷き、その上に花崗岩の石塊を積み上げ閉塞とするが、玄門部が崩壊したことから閉塞石は羨道部に散在していた。羨道部床面と玄室床面とは10cmの高低差をつけており、玄室の床面は開口部方向に緩斜をなす。

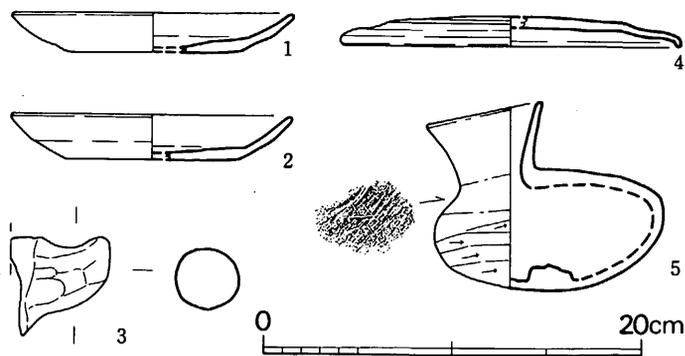
玄室部分は胴張り隅円方形の平面形態を呈するが、天井部は崩壊し形状は不明である。玄室の床面には被葬者を埋葬する部分にのみ花崗岩の敷石を施し屍床を設けている。内法は玄室の長さ1.45m，幅1.55m，羨道の床幅45cmを測る。

出土遺物は玄室埋土中から土師器の坏，墓道から土師器の把手，須恵器の坏蓋・平瓶（完形）がある。この内の土師器坏は中世頃の所産で盗掘時に混入したと考えられ，当該横穴の最初の埋葬時に伴う確実な土器は出土しておらず，3～5は追葬時の遺物と推測される。出土土器から横穴の時期は追葬時期までをみると古墳時代後期から8世紀初頭頃を当てることができよう。

出土遺物

土器（第53図）

土師器 1・2は土師器の坏で玄室埋土中（上層）からの出土である。いずれも小破片で，胎土には微砂粒を多く含む。色調は橙褐色。2の底部は糸切り痕が僅かに残る。1の復原口径14.9cm，底径9.3cm，器高2.1cm，2の復原口径14.9cm，底径8.9cm，器高2.4cmを測る。

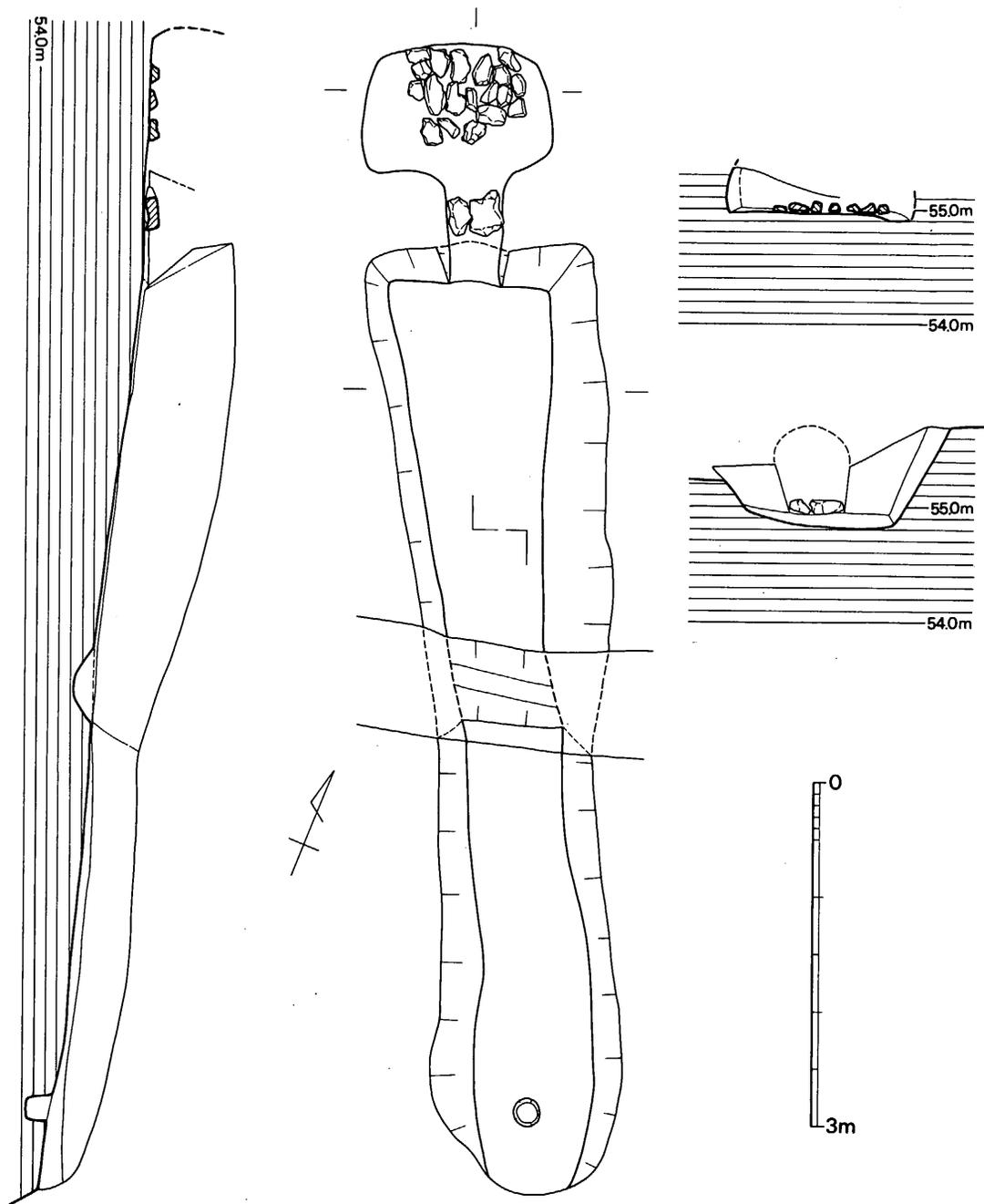


第53図 2号横穴墓出土土器実測図（1/4）

3は短い把手で墓道内からの出土である。胎土は砂粒を多く含む。橙色を呈する。

須恵器 4は坏蓋の破片で扁平な形状をなす。復原実測である。天井部外面は回転ヘラ削り痕を残す。復原口径18.0cmを測る。

5は平瓶の完形品である。閉塞石近くの墓道の左側に置いた状態で出土した。焼成は不良で



第 54 图 3号横穴墓实测图 (1/60)

器表面がざらついている。胴下半は手持へら削りを施し、他は横ナデで仕上げている。底部内面は粘土が凸状に残り削り取っていない。肩部には「キ」状のへら記号を刻む。口径6.3cm、器高8.8cmを測る。

3号横穴墓（図版20-1・2，第54図）

丘陵の南側斜面で検出した横穴墓で南東方向に開口している。墓道は途中から新しい切通しの山道に削平され、一部新しい溝状遺構に切られているが、現存での長さは7.90mを測る。墓道の南側底面には深さ20cmのピットを掘っている。墓道と羨道とは5.0cmの高低差で区分するが、玄室と羨道部との区分は認められない。

玄室の平面形態は隅円長方形を呈し、天井部は崩壊しており形状は不明である。羨道床面には閉塞石の根石と考えられる花崗岩を2個並べていた。玄室の床面には奥壁側から中央部にかけて花崗岩の石塊を敷き屍床としている。内法は玄室の奥行が1.15m、幅1.62m、羨道の幅は狭い所で40cm、広い箇所50cmを測る。

出土遺物は玄室、墓道とも皆無であるが、他の横穴と同一時期であろう。

4号横穴墓（図版21-1・2，第55図）

3号横穴墓と略同一方向に開口し、横穴の中で丘陵の最も下位に位置する。墓道は現代の切通しの山道に切られ、長さ2.0m遺存するに過ぎない。墓道と羨道とは20cmの落差をつけており、その部分に花崗岩を積み上げ閉塞とするが、上部は盗掘を受けたため崩壊していた。玄室と羨道との境部は床面では区分しておらず、玄室内の奥壁から約 $\frac{1}{2}$ に花崗岩を敷き詰めて屍床とし、その部分に5.0cmの高低差をつけている。玄門の両裾は不整いで、玄室の平面形態は不整胴張り方形を呈する。天井部は崩壊し不明である。さらに、墓道の右側には小形の玄室を掘り、無造作に花崗岩で閉塞していた。小児を埋葬したものであろう。

出土遺物は須恵質の高台付碗と鉄鏃があるが、いずれも墓道からの出土で、玄室内からの出土遺物は無い。高台付碗は奈良時代のもので追葬時の遺物であろう。横穴の上限期は古墳時代後期頃と考えられよう。

出土遺物

土器（56図）

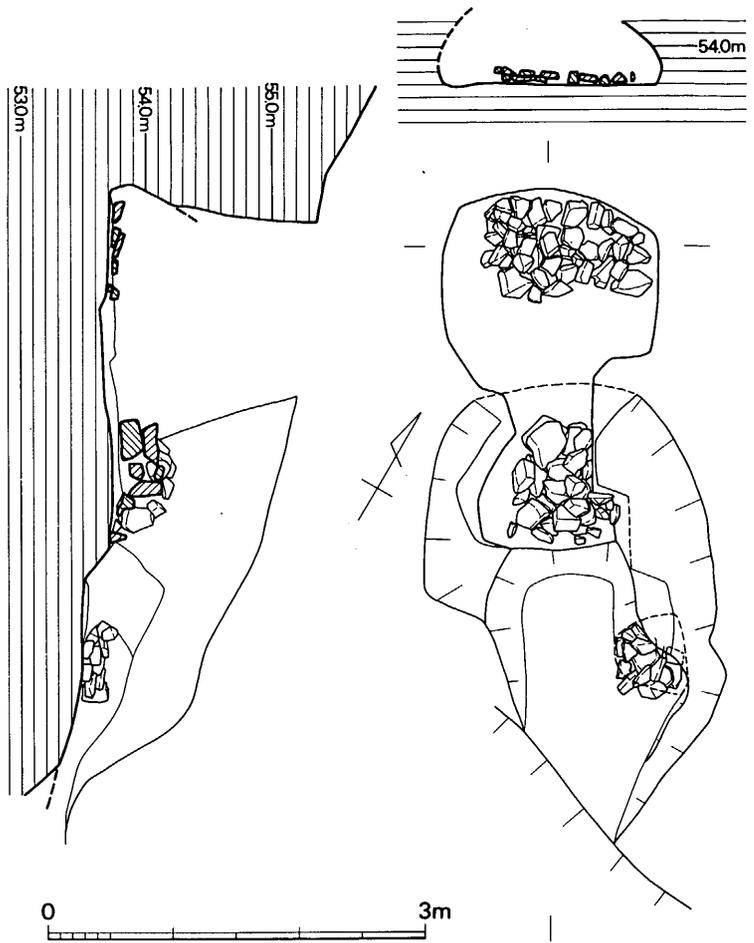
墓道内の覆土中から出土した須恵質の高台付碗の破片が1点ある。底部付近が遺存するのみ

で復原实例である。
調整は底部外面が回転へら削りをナデ消しており、他は横ナデで仕上げる。焼成は軟弱で明灰色を呈する。復原底径12.6cmを測る。

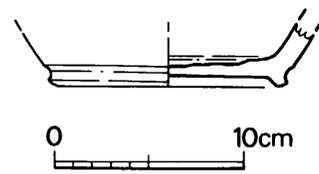
鉄器

(図版28, 第57図)

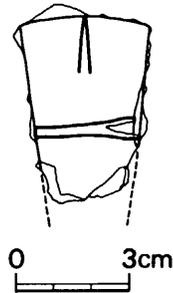
崩壊した閉塞石内から出土した鉄鏃で茎部を欠失する。刃部幅3.4cmである。方頭廣根斧箭式である。



第 55 図 4号横穴墓実測図 (1/60)



第 56 図 4号横穴墓出土土器実測図 (1/4)

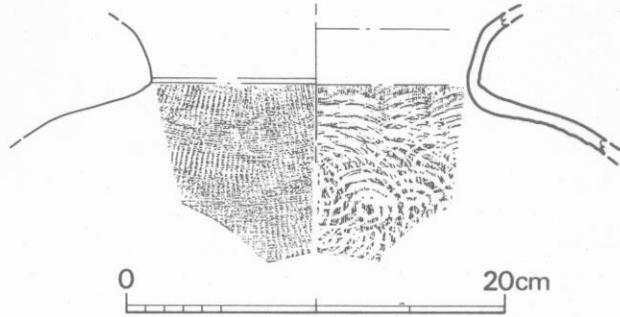


第 57 図
4号横穴墓出土鉄器実測図 (1/2)

(2) 古墳時代のその他の遺物

土器 (第58図)

丘陵の南斜面で遺構検出時に採集した須恵器の甕形土器で、頸部から肩部片である。調整は頸部が横ナデ、肩部外面は平行叩キ、内面は青海波が残る。表面には灰をかぶっている。焼成は堅固で細砂粒を若干含む。



第 58 図 南斜面表採土器実測図 (1/4)



調査作業風景

III 発掘調査の記録

2 真竹遺跡の調査

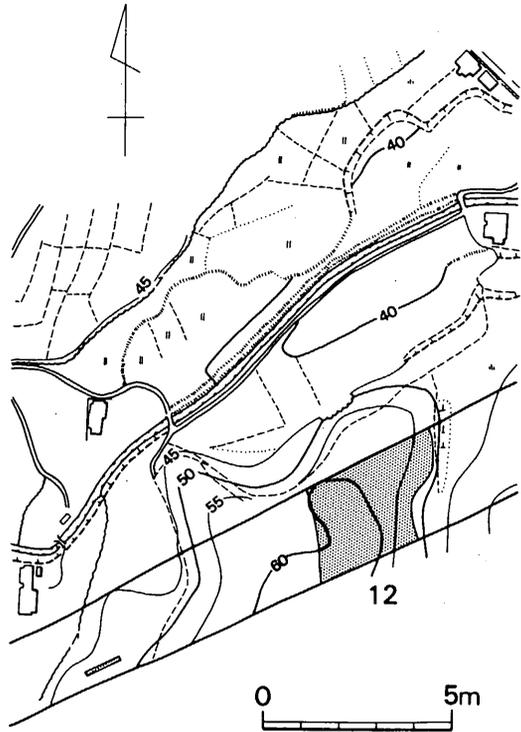
遺跡の概要

真竹遺跡は、福岡県筑紫野市大字原田字真竹に所在する。当初重機（バックホー）による表土剥ぎを実施したが、重機の進入路が確保できず佐賀県基山町側から路線内を縦断する方策をとったことから調査地点に到達するまで相当の時間を要した。しかも、調査区外への排土が不可能なため、排土を調査区内で反転する方法で調査を遂行することとなり、調査面でも苦慮した。

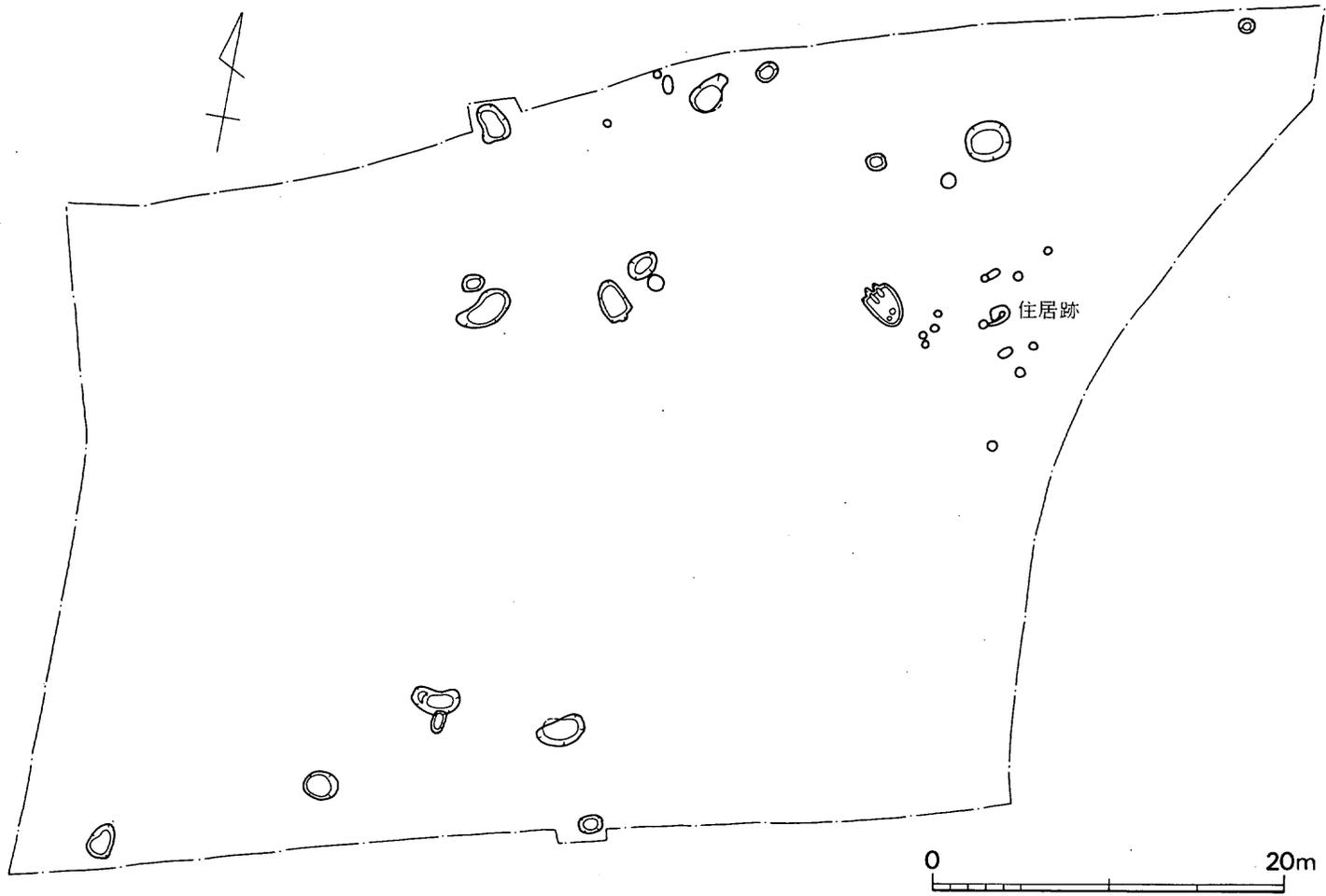
遺跡は周囲の低丘陵から派生する標高55mから60mに在り、丘陵の北側端部にあたる。遺跡の北側には狭い谷水田が営まれており、水田との比高差は15m～20mを測る。

調査は先ず作業員による遺構検出してから実施した。その結果、遺構は殆んど後世の畑作で削平されており、しかもその後竹林として利用されていたことで遺構の遺存状況は極めて悪く、竪穴住居の存在を示唆する柱穴と時期の明らかなでない土壌状遺構を確認したに過ぎない（第60図参照）。

柱穴の廻りには一部焼痕の顕著な所があり、少量の甕の小破片と黒曜石の剥片が出土していることから、本来は何軒かの竪穴住居が存在していたと推測されるが、調査でその実体を把握し得ない状態であった。



第 59 図 真竹遺跡の地形図と調査図（1/200）



第 60 図 真竹遺跡遺構配置図 (1/400)

IV おわりに

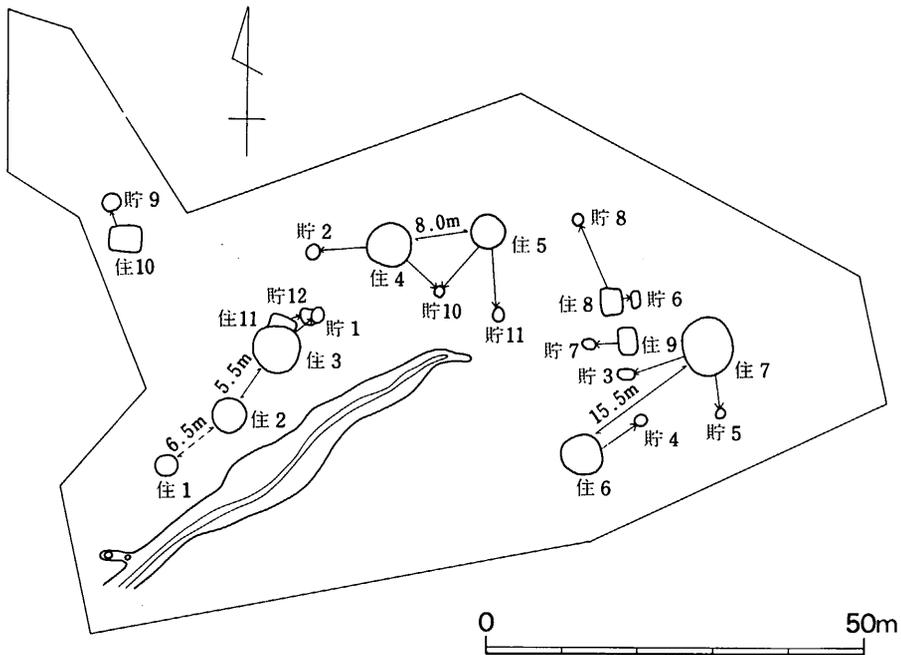
合の原集落の性格とその位置付け

合の原遺跡は前述したように、弥生時代中期初頭から前葉の古相にかけて営まれた集落である。それ以前における北部九州地方の弥生時代前期の集落は検証例が少なく、集落の実体は不明確な点が多いが、水田耕作の関係から設営場所として主に平野内の微高地が選定されていた。前期末頃に至ると野黒坂遺跡のように集落は低地から丘陵上へと立地条件を変え始め、中期初頭から前葉頃には丘陵上に集落を設ける場合が普遍的な傾向となる。筑紫野・小郡市地域も例外ではなく、周辺一帯の低丘陵には弥生時代前期末から中期前葉頃の集落の発掘例は多い。例えば種畜場、横隈山、牟田々の諸遺跡が好例であろう。これらの集落は野黒坂や横隈山の2遺跡で検証されたように10軒程度の竪穴住居から構成されている。

合の原遺跡においては竪穴住居跡11軒を検出したが、円形住居と長方形住居との重複はあるものの両者の設営時期は出土土器が示すように時間的な僅少差は認められるが、幅をもつ時期差としては捉えられない。つまり当該集落は弥生時代中期初頭の時期に平野から丘陵に居住領域を変更した集団で、しかも丘陵上では短時期に終焉を向えたことが理解できよう。

また、丘陵上の竪穴住居の設営状況を特に円形住居でみると、住居と住居の間は短いもので5.5mの間隔を確保し、一定間隔の居住領域を設定している。方形住居でみると8号住居と9号住居との間隔が2.0mと狭く、8号住居が火災に遭遇しているにも拘らず、9号住居が類焼を免れており、両住居は同時併存の可能性が低いことが推測できる。8号住居の住人が家屋を廃棄し、新たに9号住居に移り住んだと考えられる。

さらに、個別竪穴住居には全てではないが、貯蔵穴あるいは土壇等の付属施設を具備しており、貯蔵施設を保有しない住居は1号と2号のみである。図示したように重複する3号と11号住居に付属する貯蔵穴は1号と12号と考えられ、4号住居は2号貯蔵穴、1号～3号土壇を付属施設とし、10号貯蔵穴もその可能性を残している。5号住居は11号貯蔵穴、6号住居は4号貯蔵穴、7号住居は前述したように、3号貯蔵穴と住居の両方の遺構から出土した石庖丁が接合した理由から3号貯蔵穴を付属すると解釈でき、5号貯蔵穴も近辺に他の竪穴住居が見当たらないことから7号住居の所有と考えられ、2基の貯蔵穴と他の住居に例をみない屋内貯蔵穴を保有する等、食糧の分配率に格差のあることを示唆するもので、7号住居は明らかに優位的存在であったことを窺わせる。8号住居は8号貯蔵穴（6号貯蔵穴は貯蔵施設とは考えられない）、9号は7号貯蔵穴、10号住居は9号貯蔵穴、6号土壇等が個々の所有施設と推測できよう。しかも、集落に通じるV字状の道をも設定し、登口にポール状の施設を備える等集落として完備



第 61 図 竖穴住居と貯蔵穴の関係図 (1/1,000)

し自己完結的な様相を示唆し、明らかに一単位集団が弥生時代中期初頭に当該丘陵に根づいたことになる。

集落総体からみると竖穴住居の中で最大規模を有す7号住居を集団の頂点として、個々の竖穴住居とは相互に有機的結合関係にあったと考えられ、7軒から9軒の住居構成員が一単位集団を構成し、南側の狭隘な谷を利用して谷水田を経営していたことが理解できよう。谷水田を生産基盤とした生産物は各々の住居に分配され、分配された生産物は各住居の所有する貯蔵施設に蓄え消費する単位でもあった。

しかも、この集団は短期間に集落の設営を終えており、他地域へ移住した過程は平野に生産基盤を有す母集団から分村し、後に再度吸収され統合されたことを物語るといえよう。分村過程において、個々の住居構成員間には少なからず格差が生じ、2号住居（1号住居は前述のごとく見張り小屋的色彩が強いと考えている）には個有の貯蔵施設を持たない等の不均等性を内在していたと考えられる。

また、3号住居から出土した多数の黒曜石の小剥片が物語るように一部で石鏃の製作に従事した成員が想定され、小集団内での分業的役割が存在した事実を知り得るのである。石鏃の製作は谷水田が示す生産性の低さから副次的な食料の確保の一手段でもあった。出土数の多い生産工具は森林の伐開での集落設営のための領域確保、竖穴住居建設の資材の獲得等の開拓者的

集団の意味あいも兼ね備えていたと推測できよう。

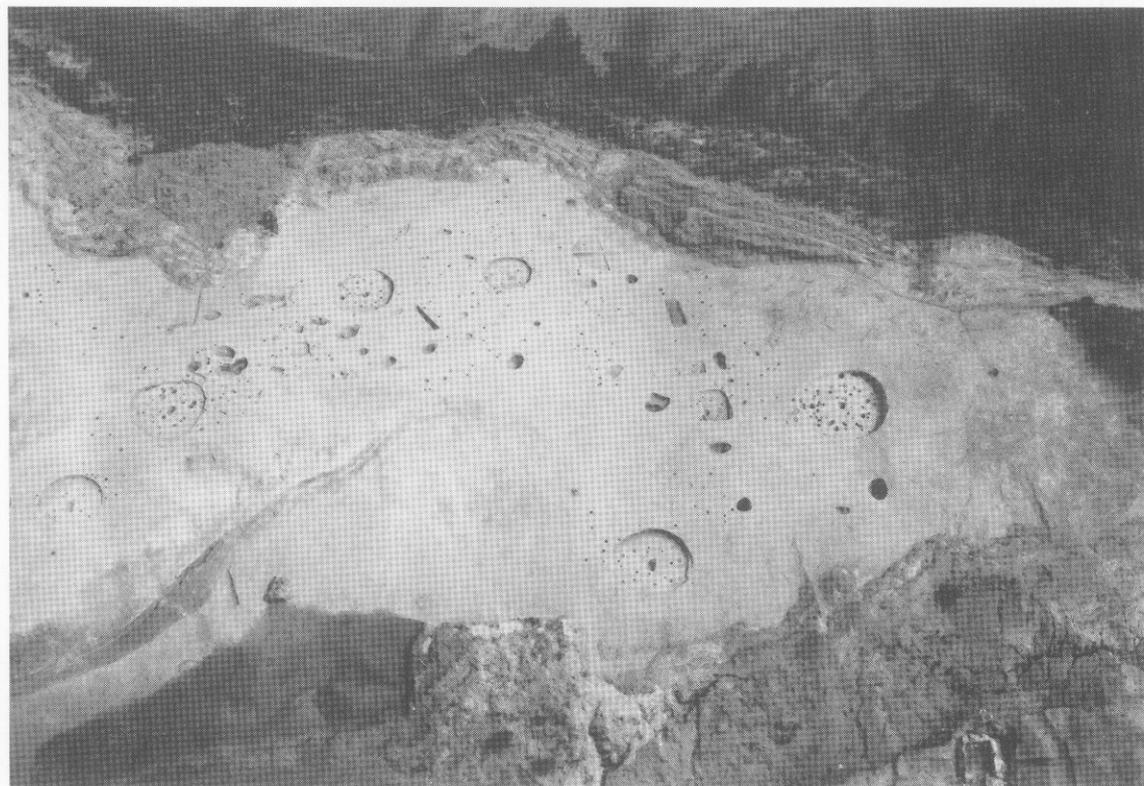
集落内における住居の設置場所からみると、唯一鉄器を所有していた6号住居は最大規模をなす7号住居に隣接して設営されており、7号住居の構成員とより近親的な関係にあったと推測され、4号・5号住居、2号・3号住居は個有の居住領域を保ち乍らも、その居住間隔はより接近した状況で営まれていることが判る。

以上のようにみると、7軒から9軒をグループとする単位集団内にも、弥生時代前期から継承された血縁的紐帯の色彩の強い2軒の住居を最小単位としたグループによる地縁的単位集団を構成していたと理解できるのではないだろうか。

図 版

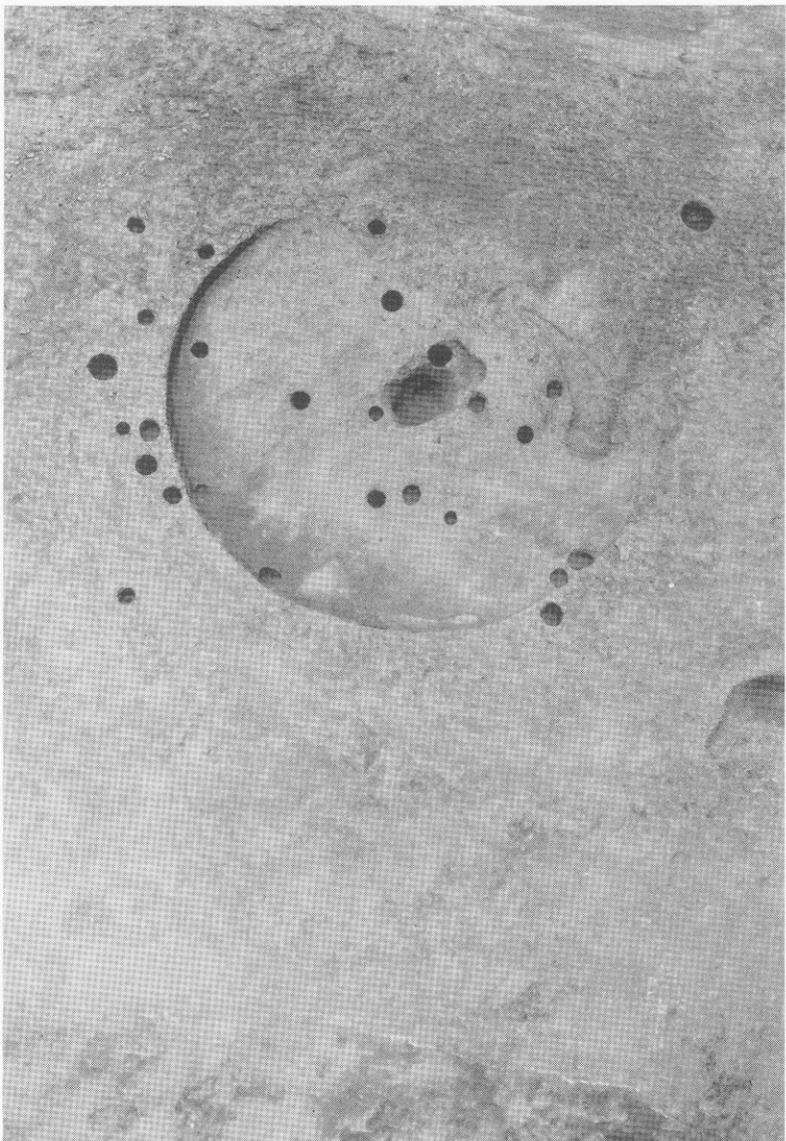


(1) 合の原遺跡とその周辺俯瞰

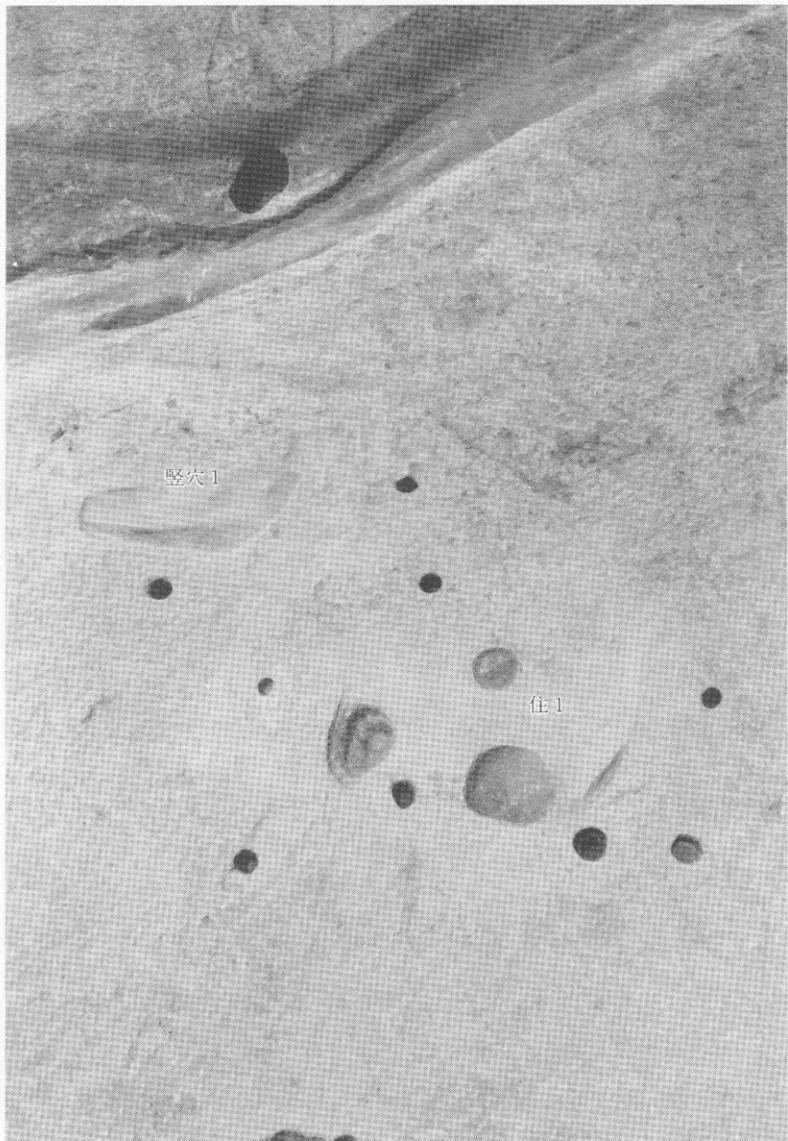


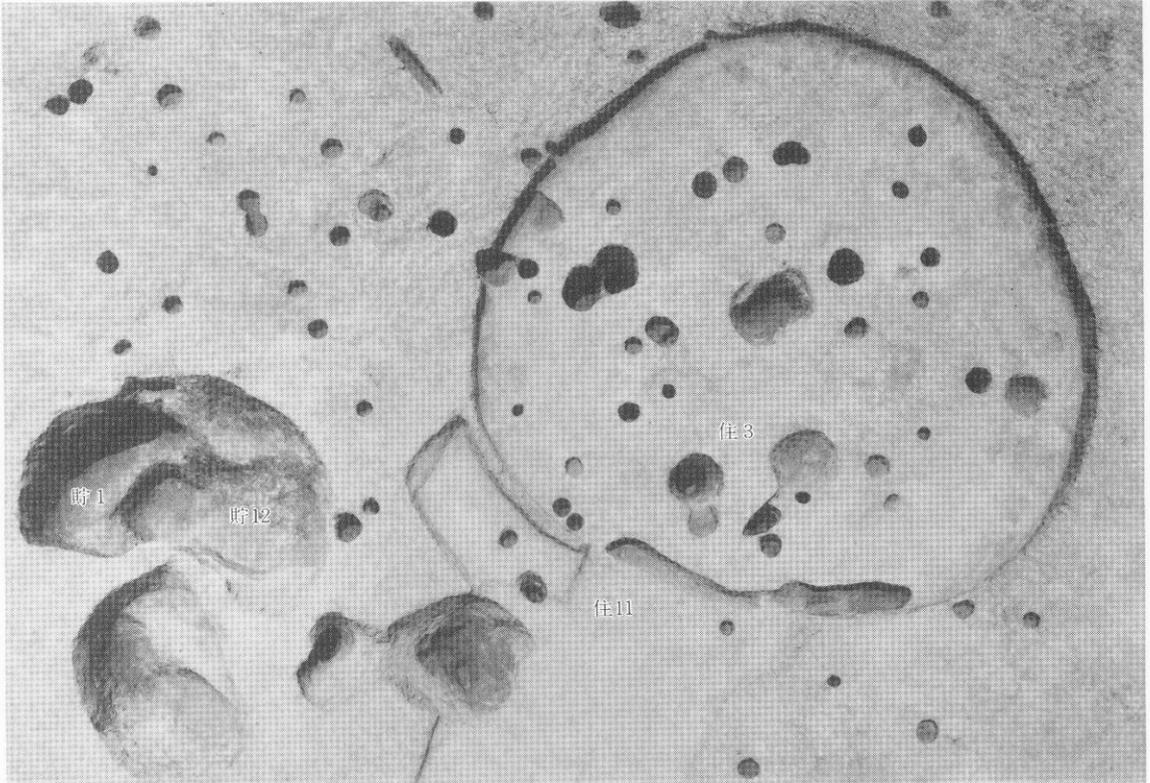
(2) 合の原遺跡俯瞰

(2)
2号竖穴住居跡

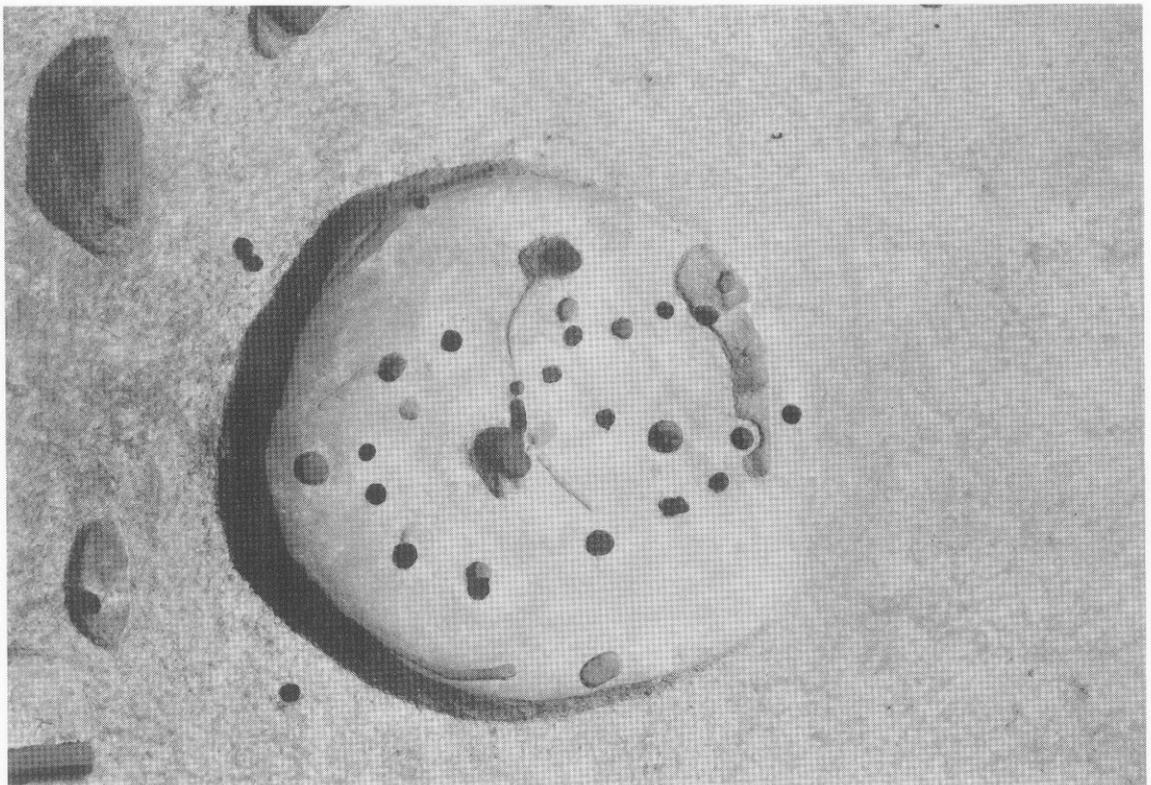


(1)
1号竖穴住居跡と竖穴遺構



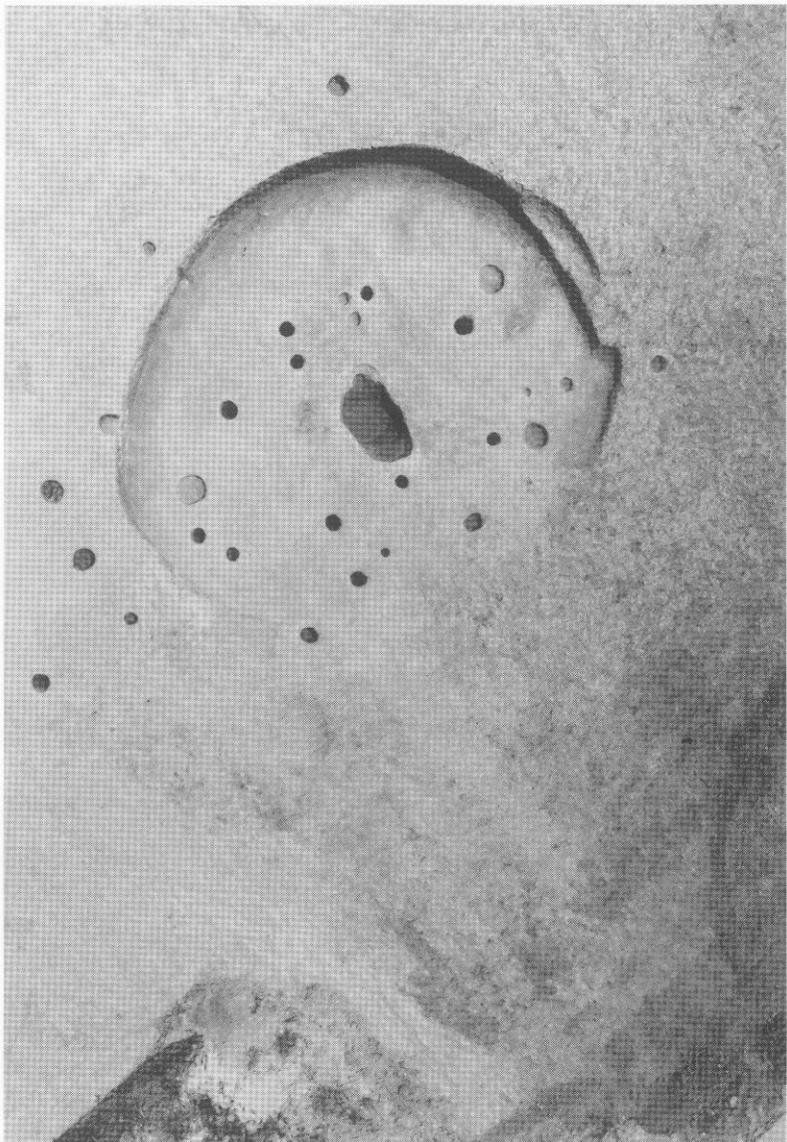


(1) 3号・11号竪穴住居跡と1号・12号貯蔵穴

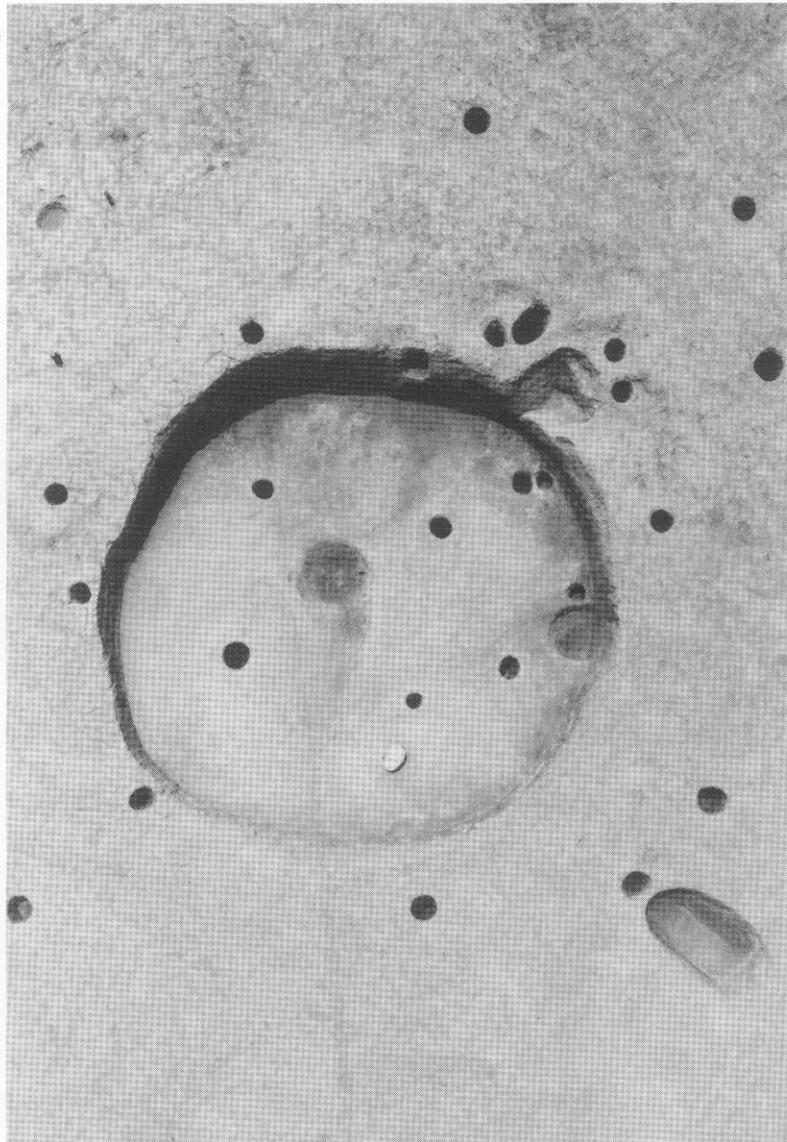


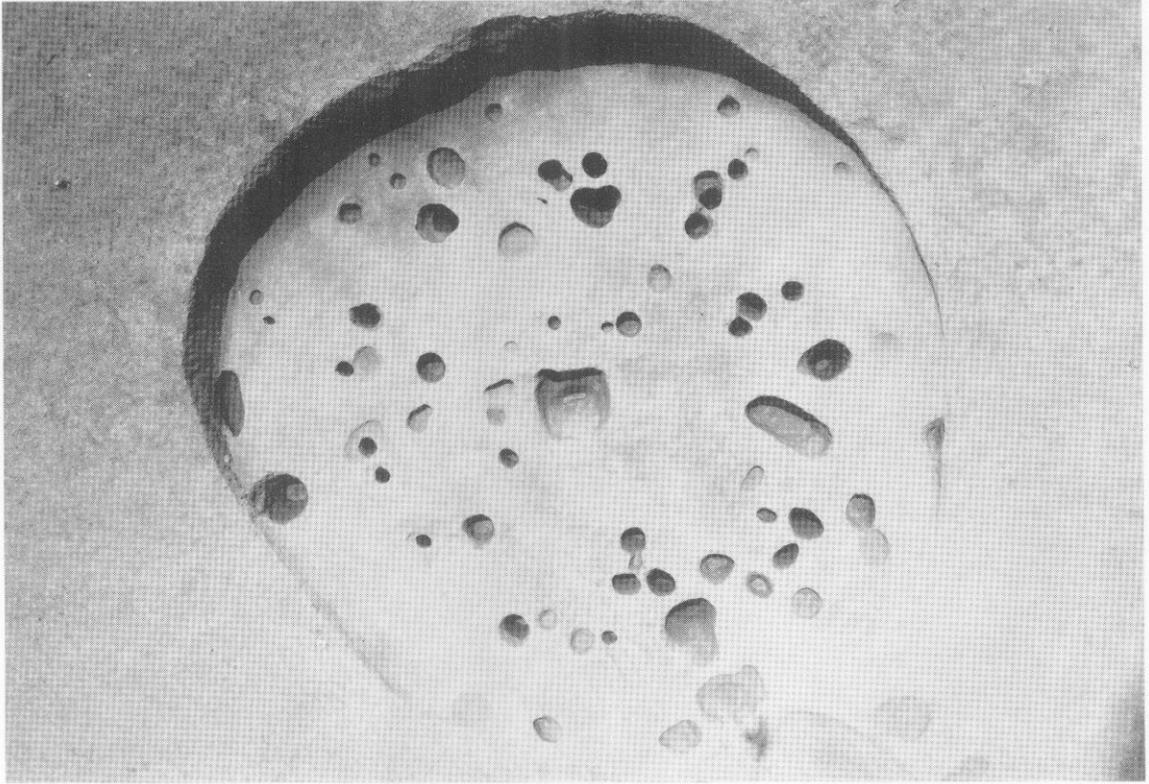
(2) 4号竪穴住居跡

(2) 6号竖穴住居跡

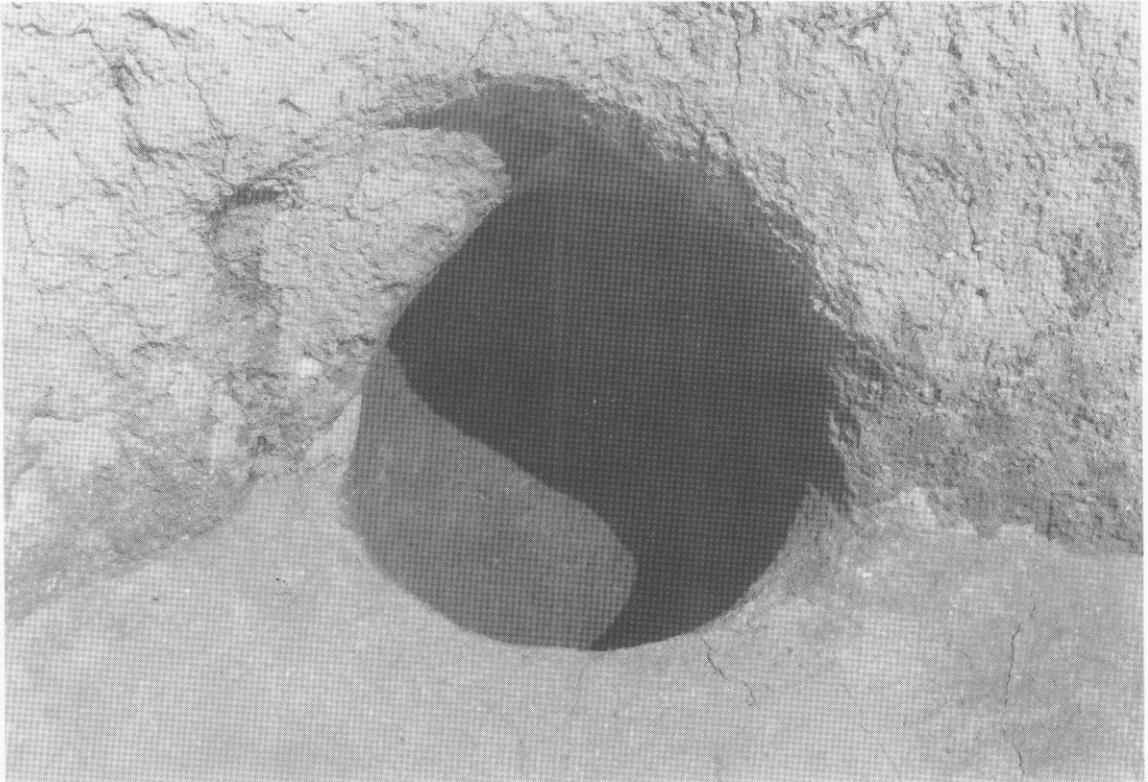


(1) 5号竖穴住居跡

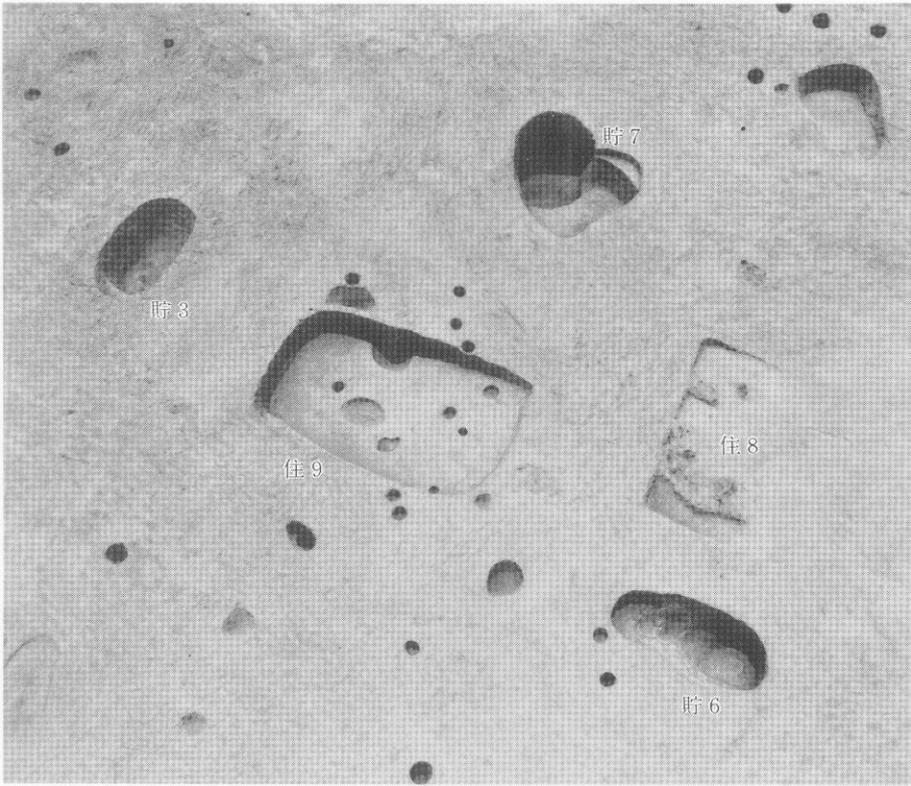




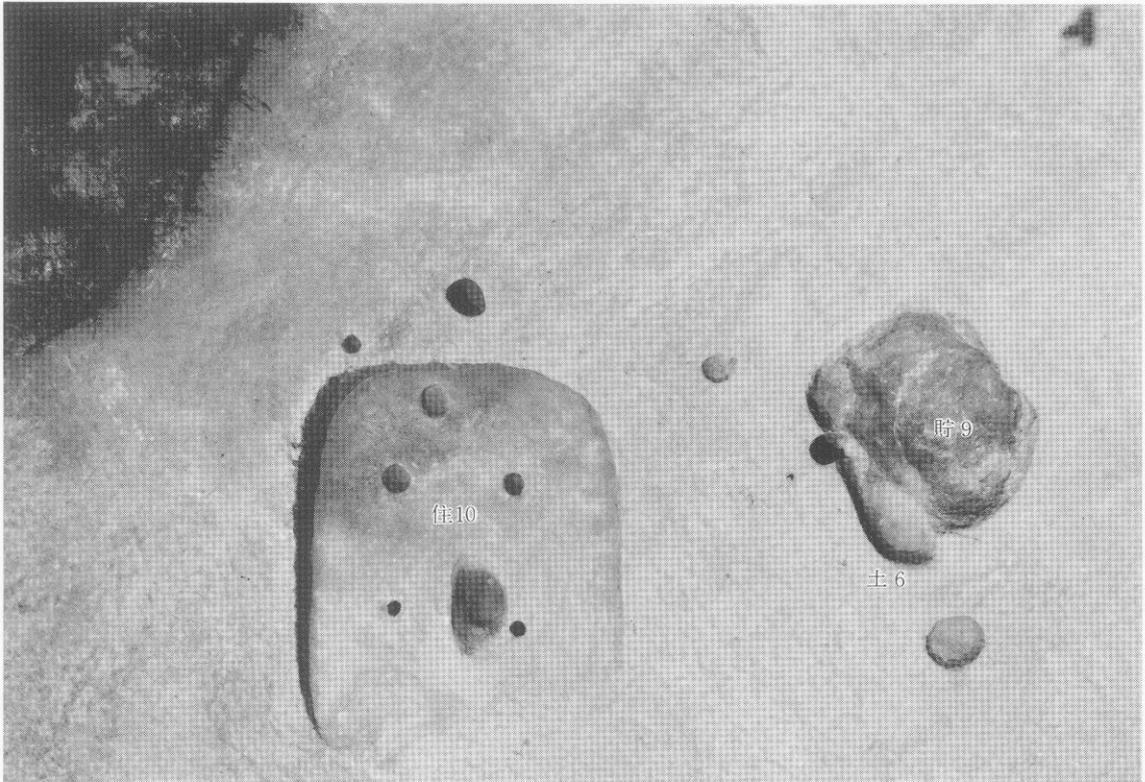
(1) 7号竖穴住居跡



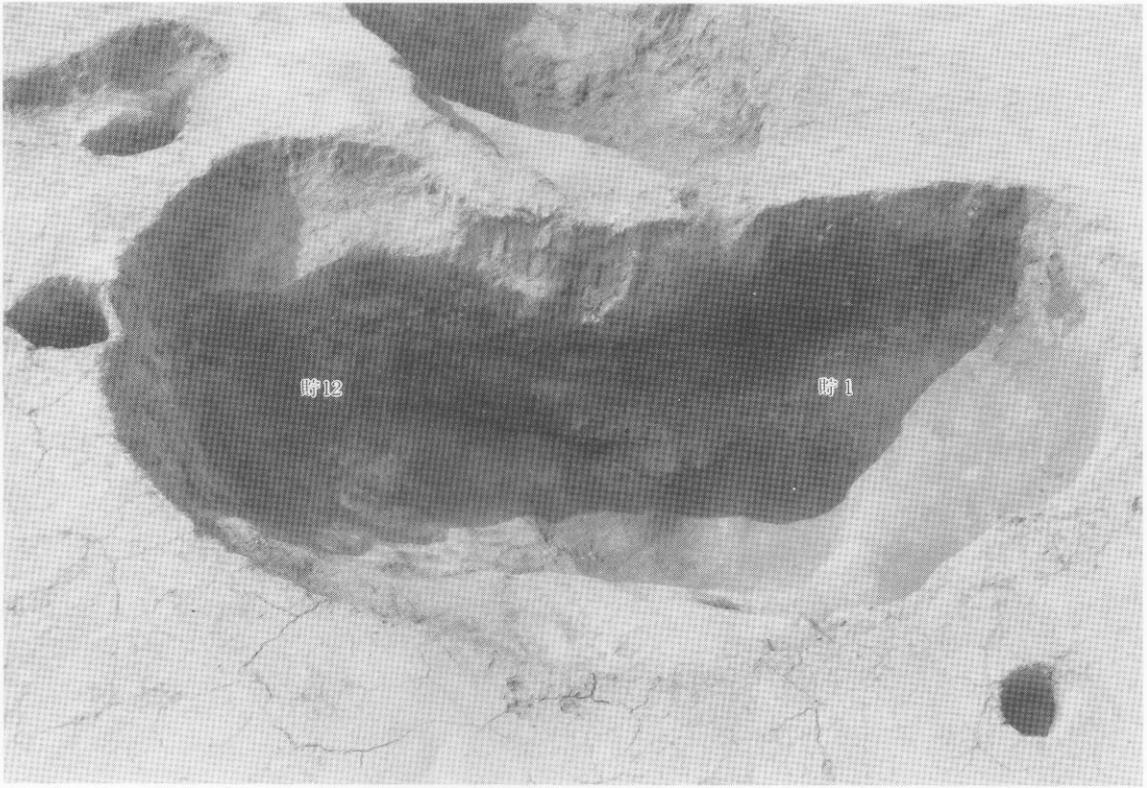
(2) 7号竖穴住居跡屋内貯藏穴



(1) 8号・9号竪穴住居跡と3号・6号・7号貯蔵穴



(2) 10号竪穴住居跡と9号貯蔵穴, 6号土壙



(1) 1号・12号貯蔵穴（南から）



(2) 3号貯蔵穴（南から）



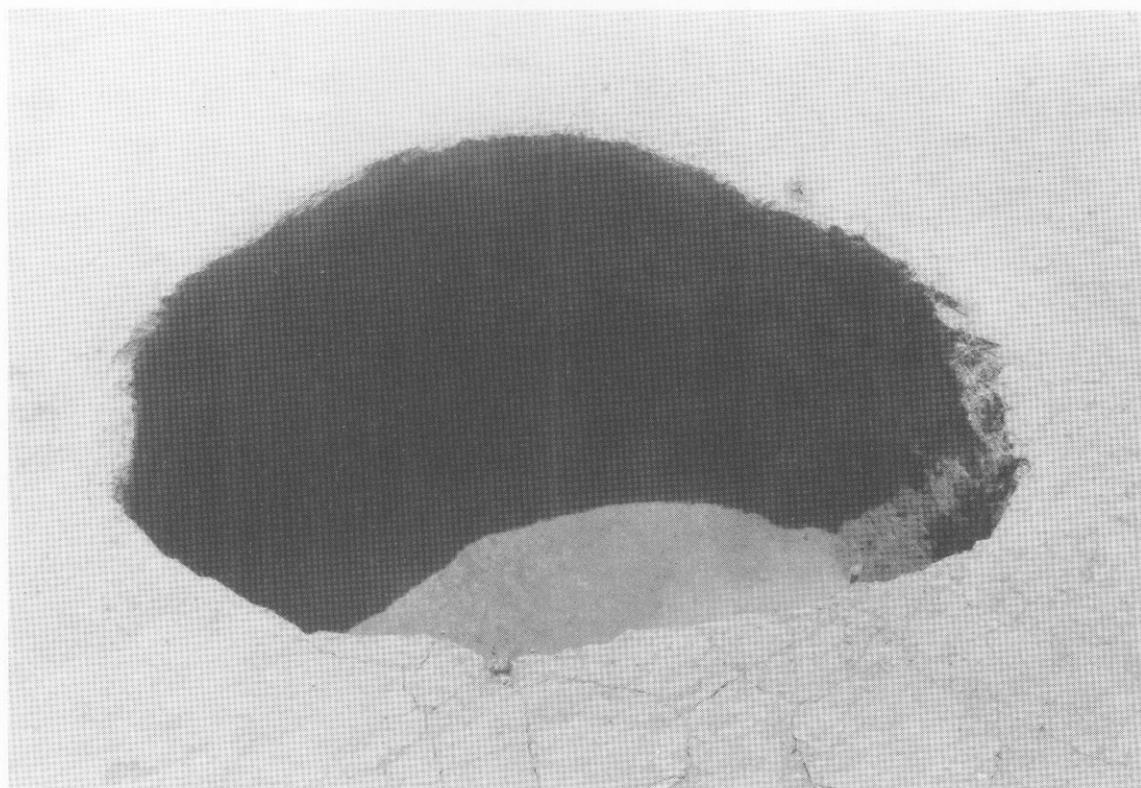
(1) 4号貯蔵穴（北から）



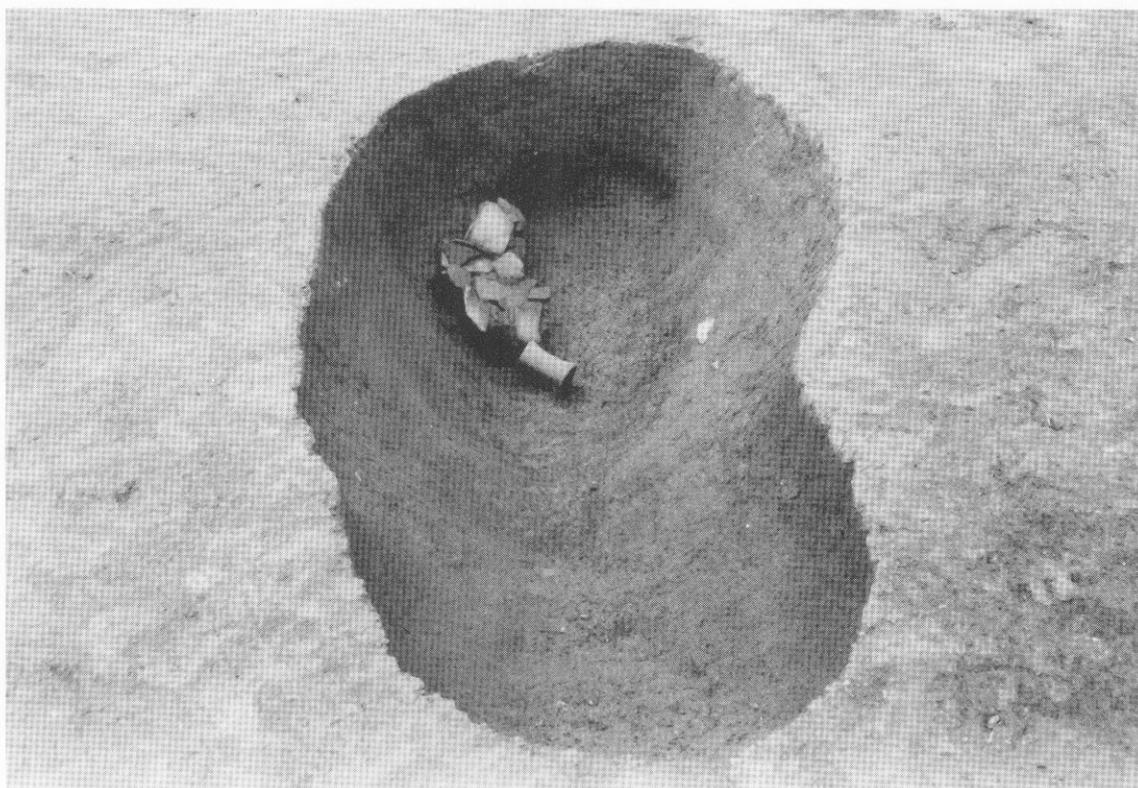
(2) 4号貯蔵穴上層物出土状態



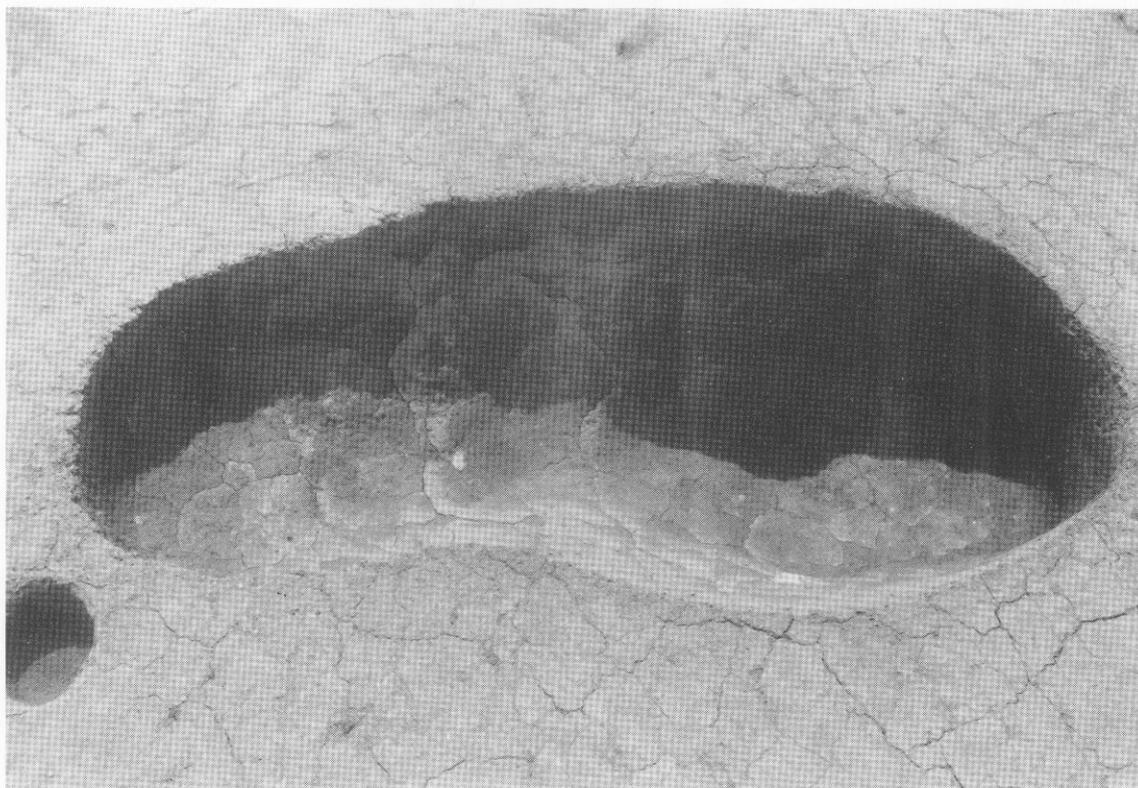
(1) 4号貯蔵穴下層遺物出土状態



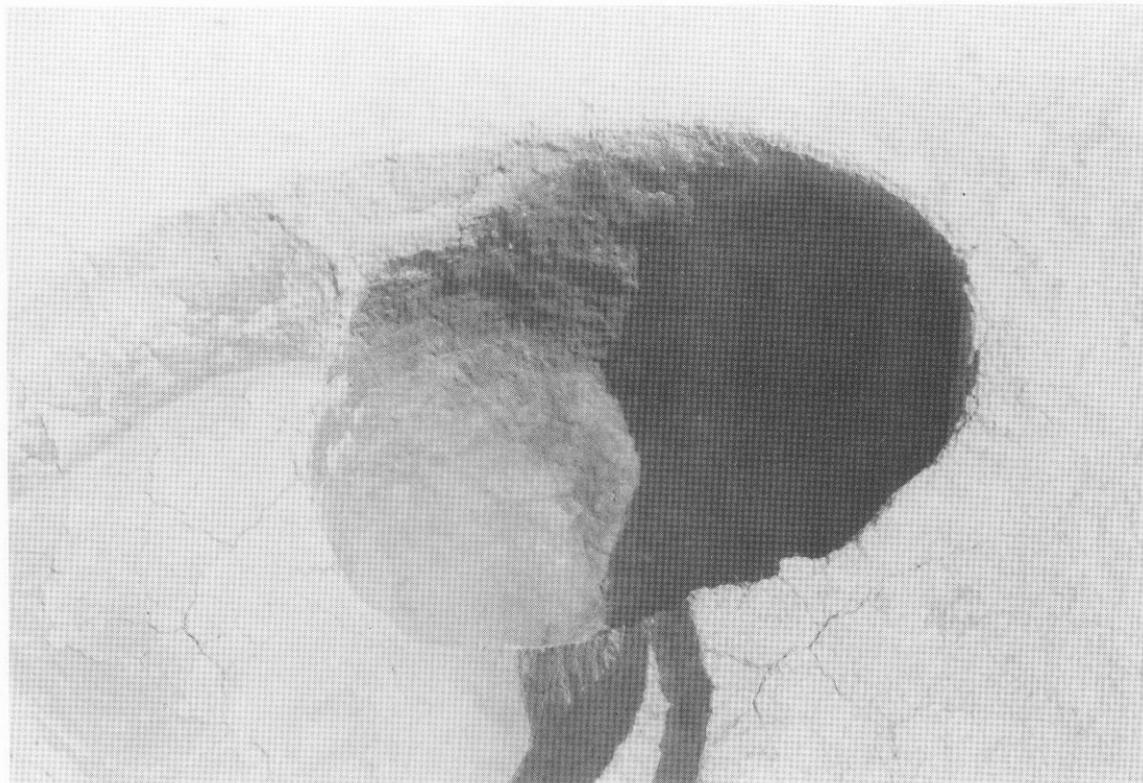
(2) 5号貯蔵穴（西から）



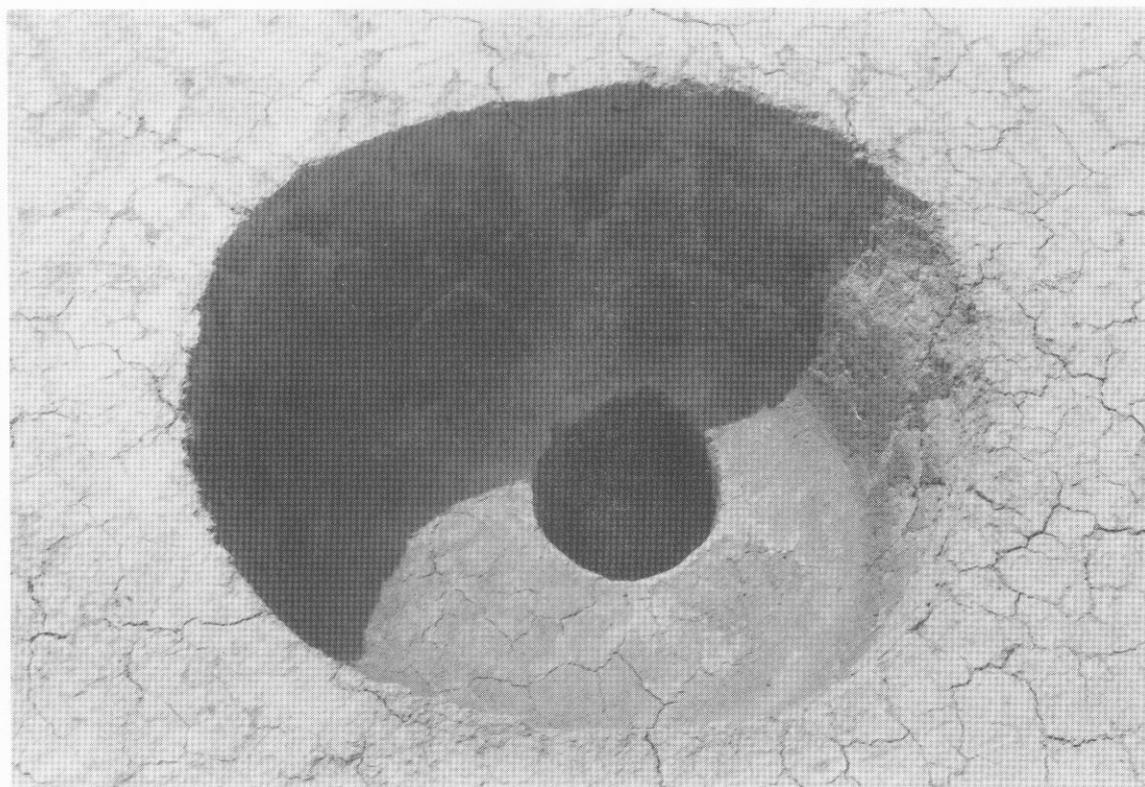
(1) 6号貯蔵穴遺物出土状態



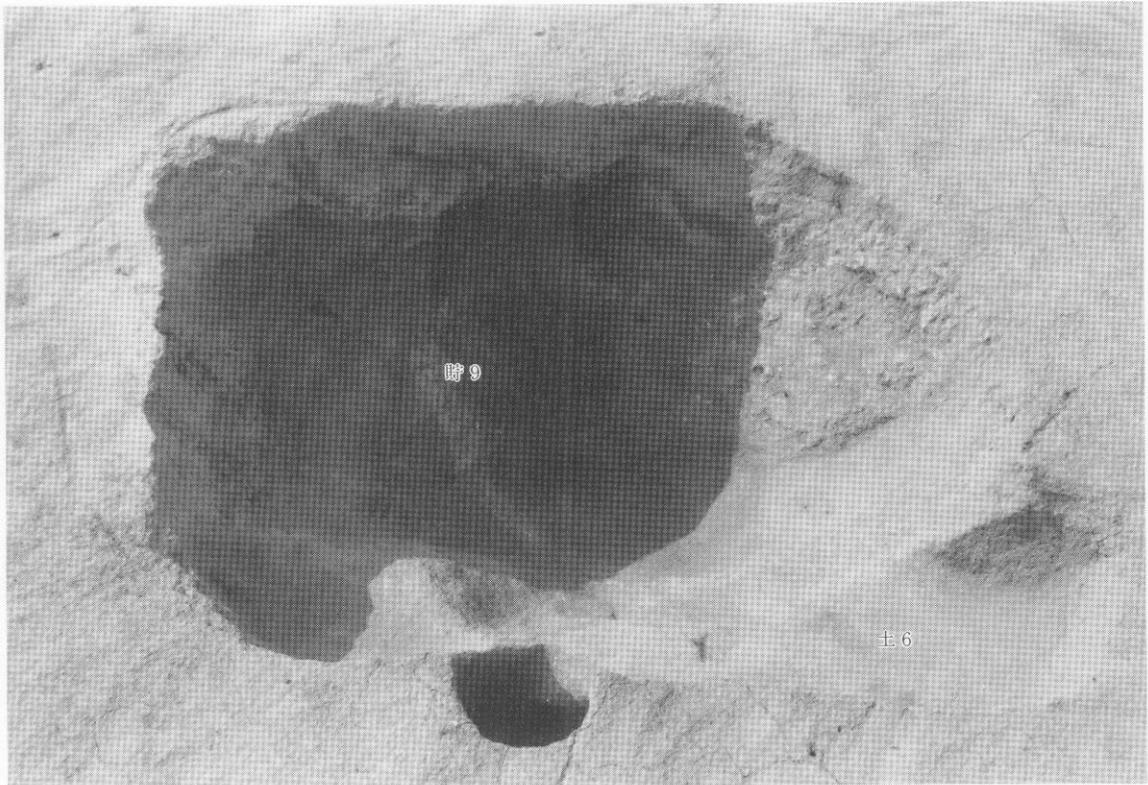
(2) 6号貯蔵穴（東から）



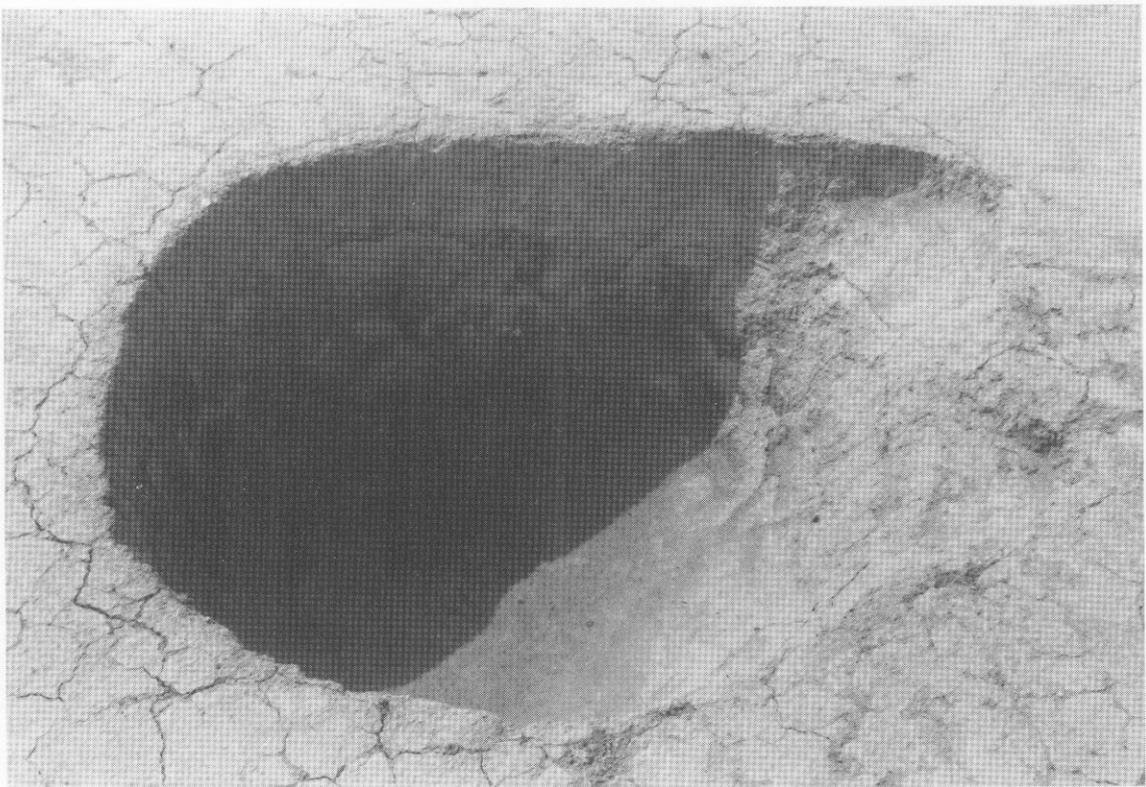
(1) 7号貯蔵穴（北から）



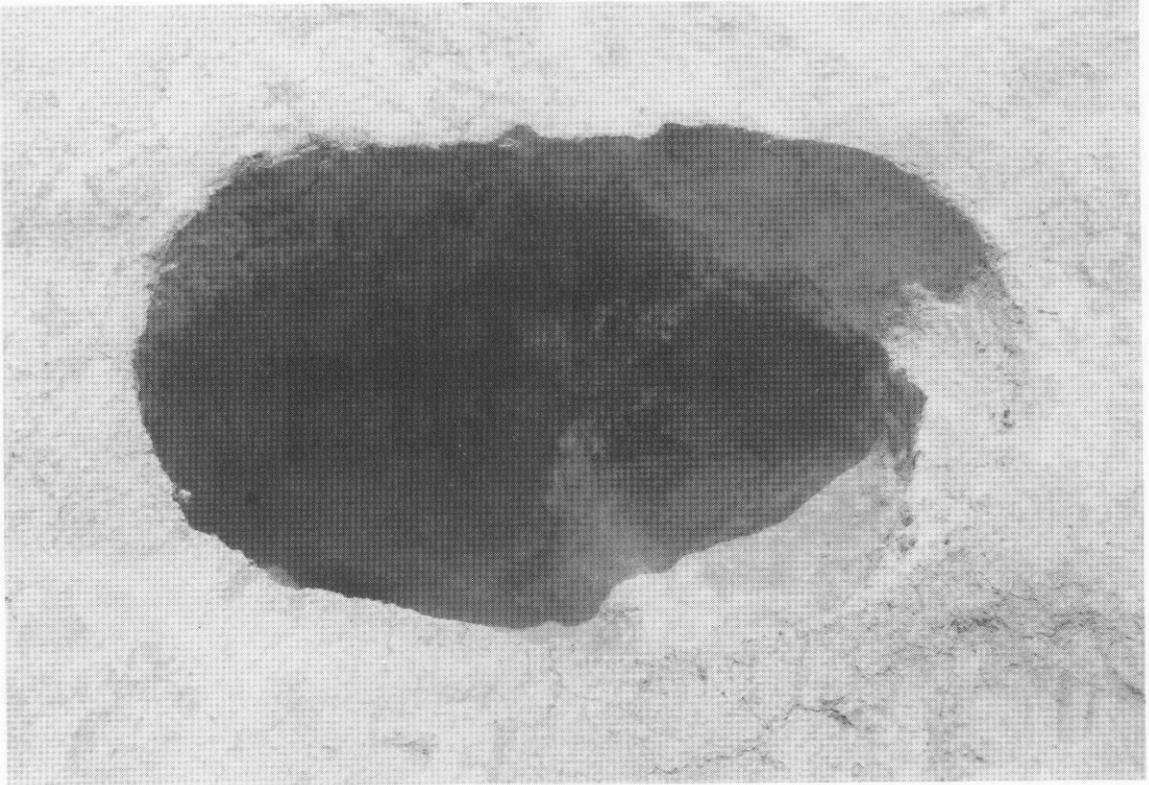
(2) 8号貯蔵穴（南から）



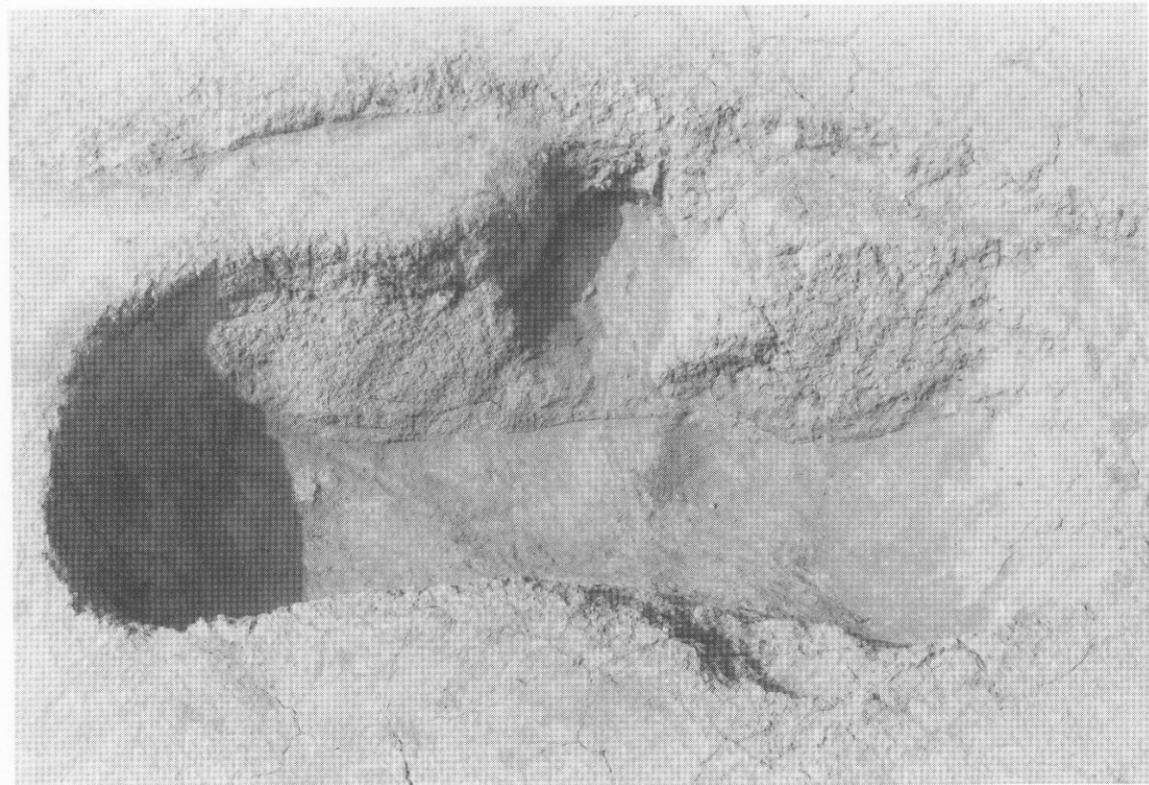
(1) 9号貯蔵穴と6号土壙（南から）



(2) 10号貯蔵穴（南東から）



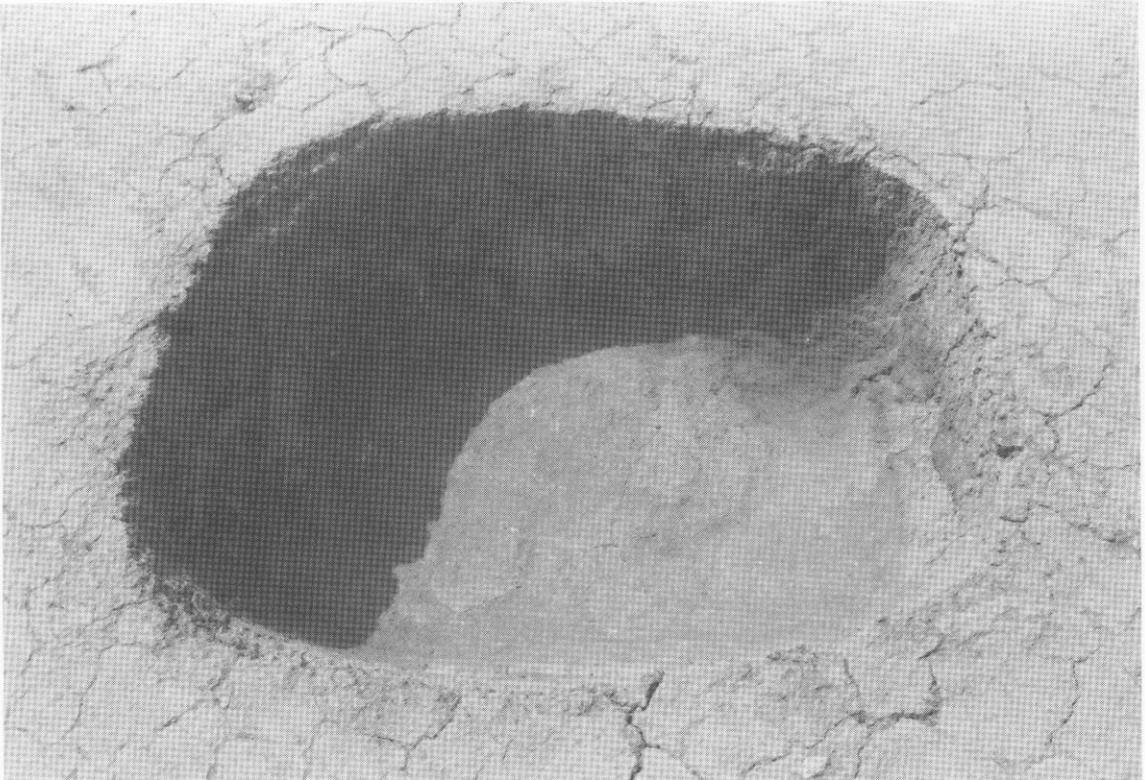
(1) 11号貯蔵穴（東から）



(2) 1号土壙（南から）



(1) 2号土壇（南から）

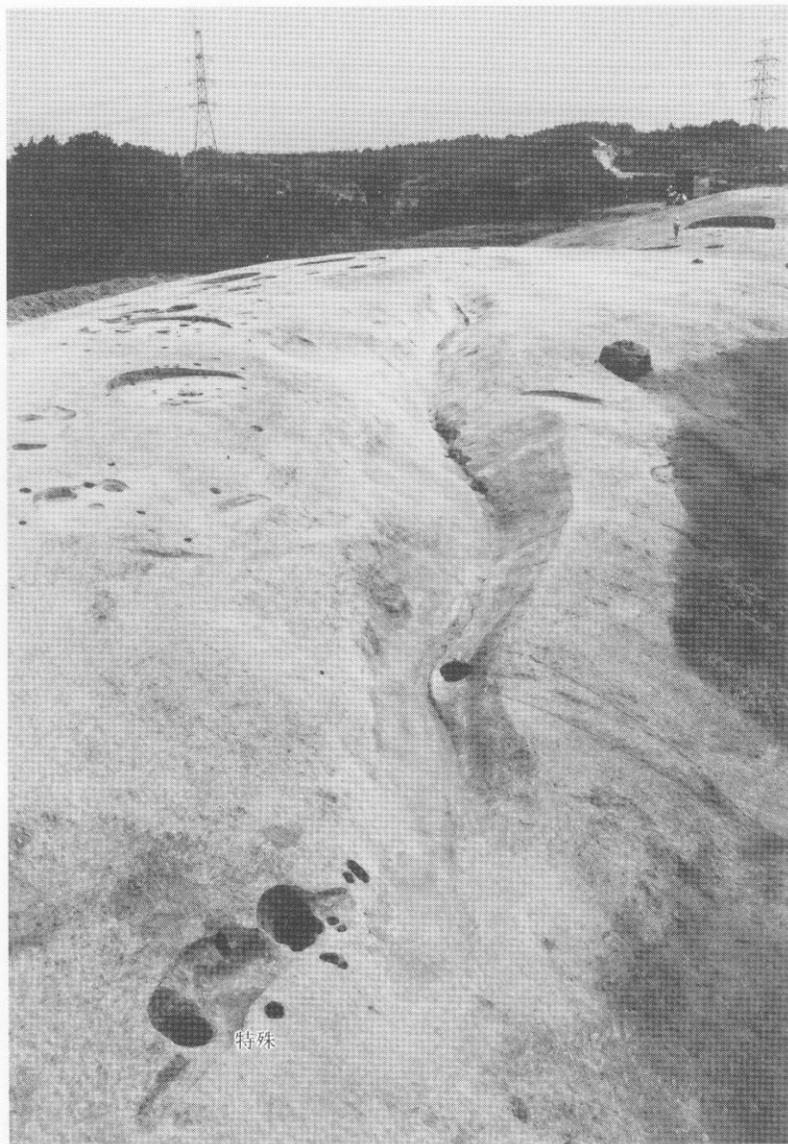


(2) 4号土壇（南東から）

(2) V字溝状遺構

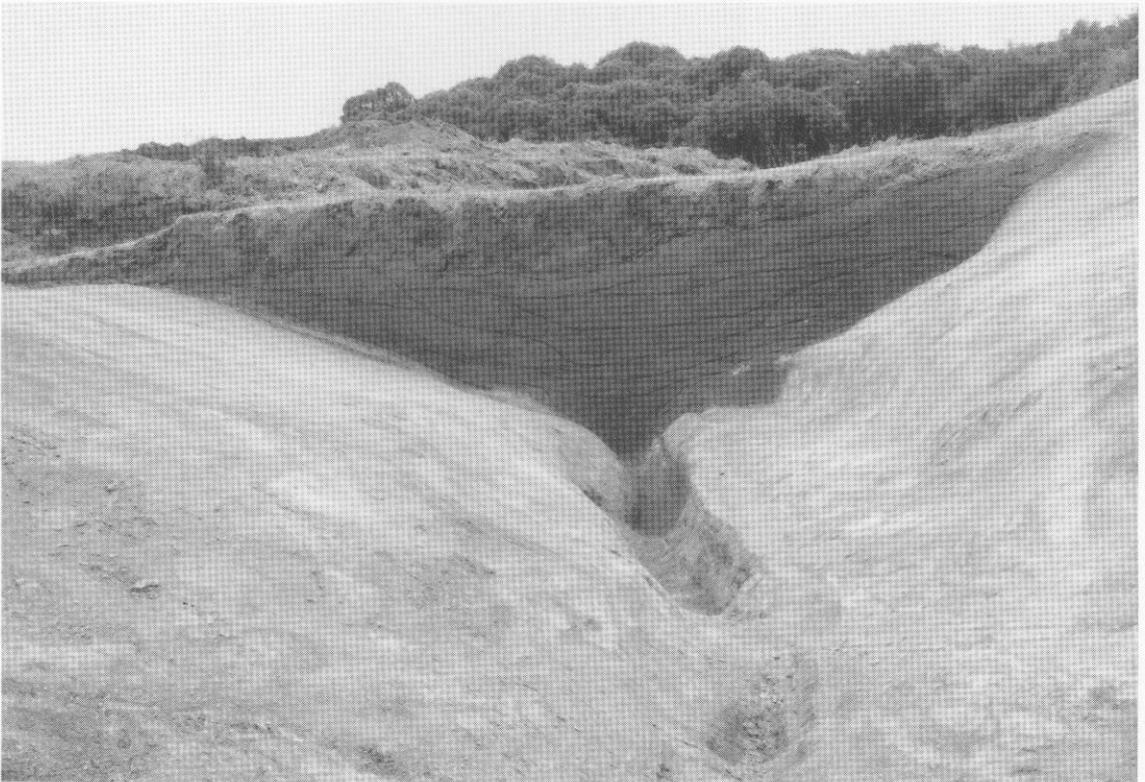


(1) V字溝状遺構と特殊遺構

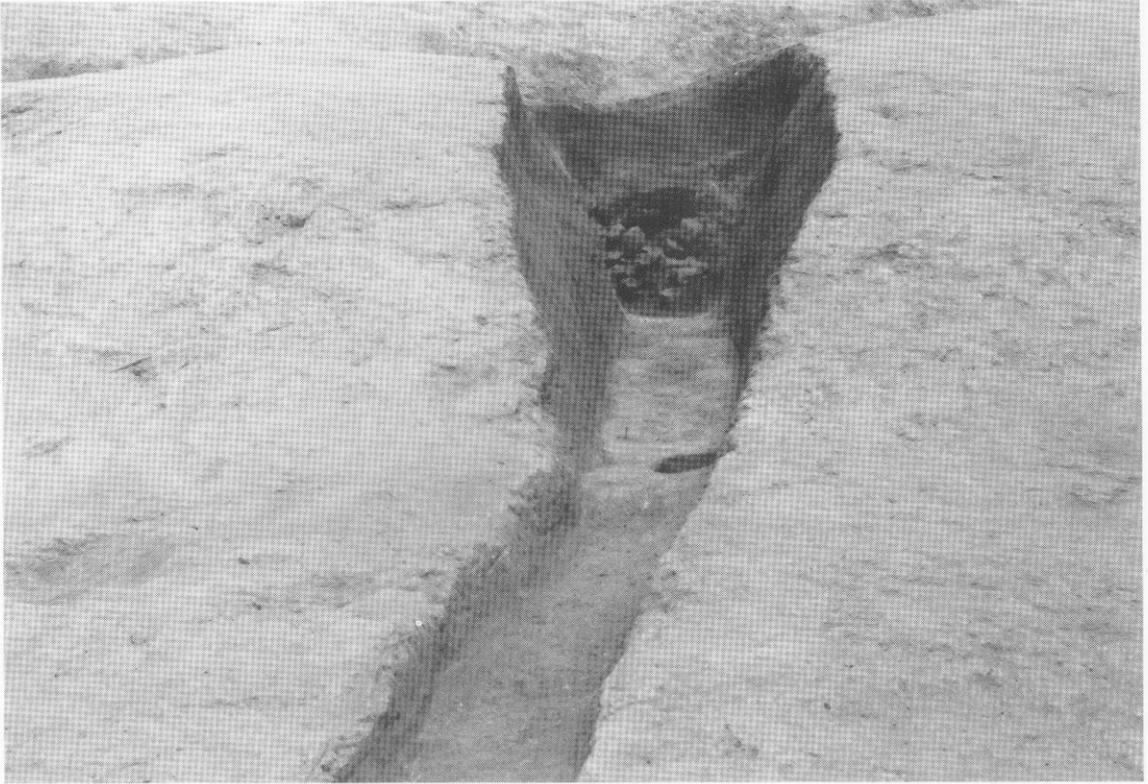




(1) V字溝状遺構（下から）



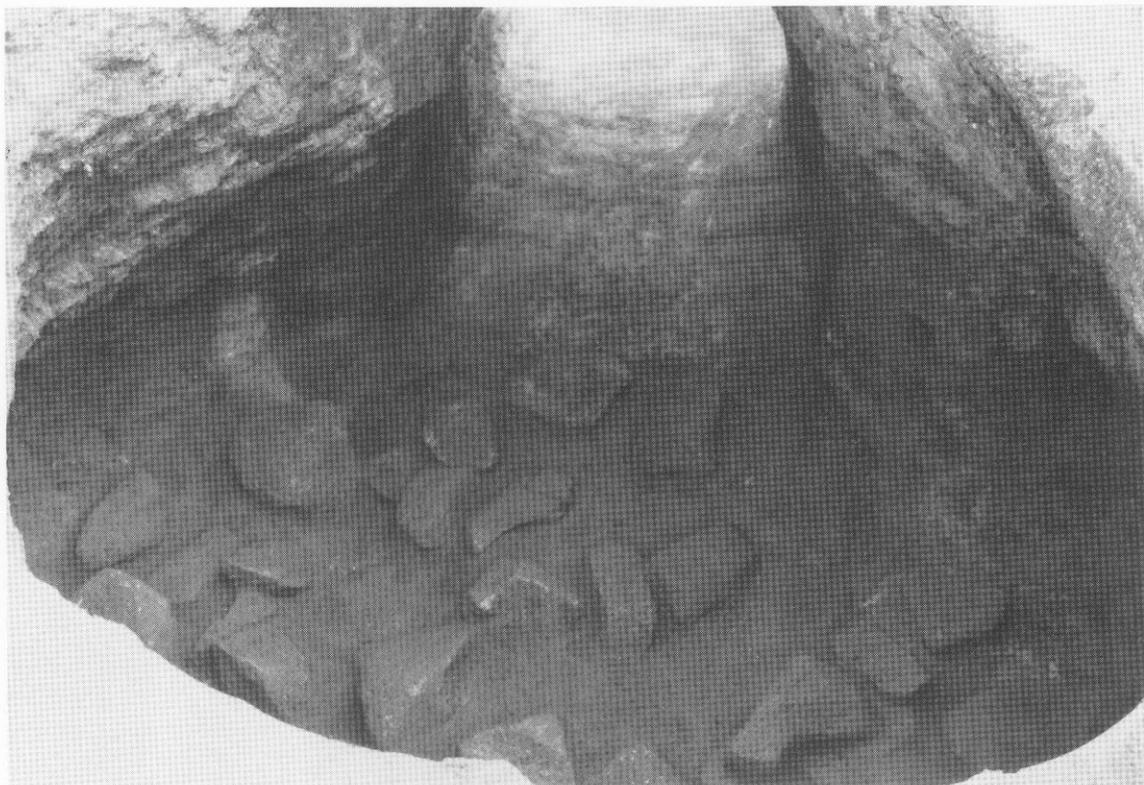
(2) V字溝状遺構埋土状態



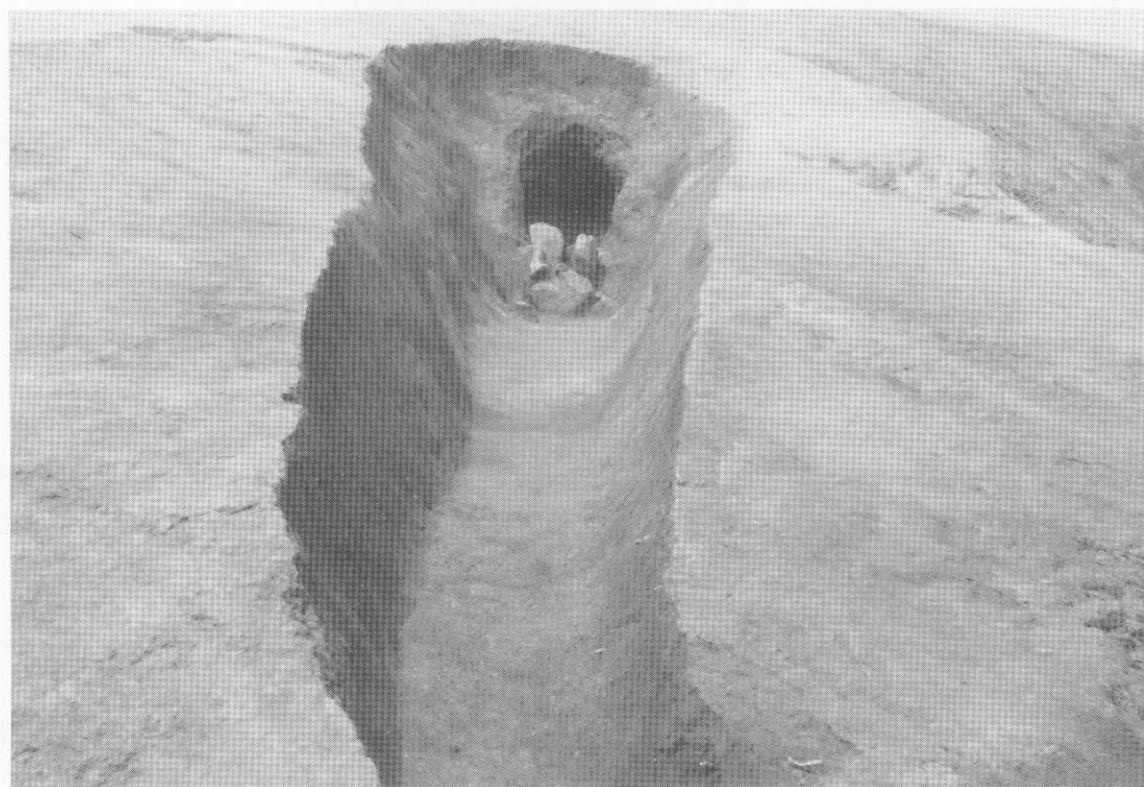
(1) 1号横穴墓（南から）



(2) 墓道から見た玄室



(1) 1号横穴墓の玄室



(2) 2号横穴墓(南から)



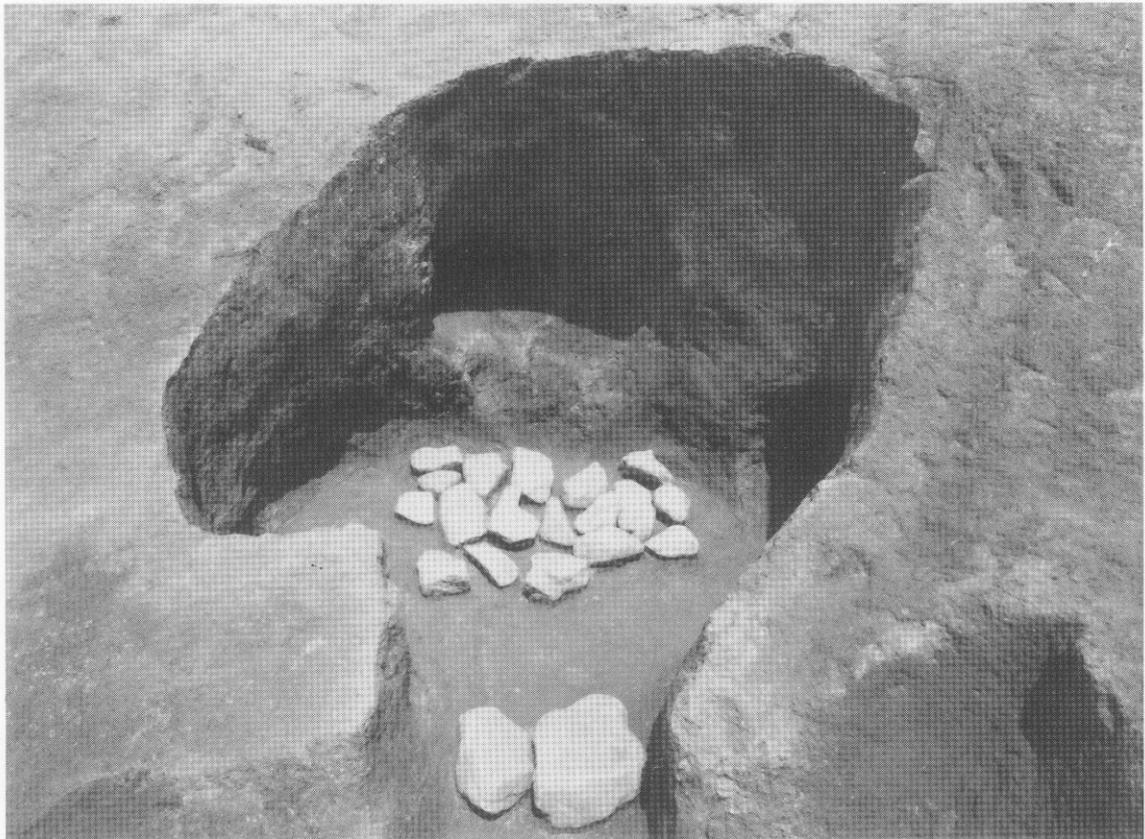
(1) 2号横穴墓の閉塞石と墓道の遺物出土状態



(2) 2号横穴墓の玄室



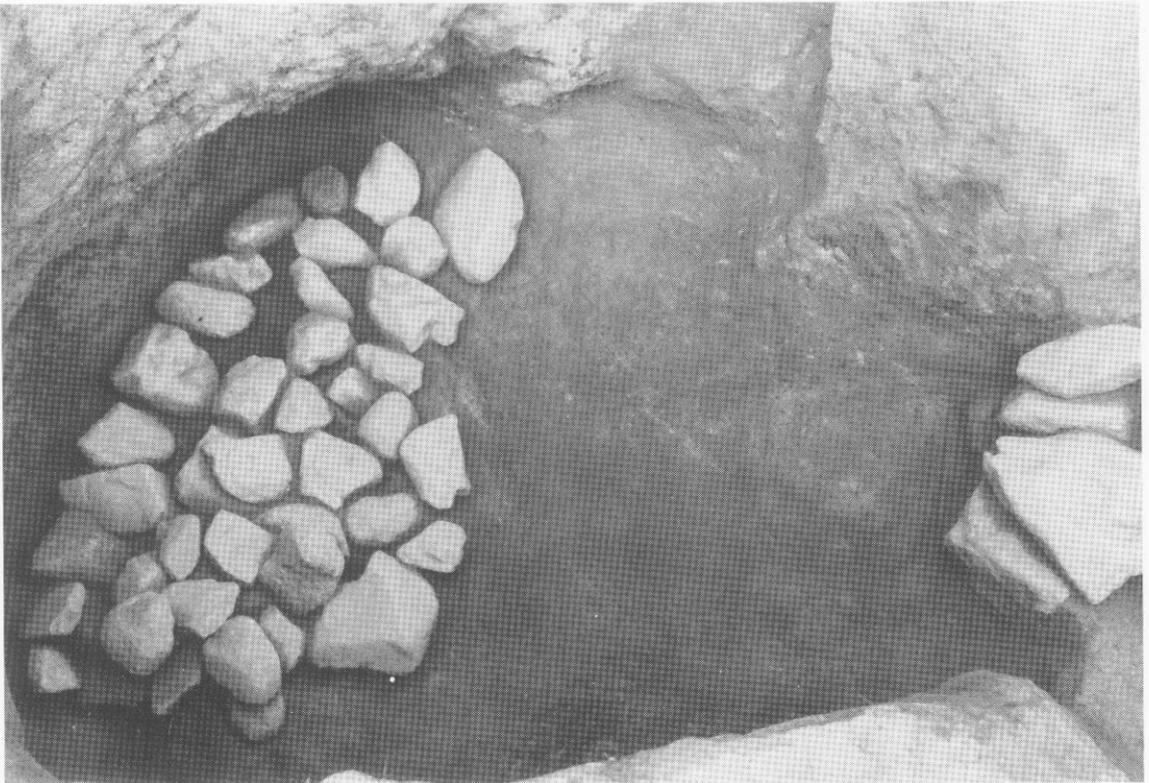
(1) 3号横穴墓（南西から）



(2) 3号横穴墓の玄室



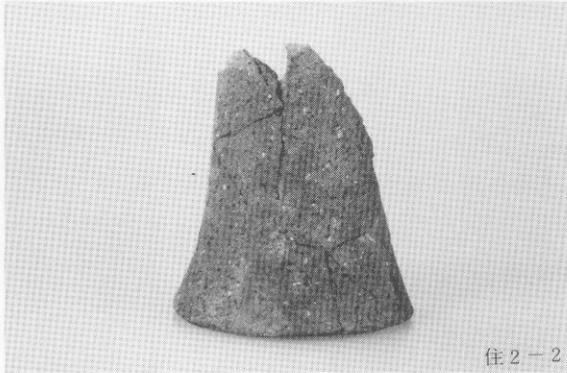
(1) 4号横穴墓の閉塞状況と副室閉塞状態



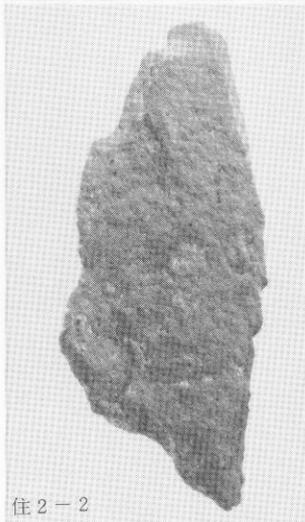
(2) 4号横穴墓の玄室



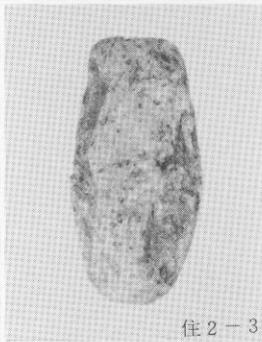
住2-1



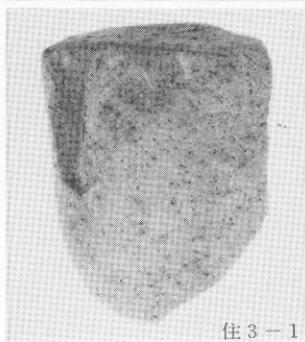
住2-2



住2-2



住2-3



住3-1



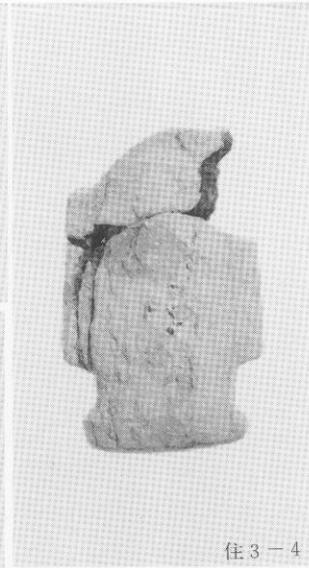
住3-2



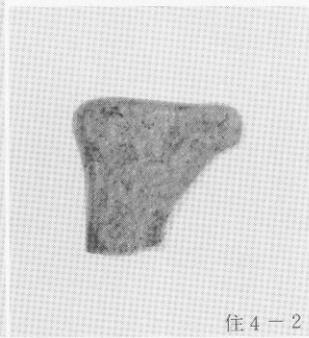
住3-3



住4-1



住3-4



住4-2

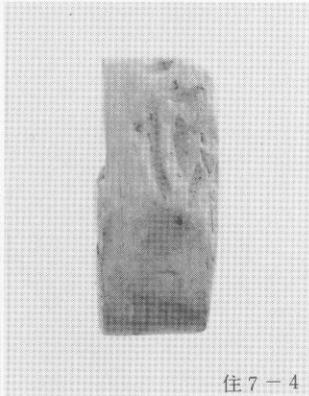
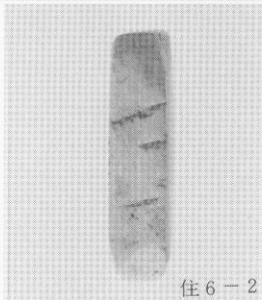
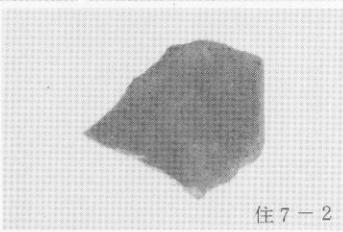
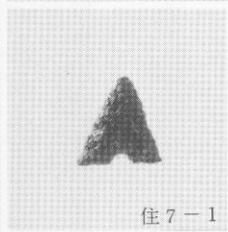
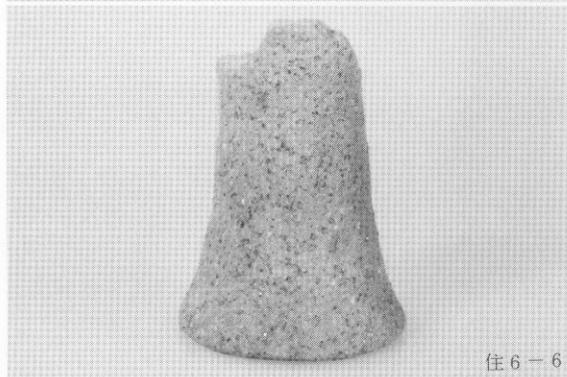
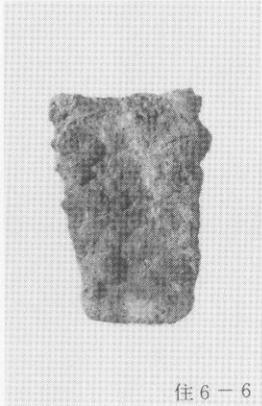
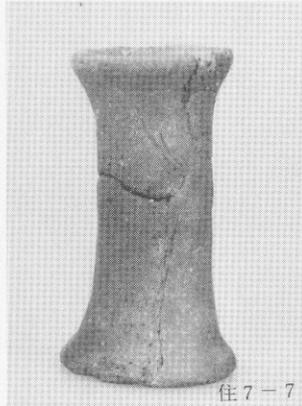
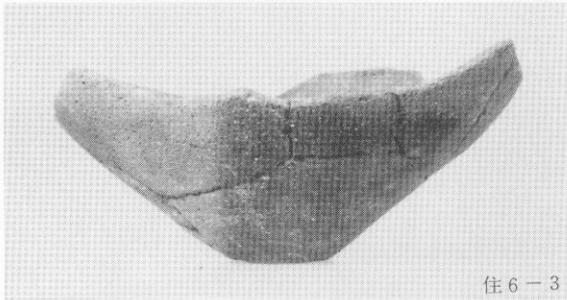
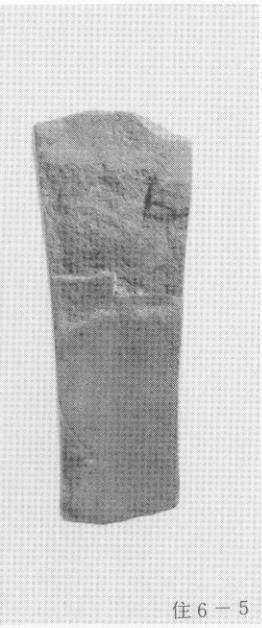
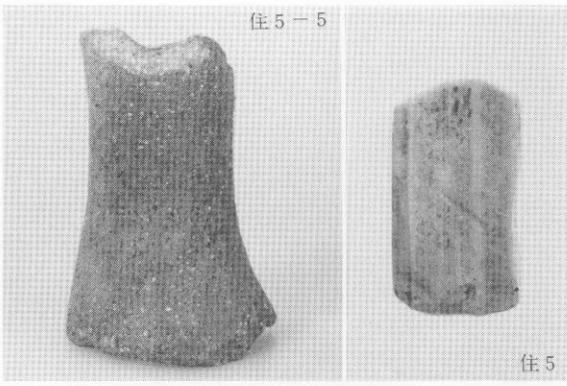


住5-1



住5-3

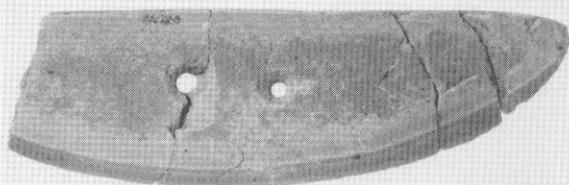
2号~5号竖穴住居跡出土遺物



5号~7号竪穴住居跡出土遺物



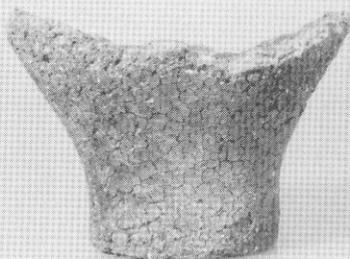
住7-5



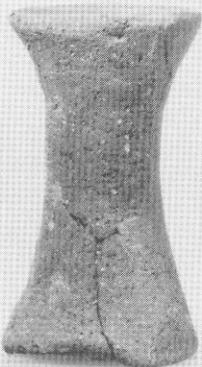
住7-6



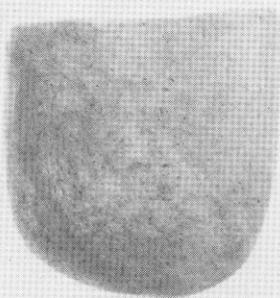
住8-3



住9-3



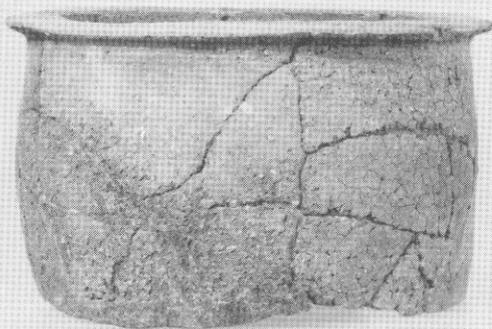
住11-2



貯3



貯4-10

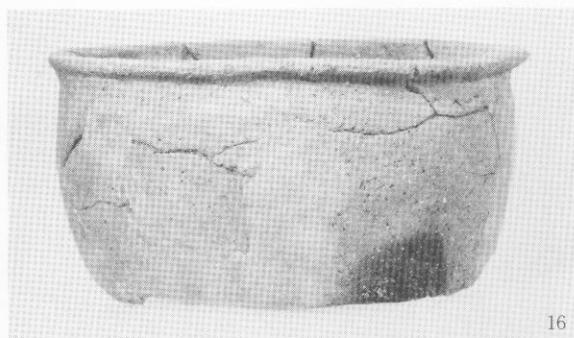


貯4-13

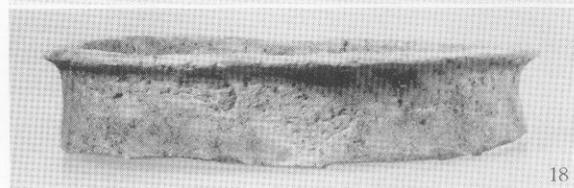


貯4-14

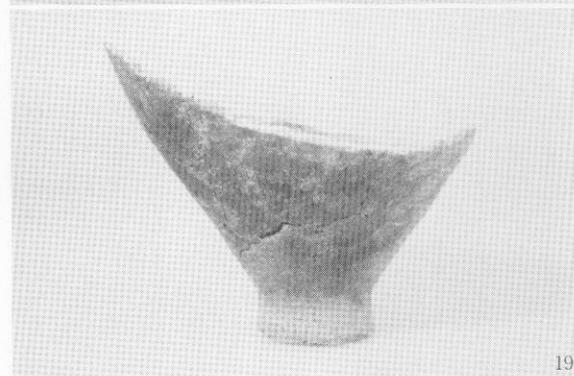
7号·8号·9号·11号竖穴住居跡, 3号·4号貯藏穴出土遺物



16



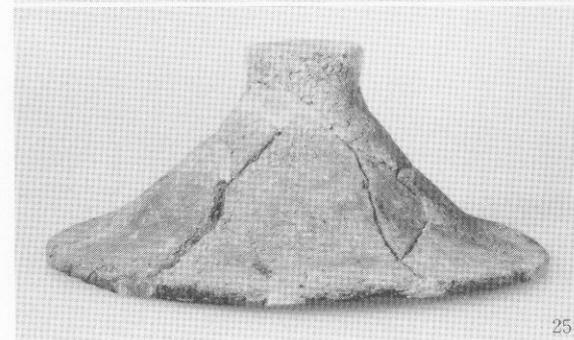
18



19



24



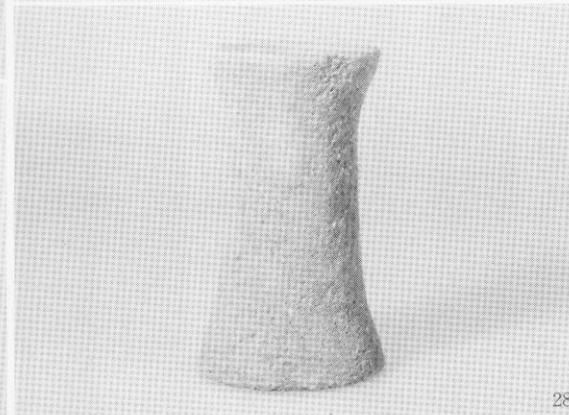
25



26



27



28



29

4号貯藏穴出土遺物



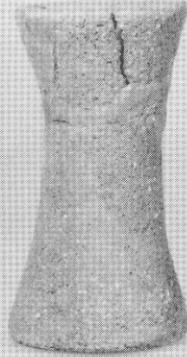
30



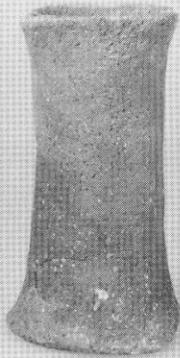
34



31



35



32



36



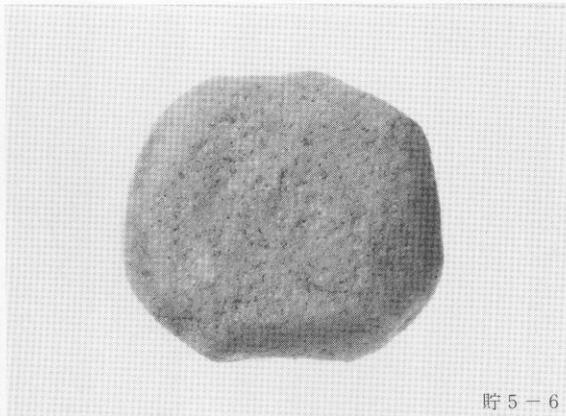
33



37



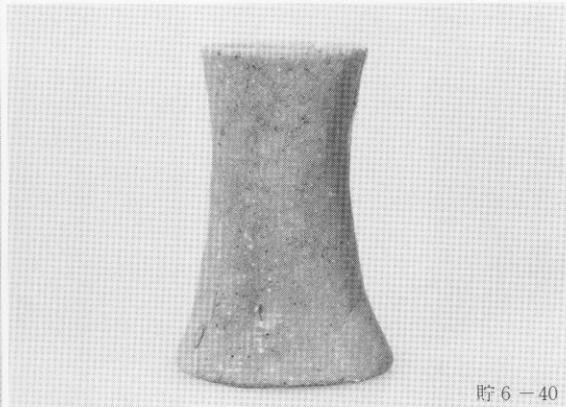
貯4-38



貯5-6



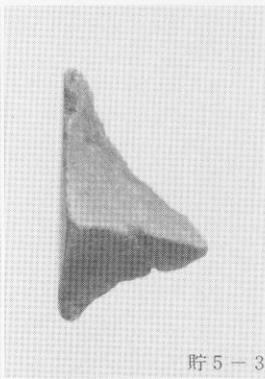
貯4-39



貯6-40



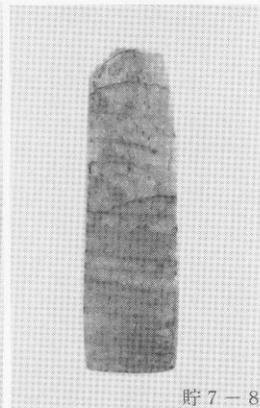
貯5-2



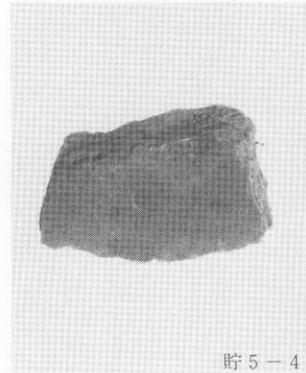
貯5-3



貯6-7



貯7-8



貯5-4

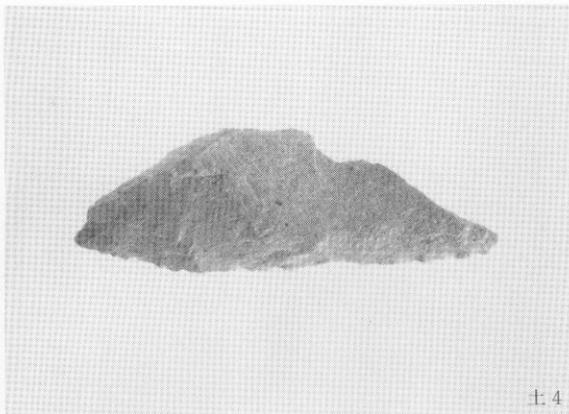


貯5-5

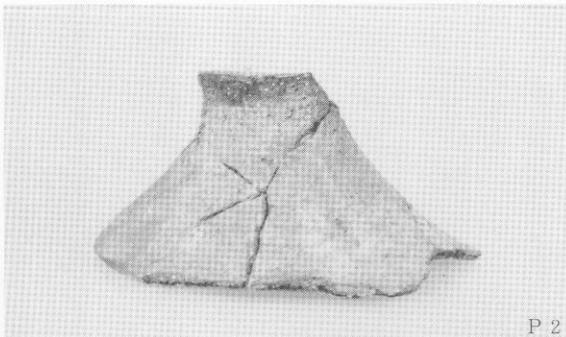


土2-10

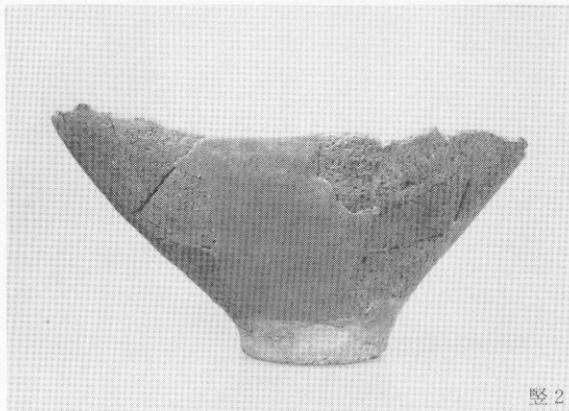
4号~7号貯蔵穴, 2号土壙出土遺物



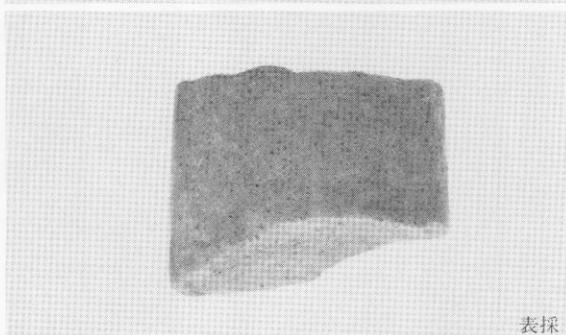
土 4



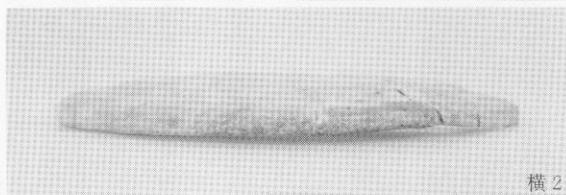
P 2



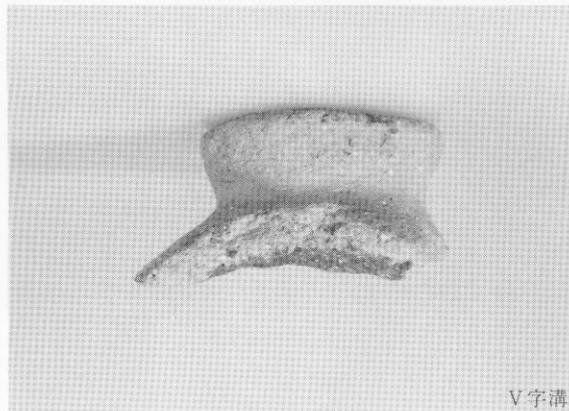
豎 2



表採



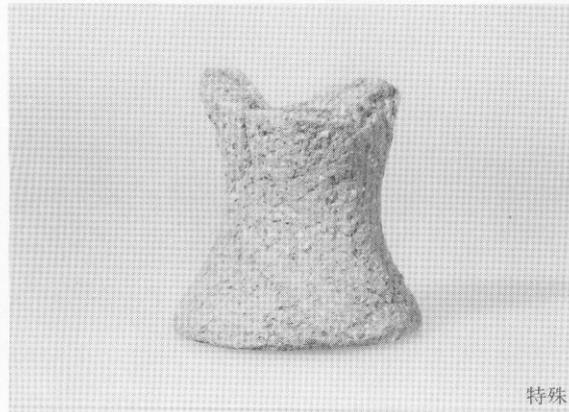
横 2



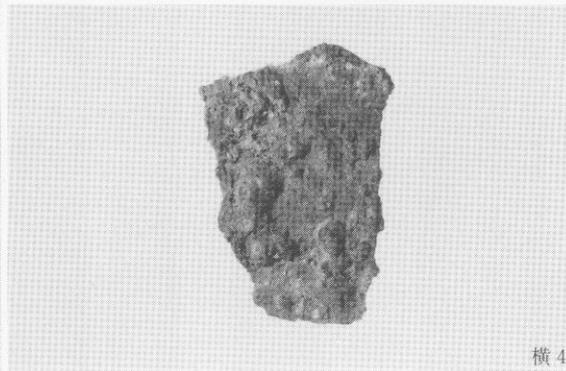
V字溝



横 2



特殊



横 4

4号土壙・2号豎穴遺構・V字溝状遺構・特殊遺構・P 2・表採・2号・4号
横穴墓出土遺物

筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集

合の原遺跡

1986年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7-7

印刷 福岡印刷株式会社



付 図 合の原遺跡遺構配置図